方正友好交流の会　会報 33 号　2021 年 12 月刊

星火方正

～燎原の火は方正から～

旧満洲で迎えた敗戦から新中国建設のなかで　橋村 武司
無言館ノート「あの夏のまま・・・」　横井 幸夫
中国における日本文学の受容　管見
五味川純平「人間の条件」を端緒に　平山 三男
「戦争の見方が変わった」―PTSD の日本兵がいたことを知ってほしい―　黒井 秋夫
語り掛ける言葉をめぐって
『エスペラント―分断された世界を繋ぐ Homaranismo』　森　一彦
「長谷川テル訪問記念の碑」建立募金にご協力を　宮城 恭子　田辺　実

千鳥ケ淵戦没者墓苑

日本の戦没者慰霊施設。日中戦争および太平洋戦争の戦没者の遺骨のうち、遺族に引き渡すことができなかった遺骨を安置している。いわば**「無名戦没者の墓」**である。靖国神社から遠くない所にある。（所在地は東京千代田区三番町である）

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒龍江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正（ほうまさ）友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と人類愛的な友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正（第 33 号　2021 年 12 月刊）　～燎原の火は方正から～

目　次

旧満洲で迎えた敗戦から新中国建設のなかで　橋村　武司　1

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

無言館ノート「あの夏のまま・・・」　横井　幸夫　15

戦争体験の継承　この人にしか語れない喜びと悲しみ　西嶋　拓郎　19
奈良県香芝市から「満州」・シベリアについての発信

中国における日本文学の受容　管見　平山　三男　26
五味川純平「人間の条件」を端緒に

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「戦争の見方が変わった」　黒井　秋夫　31
―PTSD の日本兵が存在したことを知ってほしい―

「満蒙開拓団」の生き証人、林正之さんの証言　千田　優子　35

方正県以外にもう一基「日本人公墓」がある　末広　一郎　39
―水戸市河和田町本法寺境内に―

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「長谷川テル訪問記念の碑」建立募金にご協力を　宮城　恭子　45
田辺　　実

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

人類は一つの共同体なのだ！　椎名　鉄雄　50
『エスペラント　分断された世界を繋ぐ HOMARANISMO』（大類善啓著）に思う

エスペラントの可能性に思いを巡らしつつ・・・　滝永　　登　52
『エスペラント』（大類善啓著）を読んで

語り掛ける言葉をめぐって
『エスラント　分断された世界を繋ぐHOMARANISMO』　森　一彦　56

エスペラントの内在思想に迫る　初岡　昌一郎　60
『エスペラント　分断された世界を繋ぐHOMARANISMO』を読んで思う

心優しき「ホマラニスモ」への誘い
世界語としてのエスペラントに魅せられた群像に触れて　木村　知義　62

『エスペラント』書評　瀧澤 弘和　読売新聞　65

「私が書いた一冊の本」（日本エスペラント協会『エスペラント』誌）　大類　善啓　66

『エスペラント　分断された世界を繋ぐHOMARANISMO』出版を巡って　〃　67

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

家族失った元開拓団員 最後の慰霊　信濃毎日新聞　68

８月、忘れてならないこと　大浜敏夫　八重山毎日新聞　69

手記『満州開拓団棄民の私』を昨年出版　しんぶん　赤旗　70

満蒙　悲惨きわまる逃避行　しんぶん　赤旗　71

元義勇軍　満州で失った青春　朝日新聞　72

旧日本軍兵士とトラウマ　中國新聞　73

きょう柳条湖事件90年　満州にソ連侵攻、逃走中に衰弱　東京新聞　74

満州事変90年　歴史を複眼視する重み　朝日新聞　75

満州事変勃発90年　一翼担わされた子どもたち　東京新聞　76

９・１８「満州事変」から90年　内田雅敏　東愛知新聞　78

『幻の村　哀史・満蒙開拓』書評記事　東京新聞　80

地下道の７歳　強烈な飢えの記憶　朝日新聞　81

負の記憶　風化させない　朝鮮人虐殺の証言集　30 年ぶり復刊　東京新聞　82

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

封印されたビデオ　東京大空襲 体験者の証言（6 回の連載）　東京新聞　83

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

元日本兵墓地 清掃 50 年　ロシア・ナホトカ　祖母と 2 代のボランティア　東京新聞　90

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

台湾の人権問題で闘った日本人たちがいた！　大類 善啓　91

台湾の民主化　支えた街の日本人　朝日新聞　94

知らされざる人権弾圧の歴史　日本の世論はなぜ黙殺するか？　人類愛善新聞　95

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

＜昭和 20 年夏、満州で起きたことを今こそ語ろう＞

澤地久枝×上野千鶴子　『婦人公論』(2021 年 8 月 24 日号)　102—96

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

――「方正友好交流の会」へのお誘い――　方正友好交流の会　103

報告／編集後記　104

旧満洲で迎えた敗戦から新中国建設のなかで

橋村 武司

≪解説：本稿は、2021 年 6 月 6 日（日）、方正友好交流の会・第 17 回総会後に行われた橋村武司（はしむら・たけし）さんの講演の記録である。橋村さんは、1932 年（昭和 7）長崎県対馬生まれ。8 歳で父を亡くし、1943 年（昭和 18）、母と妹と 3 人で満鉄勤務の伯父を頼ってハルピンに渡った。

その後、中学 1 年で終戦を迎え、1950 年、中国に留用された元満鉄社員の義父の家族とともに西部の甘粛省・天水に鉄道新設（天蘭線）のために移住、現地の中学・高校で学んだ。

1952 年に天蘭線は開通した。この年、中国より日本に引き揚げ、1960 年中央大学工学部電気工学科卒業後、シチズン時計㈱入社、水晶時計、事務機器、健康機器の研究・開発に従事。その後、㈱アマダに入社し、レーザ加工機の研究・開発、中国進出計画に携わり、1994 年には深圳地区で委託加工工場を立上げた。

1995～97 年 JODC（海外貿易開発協会）専門家として北京清華大学精儀系でセンサーの技術指導に当たる。日本国内では地域産業振興を促進。2000～2009 年北京八達嶺鎮で防風固沙の植樹に、北京地理学会と共同活動。中国技協節能建築技術工作委員会 外事顧問として建築物の省エネ・環境対策に参画。現在、天水会会長、龍騰グループ代表。日中人材交流、技術移転、文化交流など幅広く活動されている。（大類善啓記）≫

対馬からハルピンへ

ご紹介いただきました橋村です。本日は、第 17 回方正友好交流の会総会、おめでとうございます。思い起こすともう 76 年前になりますか、方正の地で犠牲になられた方々を偲んで、まずは黙祷を捧げたいと思います。ご唱和ください、黙祷・・・。

先ほどのご紹介にもありましたが、敗戦時に私は中学一年でした。今年、つい先月ですが 89 歳になりました。まあよくここまで生きて来られたと感慨無量です。

何はともあれこれからの日中友好、そして何よりも大事なのは「平和」だと思います。これを何としても貫いていきたい、というのが基本的な考えです。それを皆さんと一緒に、活動していけたらありがたいなと思います。

それから、私の経験というのは、恐らく皆さんのご経験から比べれば、はるかに軽いと感じられるかもしれません。質が異なるということでしょうか。その辺も含めてお話させていただきます。よろしくお願いいたします。

まず、本日お話したい内容は三つあります。

一つは、私は敗戦後、留用になり 8 年間中国に残りました。その時の記録、記憶をお話します。それはここにあります自分史の一部ですが、この本に書いてあります。

二番目は、そこで経験したこと、やったこと、そこから何を学び、何を教訓として生きてきたか、です。よく、「歴史は炭鉱のカナリア」と言われます。そのことについてお話します。

三番目は、私にとって中国は第二の故郷です。中国とのこれまでの交流の経過と、これからの予定をお話したいと思います。主に天水会の活動になります。

この地図は（注：会場の前面にスライドが映し出されている）皆さんもうお馴染みだと思います。開拓団の入植された場所を見ますと、ほとんどが旧満洲の北東、この辺に集中しています。方正はその中心にありました。

私が中国で暮らした場所ですが、敗戦時はハルピンでした。翌年留用になり、林口へ行きました。それから牡丹江、そして佳木斯、さらには鶴崗、ここは炭鉱ですね。といったところを主に歩きました。

私の出身は、長崎県の対馬です。対馬をご存知でしょうか。朝鮮半島と九州との間にある島です。そこで生まれました。家族は、お袋と妹二人の四人です。親父は、男性ばかり 7 人兄弟の次男坊でした。親父は対馬でクリーニング店を経営していましたが、大腸がんのため 33 歳の若さで亡くなりました。そのため、私たち家族は、当時満鉄に勤めていた伯父を頼ってハルビンへ行くことになりました。

そして、対馬から朝鮮の釜山まで船で行ったのですが、私が船の中で一番印象に残っているのが、満蒙開拓団のお嫁さんとして渡る花嫁さんたちが何人か乗っていたことです。子供心に、華やかで羨ましいなあという印象でした。そして釜山から北上して、ハルピンに着きました。

ハルピンはさすがに「東洋のパリ」と言われる大きな街。一番驚いたのは、まずトイレの音ですね。水を流して処理するなんて、当時の日本では考えられませんでした。それからもう一つ驚いたのが、鼻の高い外国人が昼間に堂々と歩いている（笑）。これにはびっくりしました。日本では、外国人は皆スパイだと教育されていた。これにも驚きました。

それから、私は長崎弁、いわゆる「〜ばってん」ですね。これが非常に珍しがられました。ところがどうしたわけか、ハルピン放送局の詩の朗読に選ばれて、二か月間の特訓を受けてやっと標準語が話せるようになりました。このときの詩が何の詩だったかというと、昭和 19 年に、初めて瀋陽・大連の辺りが B29 の爆撃を受けました。それを詩にしたものです。詩の最初は、「敵機はついに満洲を襲った・・・」という出だしでした。

ソ連軍の入城、終戦、八路軍

昭和 20 年春に、私は花園国民学校を卒業しました。昭和 20 年にできたばかりの講堂でした。私たちが一番最初で一番最後に、その講堂を使った卒業生です。後で聞いたところ、戦後ここが難民の収容所になったそうです。

8月9日前後を思い出しますと、世の中がだいぶ慌ただしくなり、いわゆる根こそぎ動員が始まりました。当時、私は中央銀行の宿舎に、お袋の勤めの関係で住んでいました。そこに住んでいた、だいたい部長さん以下の方は全員召集されたようです。その頃のうわさで、ソ連の落下傘部隊が降りてくると。中銀の宿舎は飛行場の近くにあったので、降下に備えろと防空壕にもぐりました。世情が慌ただしくなったので、その宿舎では危ないと、市内にある中銀の本店に移って宿舎にしました。

8月13日頃です。国民党の軍隊がやってきて、銀行の屋根の上の日の丸を引き摺り下し、代わって青天白日旗を立てました。すると、日本軍がやってきてまた日の丸に差し替える。といういざこざがその辺から始まりました。穏やかではないな、という状況がわかってきました。

そして、ソ連の部隊がやってきました。終戦前です。俗説では“囚人部隊”と聞きましたが。夜な夜な酔っぱらってハーモニカを吹きながら、中には抜刀してダンスをしたりしていました。そして「ダワイ！ダワイ！」（注：寄こせの意）と略奪に来ました。ところが、ぼくらには時計とか万年筆などなかったですよね、戦時中は。ですから差し出すものがない。そうすると最終的に彼らは女性を要求してくるというのが一連の騒ぎで、これが毎夜のように続いていました。

そのうち正規軍が来てからは、酔払った兵隊が押しかけてくると、ぼくらはゲー・ペー・ウー(GPU)＝憲兵隊のような組織へ駆け込んで何とかして欲しいといって難を逃れました。しかし実際には、いろいろな犠牲者の方がおられます。

一人印象に残っているのが、赤ちゃんを抱えた中年のご婦人でしたが、ソ連兵が拳銃を突き付けて来いという訳です。ところがこのご婦人は、子供を抱えて、まったく動かなかったのです。微動だにしない。その後ろに私は座っていましたから、拳銃が私に向けられているようで、怖くて仕方がなかった。そのご婦人を助けるとか、そういうことは、私はまったくできませんでした。自分自身が怖かった。ソ連兵はそのまま、その婦人に何もしないで引き上げました。

その宿舎も危ないということで、今度は中銀の独身寮に移ることになり、お袋と私、先ほどの微動だにしなかった親子と四人で、リュック一つを持って独身寮を目指しました。お袋の判断で、大通りは危ないから裏通りを行くことにしましたが、結果的に逆目になりました。道里公園というところで20人くらいの中国人に取り囲まれて、リュックを取り上げられてしまいました。一方、大通りを堂々と人力車に荷物を積んで移動した人たちは、無事に着きました。ですから、こうした非常時にどう判断するか、非常に大事ですね。自分たちの経験からどう決断するかもありますが、私が一番感じたのは情報の大切さです。

いよいよ15日には、その独身寮の部屋で玉音放送を聞きましたが、雑音が多くて何を言っているのかさっぱりわかりませんでした。ただ夕方になって、どうも日本は負けたらしいとわかりました。そして驚いたことに、その15日を境にして、天下はひっくり返り

ました。例えば、その独身寮にも中国の方が使役などで雇われていましたが、立場は逆転しました。それは本当に見事でした。昨日まで、へこへこしていた人が、今度は逆に我々を突き飛ばすような態度になった。

そして宿舎の横を、日本の捕虜の人たちが通るようになりました。捕虜の人たちは本当に惨めでした。飢えているから食べたい。お金を私たちに渡して、何か買ってくれと。我々もお金をもらっても、買うものもない。独身寮の守衛所のところに小さな売店がありましたから、そこでお菓子を買ってあげましたが、兵隊さんたちはそれを非常に欲しがっていました。それまでは日本の兵隊さんは強いと思っていましたので、非常に惨めに感じました。落差があまりにも大きかった。

それから 15 日過ぎに、今度は皆さんどんどん避難して独身寮にも来るようになりました。例えば領事館の方々とか。でもそういう人たちは、かわいそうに次々に亡くなっていきました。逆に言いますと、お気の毒ではありますが、我々庶民のほうがしぶとかったということです。

私も例によって、タバコの立ち売りをやりました。もう冬でしたが、寒いというより痛いのです。ですからいつも足踏みをしていないと耐えられない。ソ連の将校の中には、タバコを買ってもお釣りはいらないと言ってくれる人もいました。タバコだけではなく、大福餅なども売りましたが、これは儲からない。余ると自分で食べられるのでこれは売りたくないと。

しばらくして、別れ別れになっていた伯父たちとやっと合流することが出来て、一緒に生活するようになりました。その中で印象に残っているのが、蒙古の軍隊のルンタイサンという方がおられましたが、この方が日本人の面倒を非常に良くみてくれました。ありがたかったです。

その頃の私は、天秤棒が担げるようになったというのが、なぜかとても嬉しかったです。やっと一人前になれたかなという感じでした。

しばらくして八路軍が入城して来ました。これにも驚きました。「パーロ（八路軍）、パーロ」と言って怖がっていたのですが、そんなことは何もなく、ただ一列縦隊にずうっと並んで歩いている。服装がばらばらで、農民のような者もいれば、軍服を着ている者もいて、鍋釜を持っている者もいる。これが軍隊か、というのが第一印象。八路軍が入ってから、街の秩序は回復しました。

引き揚げ話から留用へ、そして林口、牡丹江へ

一段落して、翌 1946 年の夏くらいから引き揚げが始まりました。ところが我が家は、リュック一つにして待っていた引き揚げる当日の朝、当局の方が来られて、実は残ってもらいたいと言われました。伯父の親友であった三井氏の家の世話をお袋はしていたのですが、三井氏は満鉄の技師で工務区長を勤め、青年学校の教頭もしていましたので、部下の人たちにも残って欲しいのだけれど、上級者のあなたが残らないと彼らも残らないと。従って、残ってもらいたいということでした。

そうして、結局は残ることになりました。それを「留用」と言います。その時の話では、2年間だけ残って欲しいとのことでした。結果的には、8年になってしまいました。

私にとって辛かったのは、ハルピン駅の近くに倉庫があって、その掃除に狩り出されるのです。そこは引き揚げ者がいた所で、皆は日本に帰っていくのに自分は残って掃除をしなければならない。本当に情けない気持ちでした。

何とか早く日本に帰りたい、その気持ちが募るばかりでした。そこで私は、残留日誌をつけることにしました。当初はそこに恨みつらみをぶちまけた日誌でした。当然紙もありませんから、裏紙や本の四隅の余白に書きました。インクは自分で作りました。

留用になって最初に行った任地が林口でした。林口は交通の要衝でした。ここでは日本人が300名ほどいました。山の上に宿舎があって、一番苦労したのが水汲みです。冬場は坂道が凍っていて、よく転びました。

牡丹江では家にある本で独学を始めました。日本の短波は雑音が酷く、かすかに聞こえる「鐘の鳴る丘」とか「異国の丘」とかの歌を書き写して覚えました。「異国の丘」は心情的に一番合いました。

佳木斯にいた時、「幾何のあたま」という数学の本を街中の小店で見つけました。これは本当に嬉しかった。本がないところで見つかったので、嬉しかったです。

その後、また牡丹江に帰ったのですが、そこで始めたのが自活です。最初は紡績工場で働きました。そこで一つ思い出すのが、休み時間に給料をもらいながらトイレに行くのはいいのだろうかと悩みました（笑）。

その後、第四軍靴紡麻工場で働きました。当時の八路軍の兵士は布靴（プーシエ）を履いていましたが、その材料になる麻縄を作るところでした。引間さん（注：昨年の方正総会で講演をしていただいた引間正好さんのこと）とここで一緒になりました。そこで皆さんとの接点が生まれたのですね。この工場には母子家庭の方がいらした。引間さんたちは少年隊といって50人くらいいました。私は15歳だったので青年隊のほうに振り分けられて大人の人と一緒に働きました。

ここでは私は麻縄の機械を改造して、生産量を2倍にしました。これは大きかったです。当時は請負制というか出来高払いだったのです。ですから、倍生産すれば倍お金が入る。労働模範に選ばれ、ご褒美にフルコースの中華料理を始めてご馳走になり、嬉しかったです。皆さんの給料も上げてあげたいと思いましたが、そこまでは手が回りませんでした。

「お母さんに会いたい！」

この頃、非常に印象に残っていることがあります。開拓団から来られた方だと思いますが、2年先輩くらいで渡辺さんという方がおられました。この方が特に細い麻縄を綯うのが上手な方でしたが、残念ながら腸チフスで倒れてしまいました。この方を病院？ に見舞ったときに、彼が願ったことが二つありました。一つは「みかんが食べたい」と。ところがみかんなんかありません。牡丹江の泥棒市場を探し歩いて、やっと缶詰を一つ見つけ

ました。それを食べさせようとしたのですが、ところがもう食べる元気がない。本当にかわいそうでした。食べたい食べたい、と言っていたのに食べられない。それともう一つ、何が欲しいんだと聞いたら、「お母さんに会いたい」と。それも、叶えてあげられない。でもやっぱり最後には、お母さんに会いたいのですね。これは私でもそう思いますね。お母さんに会いたいと、彼は言って逝きました。

瀋陽から鶴岡炭鉱へ

ここに勤めているときに、日本に帰れるんだという話が、突然持ち上がってきました。帰れるならすぐに帰りたいと、私はお袋をなんとか説得して、一足先に帰ることを許してもらいました。ここの工場の人ばかりではなくて、日本人は全員帰れるという話でしたからです。あれは 1949 年夏だったと思います。日本人は全員帰れて、その第一陣としてここの工場の人が帰れると聞きました。私は何が何でも早く帰りたかったので、お袋と水杯を交わして別れました。

結果的には、失敗でした。ハルピン、長春を通って、瀋陽まで行きました。長春は酷かったですね。樹木の皮が人の手が届く高さまでぜんぶ剥がされていました。後で聞くとそれは食べたのだそうです。あの籠城のときに。そういう惨状も見ました。

瀋陽に着いたら、いや実は日本に帰るのではないと。事情で帰れなくなりました、という説明でした。これにはまたびっくりしました。せっかく帰れるつもりでここまで来たのに、どうしてかと。当局の説明はありましたが、内容はよく分かりませんでした。ただ、分かったことは、もう帰れないから身の振り方を考えろと。

その一つとして、青年の人は鶴岡炭鉱を紹介しますと言われました。炭鉱に行けば、「白いお米のご飯が食べられるよ」と誘われて、これはもう最大の魅力でした。お米のご飯が食べられるのだったら行ってみるかと、いうのが私の正直な気持ちでした。

それと、今さらおめおめとお袋のいる牡丹江に帰る訳にはいかない。それで志願して、私は鶴岡炭鉱に行くことにしました。当時 17 歳でした。

鶴岡炭鉱での事故

鶴岡炭鉱に着いて、新人教育の三日目でした。入坑三日目に事故に遭いました。石を運んでいるときに、二人一組のパートナーの人が手を放したので、全加重が私にかかり、線路と石の間に挟まれて、この左手の人差指の先を潰してしまったのです。怪我したのは爪の先だけでしたが、炭鉱の中はガスがあるからそこから腐るといけないといわれ、少し多めに指を切断しました。このときは、不思議なことに、手が麻痺していたのでしょうか、ほとんど痛みを感じないんですね。病院に行って手術をするのですが、恐らく麻酔もせずに、のこぎりで切ったと思います。のこぎりの音だけは耳に残っています。

日本人の看護婦さんが二人いて、かわいそうに、かわいそうにと言ってくれました。本人はほとんど痛みは感じなかった。その代りに後は大変でした。夜になってからどんどん痛くなってきました。でもそのときは痛くなかった。もしかすると人間は、極端に大きな衝撃を受けると、脳が感情をシャットアウトして、それ以上痛みを感じなくするのかもしれませんね。不思議な経験でした。また、パートナーの大切さを身をもって知りました。

そうして炭鉱生活が始まり、怪我のため一カ月くらい休んで、復帰しました。

鶴崗炭鉱は斜鉱といって斜めの炭鉱で、深さが 2 千ｍという話でしたが、私が働いていたのは恐らく 500m くらいの場所だったかと。そこで採炭といって、石炭を採りますが、そのときに、発破（はっぱ）といって爆薬を仕掛けて爆破させます。爆破させて削るようにして石炭を崩して採る。このときに、発破に火を点ける火付け役が必要です。だいたい 20 カ所くらいに爆薬を仕掛けて、斜めの断層ですから、下の方から順番に火を点けていく。そうして一番最後に火を点け終わったら、出口に急いで戻る。これをもたもたしていると、最初に仕掛けたダイナマイトが爆発してしまうので、非常に危険な仕事です。危険ですから、やり手がいない。

私は怪我をして皆の世話になったという負い目もあって、皆がやらないんだったらやろうと買って出ました。私が下半分の 10 本くらいを担当し、上半分の 10 本は兵隊あがりのリーダーの方が担当して、二人でやりました。ヨーイドンで、二人で一斉に始めるのです。一回だけあわやという場面がありましたが、そのときは後ろから来たその兵隊さんが私の後ろから咄嗟にかぶさってくれて助かりました。

当然、なかには事故に遭われた方もおられます。有名な方では川村さんという方で、導火線が湿気っていて着火せず見に行ったらしいんですね、そこで爆発してしまい、目の前で爆発しましたから目も見えない、それから右手だったかも失くされて、そういう方もいました。いつもハーモニカを吹いていました。石炭が身体に突き刺さってしまっている。本当にかわいそうでした。でもその方は、幸いにも日本に帰って来られました。

そういう方も見ていましたから、非常に怖かったです。毎回炭鉱に入るときは、膝がガクガク震えていました。情けない話ですが、怖かったのと、やらなくちゃという武者震いもあったかもしれません。

そうこうするうちに、お袋が手を怪我したことを知って、私を迎えに来ました。これには感激しました。鉄道関係の仕事でしたから、色々と見回りに来る人もいて話が伝わったのかもしれません。中国語を一言も話せないお袋が、距離が 350km くらい離れた牡丹江から鶴崗まで一人で汽車に乗ってよくやって来られたと思いました。で、上層部の方と話をして、私は牡丹江に引き揚げることができました。羨ましがられました。

その時に、一番辛かったのが、鶴崗の駅から帰る母親を見送るときでした。私は改札口まではよう見送れなかったです。途中で別れて、丘の上から、お袋が改札口に行くのを遠くから見ていました。このときは、涙が出ました。お袋の、何と言いますか、愛というのでしょうか。私はお袋を置いてまで、先に日本に帰ろうとしたのですから。それに対して、よく私のことを許してくれたと思いました。このときは、母親の愛というものを切実に感じました。

母親の待つ牡丹江に帰る

その後、お陰様で牡丹江に帰ることができました。そのときはもう、凱旋将軍気分ですよ。鶴岡では地中での危険な仕事も大人に混ざって一人前にこなしてきた。鶴崗炭鉱での私の最大の収穫は、**「太陽の下でなら何でもできる」**――という指針というか自信というか、これを得たことです。ですから、もうまったく怖いものがなかった。

これはその後も、私の一生の金科玉条となりました。言い換えると、「腕一本で稼いで食べる、生きる」ということです。これを貫いたつもりです。勿論、一人では生きられません。皆さんのご援助の下、生活できる訳ですが、基本は自分でやるという信念をここで得ることができました。最大の収穫でした。

それと、もう一つ反省としてあったのが、自分はまだ何も分かっていない、何とか勉強したいという思いです。確かに食べることにも飢えたけれど、勉強することにも飢えていました。そこで、一生懸命に独学をしました。数学というと代数・幾何・三角とあったのですが、すべて独学でマスターしました。不遜なことに、これでもう数学は全部分かったと思ってしまいました。そのくらい自惚れていました。その後、こっぴどくやられましたが、微分積分とか難しいのが出てきて。そういうこともよく知らなかったのです。

鶴崗から帰ってまもなくですね、今度は鉄道局のほうから、南下命令がきました。南へ行けと。このときに不審に思ったのが、荷物の制限がなかったこと、重病人も含めて全員行けとなったことです。鉄道関係者は全員です。駅に行ってみると、しっかり二等寝台車が用意されていました。これは不思議でした。

我々は牡丹江からハルピン経由で、長春、瀋陽を経て、天津に着きました。天津はご存知の様に海に近く、日本にも近い。これはもう日本に帰れると思いました。ここで帰国運動を起こして、半月くらいやりました。私ではなく親父たちですが、頑張りました。しかし結果は、帰国ではなく、天水という場所がありますが、地図をご覧ください。中国全体のど真ん中辺りですね。西安のまだ西です。天津からここへ移動して、ここから先の鉄道建設をやって欲しいと。というのが新しい任務でした。

天津から天水へ、天水鉄中時代

天水に行くことになって、天水なんて聞いたこともないし、どんなところだろうと。ところがこれも一筋縄ではいきませんでした。西安から宝鶏に行きましたが、ここまでが本線で、その先は実験線で、客車では走れないので、貨物列車に乗り換えて行きました。その先で、脱線事故に遭いました。僕ら二家族が乗っていた、一番後ろの貨車が脱線したのです。脱線したまま 400m くらい走ったという話ですが、止まってから、見て驚きました。線路の右側は崖になっていてその下は河、反対側も崖でした。貨車は 15 度くらい傾いて、連結器でやっと繋がっている。もし連結器が外れたら、どちら側に落ちても一巻の終わりでした。崖の高さは 20〜30m あったと思います。一方、義父は素早く梯子を開閉扉に当てがって、落下防止をしてくれていました。さすがプロ魂と感心しました。

脱線事故は私たちだけではなく、他の列車でもあったようです。実験線ですから、仕方がなかったのでしょう。そんな危ない思いをしながら、天水という新しい任地に到着しました。当時は、天水までしか鉄道線路は行っていなかった。そこから先の工事を我々に、ということでした。

天水に行って私が一番嬉しかったことは、学校に行けたことです。やっと、18 歳で中学二年生です。中国語はまったく分かりません。一から勉強しました。頑張りました。半年後には、飛び級試験を受けて、高校に入りました。私の中国語は、正式に習ったわけでは

なく耳で覚えた中国語なので、相当いい加減な中国語ですが、半年もすれば何とか意思は通じるようになったかなと思います。何とか高校にも入れて、生徒会の活動もやりました。生徒会の文芸幹事として、日本人の女性のロシア舞踊をやったり、歌を唄ったりしました。評判が良かったです。

それから、学習幹事になったときには、皆さん壁新聞ってありましたよね、黒板にチョークで色々と書いて、壁新聞にするのですが、もう一人絵の担当がいて、私は文章を書くほうをやりました。これも評判が良かったです。これをやったお陰で、私は中国の漢字を覚えることができました。

そして、文武両道ということで、私は陸上の中距離をやりました。1500m では、入賞もしました。優勝したときのご褒美が、この紅星日記帳です。これだけが、私が日本に持ち帰った唯一の宝物です。中国から帰るときに、中国で書いた日記などは持って帰ってはいけないと言われたのです。いけないというより、ためになりませんよ、と言われました。日本の官憲に何だかんだと疑われることがあるから、持ち帰らないようにというアドバイスがありました。もう一つ、集合写真も持ち帰らないようにと言われました。前に触れた残留日誌も、結構まじめに書いていましたが、そこで泣きながら燃やして帰りました。本当にもったいなかった。ですから、今私の手元に残っているのは、この手帳だけです。宝物ですね。

このときは西北地区の 1500m で優勝して、上海の全国大会に出られるということでしたが、日本人は遠慮してもらいたいと言われて、出場することはできませんでした。二番手のクラスメイトが出てくれました。

天蘭線の開通、引き揚げへ

天水に留用された職員が約 330 名、家族を入れて約 900 名です。天水から西に蘭州という街がありますが、そこまでの 354km の鉄路建設が仕事でした。もう一つは、東北の鉄路病院から天水の鉄路病院に移られた方々が、鉄路病院の陣容を整えてくれました。だいたい医師が 10 名、看護婦 20 名の方々が天水鉄路病院の発展に貢献しました。

1952 年 10 月 1 日に、天水～蘭州間の天蘭線は、予定を半年早めて完成しました。このスライドは開通式典で、毛沢東主席の祝辞が右の方にあります。天蘭線は、毛沢東主席直々のプロジェクトで、非常に重要視されていました。その最大の目的は、蘭州のさらに

西の玉門で採れる石油を、なんとか沿岸地区に運ぶことでした。ですからこの天蘭線ができたことは、非常に中国の役に立ったのではないかと思います。

左のスライドが、開通式に使った一番列車です。この機関車は日本人が整備したのです。ここに人が 10 名ほど写っていますが、これは皆日本人です。この人たちがこの一番列車を整備して仕立てました。

そうして、1953 年、これはもう皆さんご承知ですね。引き揚げが始まりました。僕らは一番最初でした。1953 年 3 月、私たちは第一便高砂丸で上海から舞鶴に引き揚げて参りました。その帰国した翌年に、天水会を結成しました。会を作って、かれこれ 70 年近い歴史があります。原則毎年、会報を発行しています。かれこれ 60 数冊になりました。所々休んだこともあります。60 数冊、創刊号から全て残っています。そういう活動を続けております。

その中で、大きな活動の一つは、1999 年に「中日友好桜花園」を天水市政府と協力して作りました。記念石碑と、桜の木を 1,000 本植えました。ここは川のほとりで、現在天水市民の憩いの場所となっています。お陰様で、天水市政府が園を管理し、どんどん桜の木を増やしてくれています。当初私たちが危惧したのは、桜というとどうも日本の軍国主義を思い起こすのではないかということでした。しかし、逆でした。綺麗な桜の木が、ここでは根付いてくれました。これからも、こうした活動は続けていきたいと思っております。

歴史は炭鉱のカナリア、超高速鉄道の夢

そろそろまとめに入りたいと思います。

一つは、先ほど申し上げた、**「歴史は炭鉱のカナリア」** という言葉があります。これはどういうことでしょうか。炭鉱ではガスが出るので、昔はカナリアを連れて行ったのです。カナリアは少しでもガスがあると鳴き止むのです。それで、危険かどうかが分かる。要は、カナリアが危険かどうかを教えてくれる。しかしカナリアは、そこから先の落盤事故だとか、先の事態は教えてくれませんよね。ただ、「危ないよ」という警告をしてくれる。カナリアがいるといないとでは、大きな違いになります。ですから、この言葉の意味は、歴史に学びなさい、歴史の声を聞きなさい、ということだと思います。

中国には有名な言葉がありますね――**「以史为鉴，展望未来」＝歴史に鑑み未来をみる**という意味ですが、良い言葉です。

私は歴史という言葉を、経験に置き換えて解釈しています。経験は炭鉱のカナリアであると。

それから、これは私個人のことになりますが、**「太陽の下でなら何でもできる」**というのが、私の大きな人生訓であり、指針であり、また生きる自信でもありました。それをずっと、貫いてきたつもりです。

それからもう一つ、鶴崗炭鉱での事故は二人で石を運んでいて相方が手を放してしまったことに因ります。これは**「パートナーは選べ」**という私の教訓となりました。大事なことは、信頼できるパートナーをいかにして得るかということです。一人では何事もできないですから。これはいい教訓になりました。

そして、**「情報の大切さ」**ですね。現代は情報が溢れているといわれています。肝心なことは、それをどう取捨選択して、決断するかですよね。そこが、問題だと思います。私の考えでは、まず情報を得るためには、常に「課題」を持って、その課題に関することに関心を持つということ。それを年がら年中、頭のなかで反芻することです。それをやっていないと、いい情報というのは入って来ないと思います。肝心なことは、いかに正しい情報を選ぶか。これも、先ほど私がお話した、裏通りの公園でリュックを取り上げられた事故、あの判断ミスは情報不足だったのだと思います。

私が中国で大きな印象を得たのは、**「为人民服务」＝人民に奉仕する**、という精神です。私はいわゆる軍国少年でしたから、こんなことは全く考えませんでした。中国の学校へ行って、最初に叩き込まれた、言われた言葉です。これは非常に印象に残りました。人民の為に尽くすなどというそんな発想はそれまでありませんでした。それを中国で教えてもらいました。これは有り難かった。現在はどうかというと、少し生意気ですが、**「人類の為に」**と今は考えています。

まとめになりますが、まずは、**私にとって中国は「育ての親」**です。中国で苦労もしましたが、それで私は育てられた。良いチャンス、機会をもらいました。私にとって中国は、**「第二の故郷」**です。現に、私の手の指先の骨は、今も中国に埋まっていますから、そういう意味でも故郷です。何としても中国の為に、何かやることはないかと常に考えています。

二つ目、**「太陽の下でなら何でもできる」**という言葉は、私への大きな贈り物でした。

三つ目、**「歴史は炭鉱のカナリア」**。色々な経験、歴史を顧みることで、指針が得られる。

日中友好交流の活動は、私の生きがいになっています。未だに、70 年前の級友たちとの文通もありますし、交流が続いています。これは得難い、有り難いことです。

ぜひ、これからも中国の為にと思っていますが、一つの夢があります。私は鉄道マンの第二世です。シルクロードに、桜と、超高速の鉄道を敷きたい。これは夢ですね。幸い今中国には、「一帯一路」という構想があります。この構想とも合致していると思います。私は技術者として、超高速鉄道を実現する具体的な方法を、考えたいと思います。まだ考え中で結論は出ていませんが、一番考えやすいのは日本のリニア新幹線です。それに代わるものを考えたいと思っています。これが今の私の夢でありロマンといえるものです。
有り難うございました。（拍手）

【質疑応答】

（質問）非常に貴重なお話を有り難うございました。最初の頃に、ハルピンでの映画鑑賞とロシア料理とスライドにありましたが、お話されていなかった様ですので、どういったことをお話されたかったのでしょうか？

（橋村）あの混乱の時期に、私の二年先輩の方が宿舎の近くにいて、彼に色々と連れて行ってもらい、引きずりまわされたのですが、その時の経験です。彼とよく行ったのが映画

館です。あの当時映画を観るなんて考えられなかったですね。よく映画が観られたなと。戦前の映画でした。

それから、彼の家の元お手伝いさんだったロシア人の所に連れて行ってくれて、そのロシア人の家に隠していた長持（ながもち）から着物などを出して売って小遣いにして、遊んでいた様です。そのお陰で、映画に連れて行ってくれた。

あの時代によくあんなことができたなと。映画の内容はほとんど覚えていないです。ロシアの映画というか、中国の映画だったかもしれません。それも、古い中国の映画だったか。内容には関心もなく覚えていません。

ロシア料理は、ボルシチと言いましたか、洗面器みたいな鍋にジャガイモだとか肉だとかごちゃごちゃ入っていて、あれはまあ美味しくて、こんな美味しいものがあるのかと思いました(笑)。ロシアのパンに合うんですね。少ししょっぱいというか酸っぱいようなパンに。あれと一緒に食べると美味しかった。どうもあの頃の私は食い気が勝ったのか、食べ物の印象が非常に強いですね。

（質問）今回のお話は「留用」ということで、私の理解では日本の技術のある人を中国に留めて中国側で活用しようということですが、そういった理解でよろしいのでしょうか？ですから炭鉱で働かれた時も、これは日本語でいうと「徴用」というか、もう少し乱暴にいうと「強制労働」ではなく、ちゃんと給料も出て、というものだったのでしょうか？

それから、学校に入られた時に、周りは中国人の生徒で、その中で日本人が中国式の学校教育で共に学んだという、その辺の何か特別な感情というものはなかったのでしょうか？

（橋村）最初の「留用」というのは、おっしゃるように当時中国になかった活用できる技術を使おうということで、技術者を留用してその人たちが持っている技術を活用しようということですね。

炭鉱に行ったのは「徴用」ではありません。給料ももらいました。そういう選択肢があると聞いて私自身が行くと決めたので、当局から言われたのではありません。一つ心配だったのが、帰るつもりで瀋陽までついて来たお母さんたちはあれからどうなったのだろう、ということです。僕らは鶴崗炭鉱とか、働く場所があったのですが。

中国の学校は、全て入寮制です。寮に入って朝から晩まで一緒に生活します。これは非常に勉強になります。言葉も覚えるし、生活習慣も分かりますし、おっしゃるように学校で一番悩んだのは、歴史の時間です。かつて日本軍が色々と悪いことをしたと先生が説明するのですが、そうすると学生たちが同じクラスにいる日本人を責めるような目で見る訳です。そういうことがありました。

ところが、しばらくすると、これは周恩来総理だったと思いますが、「今中国に残っている日本人は軍国主義者ではない、昔悪いことをしたのは日本の一部の軍国主義者だった」、ということを言ってくださったそうです。それからぴたっと授業の内容が変わりました。歴史の事実はもちろん紹介されるのですが、それを聞く同級生たちの態度は変わりました。

あの当時は、自分の親が日本の飛行機の機銃掃射でやられたとか、そういう経験をしている学生がまだ結構いました。そういう人たちは、まだまだ日本人を許さないという気持ちが強かったです。彼らはやっぱり、僕らにはやらなかったけれど、年下の日本人の学生には、嫌がらせをしたりということがあったと聞きました。

後日談になりますが、先ほどの桜の交流などをしている時に、彼が今言ったように自分の親が機銃掃射でやられたということがあったと話してくれました。当時はそうしたことは言わずにイジメていたのですが、そういう辛い経験はなかなか忘れられないものだろうと思います。

私も終戦直後、ソ連軍が入ってきたときに、通訳を務めたのが朝鮮の人たちで、その時は昨日まで一緒にやっていたのに何で急にソ連人の肩を持つのかと、いい感じはしませんでした。今でもまだその思いが残っています。

（オンライン質問）本日は貴重なご講演有り難うございました。石川県の者です。私は23歳で大学を卒業して一年経ちました。歴史のことを専門で勉強し、北陸満友会の方ともご縁があって今こうして参加しています。

橋村様が過去のご自身の経験を比較的ポジティブにお話いただいた印象です。しかし内容を伺うと、事故で怪我をされたり、飢えで苦しんでいるとか、そういう非常に深刻な事態に直面されていると自分は感じました。それでも、今振り返ってみれば客観的にお話できるのかもしれませんが、当時はお辛かったのではないかと思います。それをどういうふうに乗り越えていかれたのか。よろしければ教えていただけると嬉しいです。

（橋村）仰る通りですね。その当時はものすごく恨みに思ったり、何でこんなことにと情けなく思ったりしました。今日、今、私の立場でお話すると、どうしても良い思い出になってしまう。悪いことを悪いとは感じなくなってしまう、少し不思議なのですが。私はどちらかというと過去をあまり振り返らないたちです。常に前を向いているのが、私の生き方だったかと思います。

過去の思い出は、辛いのは確かに辛かった。死ぬような思いをしたこともあります。しかし、今思うと、それが自分を育ててくれた過程だったのかなと、どうしても善意に解釈してしまう。

あんまり正直ではないのかもしれませんが・・・。気持としてはその時は辛かったんですよ、悲しかったり、恨みに思ったり、色々しましたが、そこにあまり踏み留まらなかったというのか。それを踏み台にしてきたという感じでしょうか。

（オンライン質問）私は中国残留孤児二世です。今は首都圏中国帰国者交流支援センターで、戦後世代の語り部として昨年夏から活動をしています。現在、コロナ禍であまり活動はしていませんが、僭越ながら本日の毎日新聞のストーリーという記事に掲載されたので皆さんよろしければぜひご覧ください。

私自身が語る対象は、中国残留婦人になった祖母シズの体験です。祖母は大正13年生まれですので、橋村さんよりも若干年上ですが、私の他界した父が昭和15年の生まれで近い年齢かと思います。

今日のお話の内容は、私たち中国残留帰国者にしてみると、とても意外な話でもあり、驚きました。自分たちが知っていたのは、避難行だとか中国残留孤児になった経緯とか、満洲でのできごとが多かったので、意外でした。ぜひ、橋村様にも語り継いで欲しいなと思いました。戦後の混乱の中で、橋村さんたちのような方もいらっしゃったと、勉強不足もあり知りませんでした。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。有り難うございます。

（質問）初めて参加しました。足立区で中国帰国者の支援、相談員をしています。まだ1年7カ月くらいなのですが、今日は勉強のために参りました。まず驚いたのは、橋村先生が89歳でとてもお元気でいらっしゃることです。これほど長時間にわたってお話いただき、疲れたご様子もない。本当にパワーをいただきました。私が担当している帰国者の方は、終戦時には赤ちゃんだった様な方々です。現在75歳から80歳くらいの方です。それ以前のことは今日初めて伺いました。知らなかった歴史をこうして生で聴けることは、色々な思いもあって、感動しました。それと同時に、橋村先生がお辛い経験をされた中で生きること、平和な時代に暮らしている私たちの生きることと、生きることに対する意味が全然違うのかなとそう思いました。

私事ですが仕事でちょうど躓いたりしているので、先生が辛いことをバネにしてやっていくというお話は、私も明日から実践していきたいと思いました。

先生が最後に「夢」がありますと話されて、自分が恥ずかしかったです。子供が成長して自分の役割はもう終わったかと思い、自分の夢なんて最近思ってもみなかったです。89歳の先生が夢を語られている。本当に感動しました。有り難うございました。

（橋村）有り難う、有り難う。（拍手）

（オンライン質問）私も父と母が満洲に渡りまして、苦労して舞鶴に戻りました。橋村さんは上海からどういう形で帰国されたのでしょうか？大変な思いはされましたか？

（橋村）引き揚げのいきさつは、中国の赤十字と日本との交流により、引き揚げの話がまとまりました。我々は上海から第一便です。高砂丸という船で帰国しました。これは中国側と日本とで合意した引き揚げ事業でした。

引き揚げ事業そのものは、非常にスムーズでした。例えば荷物検査もほとんどありませんでした。ですから、当局は自分で書いたものはダメだとか、写真はダメだとか、色々アドバイスはしてくれましたが、まったく大丈夫でした。中国の送る側も、日本の受け入れ側もそうでした。ただ、日本に帰って来てから、指紋を採られたりとか、思想面でのチェックは厳しかったように思います。中国側はほとんどなかったです。引き揚げ事業は、スムーズで、しっかり協定が結ばれていたのだろうと思います。

（司会・森一彦）それでは以上をもちまして、講演会を終了します。橋村武司様に、もう一度盛大な拍手をお願いします。有り難うございました。（拍手）

無言館ノート「あの夏のまま・・・」

横井 幸夫

信州・上田市の郊外、塩田平を望む丘の上にひっそりと建つ美術館がある。無言館という。管主の窪島誠一郎（１９４１～、作家・水上勉の隠し子）と自らも出征経験を持つ画家の野見山暁治（１９２０～）の二人が全国を回って太平洋戦争で戦死した戦没画学生の遺族を訪ね、遺作を蒐集した。蒐集作品は７００点を超す。美術館「信濃デッサン館」の分館として１９９７年に開館した。

私は数年前の初夏に親しい夫婦３組６人で無言館を訪ねた。強い日差しの中、深い緑の林に囲まれた坂道を上ると、丘の上に無言館があった。館内は薄暗く、訪れる人も多くはなかった。明るく、華やかな絵は一枚もない。見る人は無言の絵に、無言で向き合う。

美術館入り口を入って左に一枚の裸婦像が掛かっている。絵とその説明文だ。

『裸婦』　日高安典（ひだか　やすのり）

1918 年、鹿児島県種子島生まれ。東京美術学校（現・東京藝術大学）油画科を繰り上げ卒業。満州（現・中国東北地方）に出征。1945 年、フィリピン・ルソン島にて戦死。享年 27 歳。 730×504

無言館には参観者が思いを書く感想文ノートが置いてある。１９９９年8月１５日、裸婦のモデルとなった女性（以下、彼女）がひっそりと訪れ、ひっそりと去っていった。無言館に来た証を感想文ノートに残して。しかし、感想文ノートには自分の名前も連絡先も書かれていなかった。彼女が誰か身元も、どう生きてきたかも永久に知ることはできない、

彼女がモデルになった時は２０歳。美術館を訪れたのはその時から５０年が過ぎているので、すでに７０歳を超えていた。結婚せずに独身のまま生き続けて。今年２０２１年は訪れた時からさらに２２年たっているので、彼女がいま生きていたら９０歳を超えているだろう。彼女の２０歳からいままでの人生を思いやると心が痛む。

戦争は地震、雷、火事のような自然災害、天然災害ではない。おやじは人災だ。戦争は政府、政権が国家意思として引き起こす人災だ。天災は避けられないが人災は避けられる。

日本を敗戦直後の７０数年前からいままで支配してきたのは自民党だ。その自民党は太平洋戦争を引き起こし、戦争を指導した軍人（源田実、辻政信など）、政治家（三木武吉、大野伴睦など）、官僚（吉田茂、岸信介、中曽根康弘など）たちが生き残り作った政党だ。彼らはみな自民党国会議員となり戦後の日本を指導した。いま自党国会議員の安倍晋三、中曽根弘文などは戦争犯罪人の末裔、子孫だ。したがい、自民党は先祖、先人が行った南京大虐殺、従軍慰安婦、強制労働などの戦争犯罪、いや戦争そのものもの、をなかったことにしたいのだ。自分たちの先祖、先人は戦争犯罪に手を染めていない、私たちは戦争犯罪人の末裔ではないのだと言うために。

私はこの絵を描いた画家、モデルとなった彼女と同じ運命をだどる若者が２度と出ないことを願う。願いを実現するためには戦争指導者、戦争犯罪人が作り、その子孫、末裔からなる現政権を終わらせる以外にないだろう。

彼女が書き残した感想文だ。全文は下記のとおり。

安典さんへ
安典さん、日高安典さん。
私来ました。
とうとうここへ来ました。
とうとう今日、あなたの絵に会いに、この美術館にやってきたんです。
私もうこんなお婆ちゃんになってしまったんですよ。
だってもう五十年も昔のことなんですもの。
安典さんに絵を描いてもらったのは。
でも、今日は決心をして鹿児島から一人でやってきたんです。

七〇を過ぎたおお婆ちゃんにとってもとっても長い旅でした。
朝一番の飛行機にのって、何十年ぶりかで東京の人混みにもまれて、この遠い遠い信州の美術館にやってきたんです。
安典さん、日高安典さん　会いたかった。

あれはまだ戦争が激しくなっていなかった頃でした。安典さんは東京美術学校の詰襟の服を着て私の代沢のアパートによく訪ねてきてくれましたね。
私は洋裁学校の事務をしていましたが、知人に紹介されて美術学校のモデルのアルバイトに行っていたのでした。
いつの間にかお互いに心が通じ合って、私の部屋で、二人であなたの好きなベートーベンとメンデルスゾーンのレコードを聴いて。
楽しかったあの頃のことが、つい昨日のことのようです。
あの頃はまだ遠い外国で日本の兵隊さんがたくさん戦死しているだなんていう意識がまるでなくて毎日毎日私たちは楽しい青春の中におりました。
安典さんが小雨の降る下北沢の駅で勤めから帰る私を傘を持って迎えに来てくれたあなたの姿を今でも忘れていませんよ。

安典さん、私覚えているんです。
これを描いてくださった日のこと。
初めて裸のモデルを務めた私が緊張にブルブルと震えてとうとうしゃがみこんでしまうと、僕が一人前の絵描きになるためには一人前のモデルがいないとダメなんだ、と私の肩を絵の具だらけの手で抱いてくれましたね。
なんだか私涙が出て涙が出て。
けれど安典さんの真剣な目を見てまた気を取り直してポーズを取りました。
あの頃すでに安典さんは、どこかで自分の運命を感じているようでした。
今しか自分には時間が与えられていない。
今しかあなたを描く時間が与えられていない、とそれはそれは真剣な目で絵筆を動かしていましたもの。
それがこの二十歳の私を描いた安典さんの絵でした。

そんな安典さんのもとに、召集令状が届いたのは、それからまもなくのこと。
あの日の安典さんは、いつもと全く違う眼をしてましたね。
そして、私にこんなことをいっていました。
もし自分が女に生まれていたら、戦争にゆくことなどなく、この絵を描き続けていられるだろう。
男に生まれたからこそ、キミに会うことができてこの絵を描けた。

だから、僕は幸せなのだと。
そして安典さんは昭和十九年夏、出陣学徒として満州に出征してゆきました。
出来ることなら、出来ることなら、また生きて還ってキミを描きたいと言いながら。

安典さん、日高安典さん。
あなたの故郷の種子島は、今もハイビスカスの咲く美しい島です。
あなたは私が同じ鹿児島県の人間だと知ったとき、奇跡だ、これは奇跡だ、こんな広い東京で同じ故郷の人と会えるなんて、と、とびあがらんばかりの喜びようでしたね。
今だから話せますが、私、実は、もうあの頃、故郷の両親のすすめる人がいたのです。
でも、安典さんに召集令状がとどいたときに、もう自分は故郷に戻らないと、心に決めました。
安典さんが還ってくるまで、生きて還ってきて、また私を描いてくれるその日まで、いつまでもいつまでも待続けようと自分に言い聞かせたのです。

それから五十年、それはそれは本当にあっという間の歳月でした。
世の中もすっかり変わって戦争もずいぶん昔のことになりました。
安典さん、私こんなお婆ちゃんになるまで とうとう結婚もしなかったんですよ。
ひとりで一生懸命生きてきたんですよ。
安典さん、日高安典さん。 あなたが私を描いてくれたあの夏は あの夏は私の心の中で今もあの夏のままなんです。（出典　ＣＤ「あの夏のまま」窪島誠一郎、おおたか静流）

（よこい・ゆきお：１９４８年神奈川県生まれ。１９７２年東レ株式会社入社。ペナン（マレーシア）、北京、上海に駐在。会社では一貫して中国ビジネスに携わる。定年退職し、現在、中国事情を紹介する個人メール『中国業務通訊』を毎月１回無料配信している）

戦争体験の継承　この人にしか語れない喜びと悲しみ

奈良県香芝市から「満州」・シベリアについての発信

西嶋　拓郎（奈良県香芝市）

Ⅰ　はじめに

2021 年 10 月 17 日（日）深夜放送の NNN ドキュメント『凍土の記憶』（96 歳が伝えたシベリアの強制労働）は、京都府綾部市のシベリア抑留体験者・原田二郎氏の 70 歳を過ぎてから始めた「シベリア抑留体験」の語り部活動を見事に伝えていて感銘を受けた。ともかくその語りが自然体で前向きなのだ。

19 歳で「満州」の陸軍入隊、衛生兵で「痛い痛い」と死んだ数多くの兵の対処をしたことが何度も夢に出てきた。しかし 70 歳を過ぎて地元で初めて戦争体験を話した。その日の晩から戦争の悪夢を見なくなったことから語り部活動を始めた。今日は舞鶴引き揚げ記念館で小学生たちに、また次の日は東舞鶴高校で高校生たちに語る。そして同時にその頃から「ロシアへ行きたい。」と思うようになる。そして高齢の父を気遣い一緒に娘がロシアの旅に。ハバロフスクの強制収容所は今は無くなっていたが、補修作業をした音楽ホールは残り、特に基礎工事から関わったハバロフスク市内の教育大学で「僕がしたレンガや、間違いない。」と。

ハバロフスクの収容所跡

そしてプレゼントされたレンガに「ハバロフスクと書いてくれ。」と頼み、自らもロシア語で「XaPada」(ハラダ)と書きこむ。

16 万人の日本人が抑留されていたハバロフスクで亡くなった仲間の日本人墓地を墓参した後、日本へ帰ってからの原田さんは語り部活動で語る内容に変化があったという。

ハバロフスク教育大学で

「死ぬという事は考えてなかった。とにかく技術をおぼえて生活の足しにしたい、という思いだった。」

「（つらい体験だけでなく）働くことの先に見つけたものを伝えていく。」

「日本人が抑留生活で建てた建物が現在もロシアで通用しているという事に誇りをもって‥。」

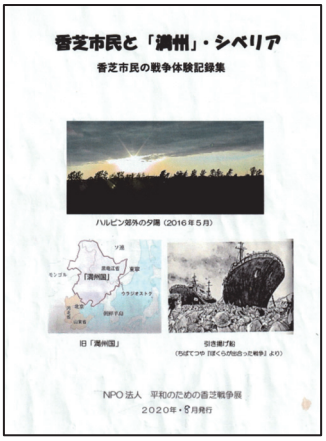
そして「あのみじめな戦争、勝っても負けても犠牲者は両方とも出る。そんなことはあってはならない。子どもたちに伝えていきたいのはそこ。」と語る。

2021 年 7 月原田二郎氏、96 歳で死去。今は娘さんが舞鶴引き揚げ記念館で父のあとを継いで語り部ボランティアをしている。原田さん親子のこの素晴らしい活動は、私たち香芝の NPO が戦争体験聞き取り活動で学んだこととつながっている。

Ⅱ　奈良県香芝市における「NPO 平和のための香芝戦争展」の活動

１　私のいる香芝市は大和盆地の西南に位置する人口８万人弱の大阪に隣接するベッドタウンで、戦争当時は４つの村であった。

「NPO 平和のための香芝戦争展」の活動は 2021 年度でちょうど 20 年を迎えるが、私は 10 年前から参加してきた。現在の主な活動は４つ(①戦争遺品・資料の展示、戦争体験の掘り起こし・聞く会②香芝８・６原爆犠牲者追悼の集い③屯鶴峯地下壕見学会④平和音楽祭)だが、共通して言えることは戦後 76 年、戦争の語り部がいよいよいなくなってきた。兵隊の語り部がほぼいなくなり、戦争当時幼児・小中学生だった人が戦争を伝えるのが中心。沖縄戦の体験者はいなくなり、ヒロシマ・ナガサキの被爆体験者すら戦争展に来ていただくのが難しくなってきた……。がしかし‥旧満州からの引き揚げ者が香芝の地にもまだ相当数おられる！ことがわかってきた。



『香芝市民と満州・シベリア』(2020)

一方、教育現場(香芝市だけでなく奈良県の多くの市町村でも同様と思う)、ヒロシマ・ナガサキ・沖縄への修学旅行や８月６・９日や平和登校日、６月２３日沖縄戦終結の日の平和学習等がなされ、現場は戦争の語り部・戦争平和教材を求めている！

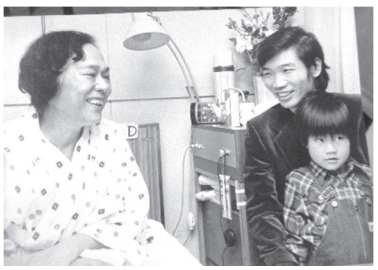
そうした状況をふまえ、また若い世代への引継ぎも視野に入れて戦争体験者の語ってくれた内容を録音で残し、冊子として作成してきた。①「私たちの香芝にも戦争があった」(2012 年度)②香芝戦争展展示解説資料集(2018 年)③「香芝市民の戦争証言」(空襲中心・2020 年)等々である。そして昨年８月多くの募金をもとに「満州」引き揚げ・シベリア抑留体験者２１名のお話をまとめて右上の冊子を作製した。ソビエト軍侵攻後の引き揚げ、男はシベリア抑留、残された女・子ども・老人の逃避行は戦争になればこうなってしまう、という誰もが無関心ではおれない、現代の世代に語り継ぎたい体験が満載だった。

２　ただ香芝には「満州」からの引き揚げ者は多くても開拓団関係者はなかなか見つからなかった。私は香芝市はほとんどが平地だし、大阪に隣接する昔から交通の便のいい所なのでやむを得ないのか、と思っていたが、2020 年開催の香芝戦争展をきっかけにお二人の方を見つけることができた。

お一人は兵庫県養父郡からハルビン北へ入植した北二屯開拓団の女性笹岡千代子さん。父母は現地で満州開拓に本人はハルビンで看護婦養成所に通い、戦後しばらくは「八路軍」に留用され、帰国後は兵庫、大阪で看護婦として働かれた方。「帰国の汽車の中で、他の家族の亡くなった身内を線路わきに葬るなどの悲しい体験はあったが、北二屯開拓団は犠牲者が比較的少なく運が良かった。満州の話は聞いてくれる人があればいくらでも語りたい。」と話しておられた。

笹岡さんが学んだハルビンにある元満鉄病院・看護婦養成所

もう一人の方は梅崎照夫さん。奈良県から父母がハルビン郊外の天理開拓団に参加したが自身はそこで生まれ、３歳の時帰国。当時の記憶は全くなく、両親共満州天理村で亡くなったため、両親から自分を託してくれた同じ奈良県出身の杉岡オイエさんに連れて帰ってもらう。



２５年ぶりの再会

恩人の杉岡オイエさんを見舞う梅崎照夫さん(1982 年・天理時報)

その後、成人した梅崎照夫さんは、満州天理開拓団の帰国者支援に取り組んで来られた山根理一氏のお世話で、杉岡さんと 25 年ぶりの対面を果たすことになる。なんというすごい話がこの香芝の人にもあったのだろうか。満蒙開拓の問題は天理満蒙開拓団だからといって天理教関係者だけが知っているだけではだめではないか。広く奈良県民はじめ多くの人が共有する必要がある。私は満州、とりわけ奈良県との関係をもっと知るべく、そしてこんなすばらしい出会いを用意してくれた山根さんを訪ねた。

Ⅲ　山根理一氏（天理村満蒙開拓団・天理教）から学ぶ

奈良県拓友会の「奈良県満州開拓史」には多くの「満蒙開拓」のお話しが掲載されている。しかし何といっても次の４つの開拓団の記述が衝撃的だ。奈良県でも他県同様、「青酸カリ服毒自殺」「集団自決」「ソ連軍による３４名の銃殺」等々驚くべき悲劇があったのだ。こうした事件の真相は解明され、責任の所在は明らかにされ、死者は弔われているのであろうか。きっとご家族・親類を初め奈良県拓友会等が取り組まれていることと思うが…。しかし関係者以外の多くの奈良県民にとっては、過去の戦争の時にたいへんなことがあった、戦争中だから色々なことがあってもやむをえない位の認識で、詳しいことも知らないで、十分引き継がれているとはいえないのではないか。

私たちは奈良県でも起こっていたこれらの大変な悲劇をしっかり受け止め、次の世代にも伝え、今後の平和な日本のためにいかしていかなければならない。過去は取り返せないが、真実を知ることはこれからの未来にはいかしていける。

玉置泰臣氏著作

第１０次十津川分村開拓団（１９４１年興安東省札蘭屯入植）
⇒３４２名中１７２名死亡・報国農場隊の悲劇。戦後、三重県他に再入植。
開拓団員だった玉置泰臣氏の労作『遥かなる過去を尋ねて』がある。
第１１次大塔村分村開拓団（１９４２年浜江省延寿県入植）
⇒約３００名移民：６０名青酸カリ服毒自殺・３０名集団自決。
⇒１６歳以上シベリア抑留・帰国者？名
第１２次芳野開拓団（１９４３年間島省汪清県入植）
⇒６２０名全国屈指の規模の開拓団：死者１１３名・未帰還者１１２名。現在、奈良市で週１回開催されている中国帰国者のための『日本語教室』に多くの人が通う。

第３・４次天理（生琉里・西生琉里）開拓団 1934・1935 年入植

第１２次天理（一宇・大和）開拓団（黒竜江省ハルピン市郊外入植）

⇒全国から６００戸・３０００人の入植計画（結果　　名？）

父母が入植したハルビンで生まれた山根理一氏の著作に天理開拓団の当時の状況が詳しい。『県開拓史』には多数の死者・「昭和２０・９・１７ソ連軍に３５名連行、銃殺。（１名助かる）」等々の記載あり。

戦後、奈良市生琉里村（ふるさとむら）や三重県伊賀生琉里村などに再入植。

2015年(平成27年)8月14日　金曜日　13版▲　奈良　京1・京2 24

帰国支援 身元引受人に

中国の「天理村」に生まれ

語り継ぐ 奈良 戦争 戦後70年 2

山根 理一さん(80)

旧満洲天理村事務所

山根

山根理一さんの自宅前には今も「天理村」の看板が立てられている＝天理市

朝日新聞より

戦後、奈良生琉里村伊賀生琉里村に再入植

以下、その一つ、山根理一氏から学んだことを紹介します。

山根理一氏に学ぶ（満州天理村帰国者支援運動者）

１　東生琉里村奈良県天理教会・天理満蒙開拓団慰霊祭での山根氏挨拶（2019・3・21）

「こんにちは。おまいりありがとう。いつも３月にみんなまいってくれてありがとう。（天理教の満蒙開拓関係の）慰霊碑は全国にいくつかある。満州天理村に一つ（ハルビン）。釧路の紫雲台？というところ、そして東京の団体の中にも一つ、伊賀にもそしてここ奈良市にも。ここが一番熱心でこんなにたくさん来てくれて‥。」

「釧路の墓地の話だが、山屋五郎？という人がいて、この人は（天理教会の）北海道教区で募集にこたえて天理開拓団に参加した人だったが、満州から無事帰ってきた。そしたら周りから「死んだ人（家族など）を残してきて（お前は）よく帰ってきたわ。」と言われた。あんまり責められるので釧路の駅前で割腹自殺しようとしたが、（それは）みんな止めてそれで釧路の地に碑を建てた。それこそ悲しい悲しい建碑の式でした。死んだ人は参加できない。みなさんは生きているからこうしてここに‥。満州開拓団の本当の数と本当の名前はいまだにはっきりしない状態です。」

２「奈良県から（天理満蒙開拓団に）敷島教会のＮさんを送りだした。昭和９年家族みんな。（私の作った）名簿にある。誰も奈良県から満州へ行かないのでみんなが頼んで。」‥‥のちに私が厚生省に（帰国の事で？）話を聞きに行ったら、「知らん。」人が代わったら「知らん。」「個人情報だから教えない。」との対応。

＊中野豊氏（元天理一宇開拓団・現奈良生琉里村在住）

「もともと国が奈良県に移民を出せ、と命令。しかし奈良県からはなかなか出ないので天理教に頼みに来たようです。」

３　７３１部隊について：

「風間の博が「天理村も（７３１や満州侵略に）協力した。」「（７３１は）人体実験している？」と言うてきたが、

「ばっか、お前の父さん行ってるのに。人体実験の前、もっともっと前、コンクリート打ちに、こんな分厚い。セメント高く、日当とても良かった。喜んで（働きに）行った。後から見にいけない！（当時何をしていたかみんな知らされていない。）」」

＊風間博氏の話でいうなら終戦後、ソ連軍に拉致された満州天理村の男 153 名（博の父もいた）の無事を、満州天理村に残った婦女子・老人に知らせた功績こそ私たちは知っておくべきではないだろうか。婦女子・老人たちは夫や父が生きていることを知り、生きる希望が持てたので自決などにならなかった。

４　ハルビン忠霊塔前銃殺事件

この事件は昭和２０年９月１７日天理開拓団の男子３５名がソ連軍に連行され銃殺される。（１名助かる）という衝撃事件だが、真相は今に至るも不明。

山根「僕の同級生のＩというのもお父さんがどうなったか聞きたくて聞くがＯさん（一人だけ助かった）しゃべりたくない。自分だけ生きているんだから。つらくてね。だけどぽつりぽつりとしゃべることとの中で‥。このＳという人の奥さんは少し前まで伊賀上野で（生琉里村で）お元気でした。西部落の人でした。」

「北海道のＨさんのこども二人と孫と計三人を連れて忠霊塔へ行って（戦後ずっとしてから）土持って帰った。甲子園みたいやけど。」

５　奈良県天理から満蒙開拓義勇軍に行った子供たちの状況

奈良県の満蒙開拓青少年義勇軍には天理からも４名の参加者がある。（『奈良県満州開拓史』名簿に）そのことを山根氏にお聞きすると、

山根氏「養徳院（天理教の孤児院）の子は可哀そうや。親ないし、割り当てで‥（義勇軍に行かされた。）シベリアまで廻って（シベリア抑留）戦後（養徳院に）帰ってきたが、誰も帰って来てもニコニコしない。（食い扶持が減るから？）ほんとに可哀そう。僕内緒で炊事場で飯食わせてやった。」

「義勇軍なんかに行ってた人で褒める人なんかだれもいない。１回出た人帰って来ても。何が軍やねん。」

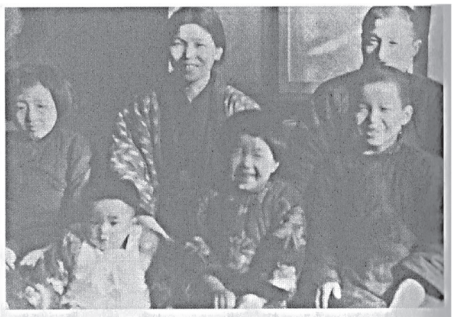
６　天理教の戦後留用者は八路軍にも国民党軍にも多数参加

この留用の問題どうとらえるかは難しい。もっと検討していきたい。

山根さんが何回か私に嘆いて（つぶやいて）おられました。天理教本部は満州残留邦人の帰国運動を組織として？やってくれない。天理教は満州へ多くの移民を送り出したのに。自分等個人の力では不十分だ。その帰国を組織をあげてすべきなのに‥と。天理教本部が今に至るまで侵略戦争や７３１部隊との関りについて反省が十分でないという指摘がありますが、それもわかるのですが、奈良にいる中国帰国者２世らの日本語が話せない、多くの方が生活保護の状況におかれている等を目の当たりにして、天理教本部には侵略戦争の反省と

共に、今ある課題、今困っている人の課題にも目を向けてほしいものです。ちなみに今年は中国からの帰国が始まって４０年になりますが半数がいまだ身元判明していません。

７　最後に右の写真は親が 731 部隊につかまる寸前に助けられた子供たちが写っています。山根さんからお聞きした話ですが、山根さんは満州天理生琉里村の南にある上野半一さんの家を見て「急に子供が増えておかしいなあ。」と当時思っていたとのこと。実はその子らはマルタとなって 731 部隊に捕まった現地「満州」の人たちの娘ら5、6人だったとのこと。山根さんは上野さんの娘・山岡一枝さんからその話を聞いています。731 部隊は小説やNHK 特集等で多くの人がその人体実験を知っているが、奈良県にも関りがある事だったのだ。そしてその内容はそこで働いて協力したとか、チフス菌等で病気の被害を受けたといった加害や被害の話だけでなく、子どもたちを助けたという感動的な話もあったのだった。奈良県民に伝えていき、広く知ってもらわなければと強く思う。



ハルピン石井部隊の実験に送られる寸前に助けられた少女　後に結婚して幸せに

山根氏著作より

＊戦争の被害と加害、反戦・抵抗について

小林多喜二・長谷川テル・石垣スエノ（治安維持法犠牲者・元香芝町議）さん他

もちろんあの侵略戦争に反対された方はすばらしい。しかし私は「奈良県と満州・シベリア」を学ぶ中で　①侵略戦争に反対した人の掘り起しと共に　②ほとんどの人が被害者という立場で、戦争に加担した保守的な方の中にできるだけ入り過酷な時代を生きた人々の真実の姿を知り、学び、若い世代に伝えること。③そして奈良県にも多くおられる、現在、困難を抱えて生きる中国帰国者１世・２世・３世の実態を知り、支援をする。等が大切だと思っています。

８　以上が共鳴させられる山根氏の中国帰国者への対応ですが、最後に山根理一氏の心に残ったいくつかの言葉を紹介します。

@「中国へ行ったら残留孤児が泣いている。自分の名前もわからないから。それは手を伸ばさずにはおられない。」

@「(残留邦人引き揚げについては)それぞれ家系図作って良い事も悪いことも聞かなければならない。そうでないと本当の事、書けない。」

@「人の話、録音しなさい。全部記録に残しなさい。」

@「名簿作りが一番大変やった。苦労した。あばくことが目的ではないが、真実を！本づくり、映像で残す、紙芝居、他の開拓団でもしてほしいが…なかなかようせん。」

@「地図あんた一杯コピーしてるが、その地図があったから残留孤児探せたんや。」

@「M さんと一緒に日本に帰国した息子（２世）が心の病で入院。（私が）中国へ帰るか？と聞くと急に元気になった。」

@「A さんは満州で７人も身内亡くしたので、絶対碑を作りたい、とお金を出してくれたの

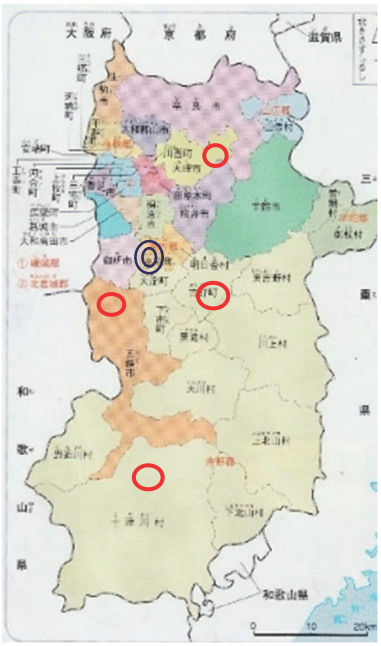
で慰霊碑ができた。」

@「その人は生きていたのに（慰霊碑の）銅板に名前を彫った。後で慌てて消した。そんな失敗もあった。」等々。

Ⅳ　奈良県に「平和資料館(満蒙開拓を含む)」の設置と中国帰国者の支援を

１　奈良県には県立図書情報館に図書中心の「戦争文庫」があるが、戦争遺品・戦争資料を展示する「平和資料館」がほしい。また奈良県関係の中国帰国者に関しては満蒙開拓団・義勇軍の戦争体験をきちんと継承していくことが特に大切ではないだろうか。吉野や紀伊山地から降りてきた辺りに小さくていいが「奈良県満蒙開拓平和資料館」を作ってほしいが…。

２　中国帰国者(中国残留邦人家族)の現在の課題は何だろうか。一世が少なくなって二世が高齢化しつつある現在、日本語獲得は引き続く大きな課題だが、一世並みの年金を中心とした生活保障・諸権利が認められていないのが現状だ。私は香芝市から奈良市の生涯学習センターへ毎週土曜、奈良県中国帰国者連絡会の方たち（張会長によると 2020 年は 62 名が会員だが奈良県には中国からの帰国者は600人～800人いるとのこと）が参加する日本語教室に通っているが、途中、大和郡山市、奈良市には彼らほとんどが住む県営住宅や市営住宅が林立している。歳をとってから一世の親と一緒に日本に永住帰国した彼らは低賃金の肉体労働がほとんどだった。日本は奈良県は「生活保護」の制度を使って、病気の対応、住宅の対応を行ったが、本当にそれで日本がした戦争の犠牲者である彼らの労苦に報いたといえるだろうか。彼ら二世のほとんどは「文化大革命」「毛沢東語録」「人民公社」「生産請負制」など戦後新中国が苦闘してきた諸制度のうまくいかなかった悪影響をもろに受けている。「小日本鬼子」として肩身を狭くして生きてきたのは本当なのだ。私たちボランティアはもっと彼らの真実の声、願いを聞きたい。そういうことを話してくれる関係を築きたいと思う。



○　奈良県４大満蒙開拓団
(天理開拓団・大塔村開拓団・
十津川開拓団・芳野開拓団)

◎　○○町辺りに満蒙資料館

　そして彼らには何よりも「戦争の語り部」になってほしいのだが。

３　最後に 2021 年度に冊子『香芝市民と満州・シベリア』に続き、もっとわかりやすく若い世代に、平和教育に使えないかと紙芝居を２つ作成したのを紹介します。

（にしじま・たくろう：1950 年大阪生まれ・元ろう学校教員、NPO 法人・平和のための香芝戦争展会員。香芝市を中心とした戦争体験掘り起しを行っている）

中国における日本文学の受容　管見

五味川純平「人間の条件」を端緒に

平山 三男

「人間の条件」との再会

「質問があります。」

思いつめたような顔つきで近寄ってきた受講生がそう言った。

「『人間の条件』・・・主人公の梶について、どう思いますか。」

都内の予備校の講師室でのことだった。質問に来た予備校生は、その後、都内の大学に入学。卒業後、社会人として数年生活をした後、地方国立大学医学部に入り、今は精神科医として開業している。予備校卒業後、しばらく関係は途切れていたが、最近、連絡がつき、彼の卒業後の経緯を知ることになった。

彼の質問にどう応えたかは覚えていない。だが、その時の真剣な顔つきは記憶の深いところにはっきりと残った。

五味川純平の『人間の条件』全六巻は 1956（昭 31）年～60（昭 35）年、三一書房刊。彼が読んだのは家にある父母の蔵書だったと言う。昭和が平成に替わろうとする少し前、受験生の彼がその長編を読んでいたことは意外だった。

私は古本屋で全巻揃った版を買って読んだ。高校生の時だった。

しかし、その前、『人間の条件』に私を導いたのは、加藤剛が主人公・梶を演じたテレビ放送だった。この放送は TBS で 1962（昭 37）年 10 月～翌年 4 月、夜の 10 時から 1 時間。

南満州鉄鋼会社に勤めている梶は、徴兵逃れのため、妻・美千子とともに北満の老虎嶺鉱山に赴任する。日本の敗色が濃くなったころ、現地召集され、上等兵となり、ソ連の捕虜となったが、収容所から脱走する。最終回は、雪の原野を彷徨する場面だった。自らも餓えているのに、中国人の店から盗み出した饅頭を口にすることなく胸に抱き、妻・美千子の幻影を追いながら行き倒れて凍死する場面だった、と記憶する。

端正な加藤剛の餓え衰え、ぼろをまとった姿、そこに至るまでの梶の人間としての苦悩、それらが、原作である作品を読む切っ掛けとなった。

『人間の条件』はこのテレビ放映より先に、小林正樹監督、梶（仲代達矢）、妻・美千子（新珠三千代）で 1959（昭 34）年～61（昭 36）年、三本に分けて映画化され、後に三本、9 時間半を超えるオールナイト興行は定番になった。しかし、年齢的に幼く、この映画を見る機会には恵まれなかった。

予備校生の彼の質問の核心は、梶をどう捉えるべきかで、それこそが「人間の条件」という作品の核心なのだ。

その後、この作品を読み直したり映像に触れ直す機会はない。だから、作品細部の記憶は定かではない。しかし、「人間の条件」とは何であるか、梶とはどういう人間なのか、という作品の核心への思いは心に留まり続けている。

上海で再会した「人間の条件」

1987(昭 62)年 3 月初め、上海外国語学院(現・上海外国語大学)の春期講習に招聘され、一人で赴いた。大学は旧「日本租界」のあった地域にある。旧英・独租界に残っている大きなビル群に比べてここにに残っている日本人の家々は低く粗末だった。

かつて、父は 1937(昭 12)年 8 月、第二次上海事変に応召した。母と結婚したばかりと言っていい時期だった。父は戦争体験をあまり語らなかった。この「事変」の激戦地は呉淞上陸作戦だったという。私は大学での講義のあいまに現地を訪ねた。その当時は殺風景で、揚子江岸に国民党軍のものと思われるトーチカが残っていた。茶筒のような形で、コンクリートは薄かった。横に細長い銃眼の奥には闇があった。

そこで撮ってきた写真を見て、父は黙って泣いた。

上海外国語学院の学生は優秀であった。彼らは中国のあちこちの大学の日本語教師で、再教育のための講習なのだ。面白いやりとりもあったが、割愛する。

上海に来て気が付いたのは、捲舌音がない事だ。北京やもっと北方の人たちの発音は、日本人には真似をしにくいほど、捲舌音が豊富だ。だが、上海では「我是日本人」を「ウオ　スー　リーペンレン」と発音するどころか、上海弁では「ン・ゴ　サパニン」とさえ言う。「謝々」は「シャヤ　ノン」。漢字でどう書くのかさえ迷う。その代わり、上海人の話す日本語は、なめらかで、我々には馴染みやすい。

上海外語の陳教授(1936 年生)が私の世話役であった。陳氏のお宅を訪ねたり、講義の打ち合わせをした。そんな合間に、日本文学のあれこれの話をしている時だった。

いつも穏やかな陳氏が強い調子で言った。

「五味川純平の『人間の条件』は認められません。石川達三の『生きてゐる兵隊』は高く評価されています。」

それは陳氏の個人的感想と言うより、中国における公式見解のように感じられた。

五味川純平と石川達三

石川達三(明 38～昭 60　秋田生)は自らのブラジル移民体験(昭５・３)を反映した「蒼茫」で第一回芥川賞を受賞(昭 10)した。その間の 1931(昭 6)年 9 月、中国、奉天（現・瀋陽）郊外の柳条湖で満州事変の切っ掛けとなる鉄道線路爆破事件が起き、1937(昭 12)年 7 月の盧溝橋事件を切っ掛けに、8 月の第二次上海事変、さらに中国全土に戦闘は拡大し、のちに日中戦争と言われる状態に突入した。石川は中央公論の特派員として、中支方面へ派遣され、12 月 13 日の南京陥落の数週間後から翌 1938(昭 13)年 1 月まで、南京に留まり、上海まで足を伸ばしたりした。この折り、見聞きしたことに基づいて「生きてゐる兵隊」を書き、伏せ字だらけの状態で「中央公論」に発表し、即時、発禁とされ、起訴され、有罪となった。

「生きてゐる兵隊」は日本軍兵士の残虐行為が描かれているが、その作品・作家論は本稿の目的ではない。戦後の石川は流行作家として多くの作品を書き、それらの中には社会的問題を扱った作品もあり、ペンクラブ会長としても活躍した。

五味川純平(大 5～平 7)は、大連生まれ。旧制大連一中から東京商大に入学、中退。東京外語大卒業(昭 15)。その年、満州の昭和製鋼所に入社し 現地で召集 1943(昭 18)年、ソ満

国境に配備され、五味川の部隊は、ソ連軍の攻撃により全滅状態で、生き残りの数名と共に捕虜となり、帰国は1948(23)年。戦後は「人間の条件」でベストセラー作家になり、ほかに『戦争と人間』（18巻，昭40〜67）などがある。

ここまで色々な概略を記してきたが、本題に入ろう。

「人間の条件」の梶という人間

「私は無錫の河童です」と微笑みながら出身地を紹介していた陳教授の

「梶のような人間的行為をする日本人はいなかったのです。」

という激しい否定は「人間の条件」という作品への否定であり、我々への否定でもある。中学生から高校生時代にかけて、「人間の条件」に接した私は、梶という人間が、日本人という支配者側にいながら、植民地の会社組織の一員、又、下級兵士として、懸命に、自分の人間性を保とうとする姿に感銘するだけだった。少し成長してからは、戦争という時代、植民地の支配者側という立場なども考え合わせた。

そして、唐突だが、ロシア文学を読んでいて、たとえばツルゲーネフを思い重ねてみた。彼は地主貴族の次男として生まれながら、貧しい農奴の生活を描いた。貴族の一員でありながら、ペテルブルグでの貴族仲間の社交世界に安住出来ず、故郷の領地に戻り、農奴の生活に同情し、その姿を作品に描いたのだ。

彼のような立場で、帝政のもと、自分の領地には学校を建て、病院を造り、農奴のために心を砕く。良心的な行動ではあるが、彼の行為は、自分の領土の農奴に生活の安定をあたえ、農奴であることに充足させてしまう。

つまり、帝政に反対しながら、領土に平穏という状態をつくりだすことにより、一地方の安定化、つまり帝政の安定化に貢献してしまう、という皮肉な結果を招いてしまうのだ。

梶の矛盾もここにあるのではないか。梶は鉱山の現場監督として中国人労働者ばかりではなく、特殊工人として送り込まれた中国人捕虜たちを監督する。過酷な仕事であり、中国人労働者の反発を受けるが、梶は懸命に人間としての誠意をつくそうとする。もし、梶の善意と努力が成功した場合、ロシアの心優しい貴族と同じになってしまうだろう。

さらに、応召してからも同じだ。暴力を振るう古参兵から若い兵隊を庇う。結局、梶はよい兵隊として、日本帝国の最前線で努力をするのだ。

あのロシア貴族も梶も自分をとらえている大きくて強力な体制、歴史の時間の中で懸命に人間としての在り方を求めている。

矛盾を含んでいても、そこに梶という人間の魅力がある、と考えている。

戦争の時代、内山書店主人の内山完造のように、魯迅と交流し、日中の文化をつなごうとした人物もいた。私の行った頃の上海、虹口の大学近くに内山書店は大事に保たれていた。

梶という存在の普遍化　晩唐の幻想詩人・李商隠

文学に携わる者として、もう少し梶を敷衍してみる。

70年安保時代、高橋和巳(昭6〜46)という小説家がいた。中国文学者であった。古本屋の一覧にはエッセーとされているが、彼の代表的「論文」であると私が考える「詩人の運命　李商隠詩論」について触れたい。

河出書房版の全集を持っていたが、全巻揃えて教え子に進呈したため、初出などを確認

できない。SNS で検索したが、高橋和巳については多くの記事があるが、「詩人の運命」には参考になると言えるような文章には巡り会えなかった。

高橋の著作から大胆に抽出すると、晩唐の時代、世の中の混乱の中、李商隠はあちらに付き、こちらに付く、と言うような節操のない男と考えられていた。高橋はこの詩人に注目した。

そして、「政治的混乱の時代、自分の人間としての真心に沿って生きようとする人間は、政治的に対立する両側から『裏切り者』として扱われる」という視点から、李商隠が現実から離れた幻想の詩人にならなければならなかったことを論じたのだ。

私は「詩人の運命」に書かれた李商隠は、高橋和巳の分身であろう、と感じた。

高橋は京都大学中国文学科で吉川幸次郎の薫陶を受け、大学院に進み、学生運動の激しくなり始める 1967(昭 42)年に京都大学文学部助教授に就任した。学生側の主張を教授会で代弁し、学生集会では教授会側の立場の説明をしたであろう。

新宿争乱事件の起きた 1969(昭 44)年には大学を辞職し、翌々年に癌で逝去した。親友の小松左京は、バーで会った高橋が静かに杯を傾けながら、突如床に倒れ込んで号泣した、と書いている。

高橋は、自分の苦悩と共通するものを李商隠に感じ取ったのであろう。

そして、今、私は李商隠・梶・高橋和巳に通底するものを感ずる。

対立する両者の中で、懸命に自分の人間としての知性、真心をつくしながら自滅する。

彼らほど激しい極限状況にいなくても、同じような立場に追い込まれ、苦悩するようなことは、我々にもありはすまいか。

その時々に、我々がどう決断し、行動するのか、立ち止まるのか。「人間の条件」が問われる時だろう。

作品受容の側

現在は多くの日本文学が中国に受け入れられている。中国に限らず、外国人の日本文学研究は、驚くほど深く専門的になっている。私の友人の一人、ストックホルム大学のグニーラ教授の博士論文は「『源氏物語』における引用和歌の研究」という英文の大著である。

また、日中共同シンポジウム(川端文学を巡って)でお会いした「漢俳」の李芒先生は悠揚迫らぬ大人の風格で、

「漢字で一七字は意味が多すぎます。漢俳は俳句の精神を受け継ぐべきで、形式を真似ることでありません。」

と示唆に富むお話をされた。

しかし、初めて私が上海を訪ねた時の状況は違っていた。その頃、中国で発表された川端康成の「雪国」論。三〇編ほどの中に見るべきものはあったが、三分の一の論調は「島村は、金銭で駒子を買う資本主義における階級の上級者で簒奪者」で、別の三分の一の論は「駒子は下層階級に安住して売春する堕落者だ」という立場の主張だった。

このような背景があったので、陳氏の「人間の条件」批判、「生きてゐる兵隊」称揚に中国における公式見解を聞かされた思いがしたのだった。

だが、もしかすると、陳氏は幼少時、日本軍兵士の横暴さを体験されたのではないか、とも考えた。

そして、満州への移住。ソ連軍の攻撃。色々な体験をして満州から帰ってこられた方々

には、また別の体験があり、別の見方、考え方もあろう。

敗戦後、間もなく生まれた私たち団塊の世代、身の回りに満州からの帰国者は珍しくなかった。中学校の教員、友達の親戚、就職してからの先輩に満州から帰国された方々がおり、肉親を失われた方もいた。そういう方々は「人間の条件」をどのように読まれるのだろう。

ところで、冒頭の受験生。私より一世代若い。この原稿を書くのに、彼とやりとりした。その時のメールの一部を最後に引用する。彼の許可を得ているので姓名も記す。

千歳烏山メンタルクリニック院長　平　幸司

五味川純平氏が『人間の條件』を上梓したのは 1955 年であり、書き手である五味川氏も、読み手である側も「戦後」はまだ終わっておらず、特に引揚者は自らの生々しい体験と照らして読まれた方も当時は多かったのではないでしょうか。

大陸から引き揚げてきた方の多くが「死の危険」に直面したことにより、現在でいう PTSD を発症し、心理的「防衛規制」として、記憶に蓋をしてゆく方が増え始めた頃の上梓であり、後の仲代達也主演の映画化に繋がったとは言え、読者、鑑賞者の一部は複雑な心境を梶に投影しつつも、罪業感を抱く者、被害意識を強める者、作品自体を忌避する者、さまざまな感想、意見が当時、日本側にもあったことでしょう。その複雑な心理を惹起した作品故に、1,300 万部を発行し、映画化までされたものの現在、その作品を思い出す方、知っている方は同時代の他の作品に比べて、少数派になっているのではないかと推察しています。ある意味、日本側としてはかなりの reality を持って受け止められたのではないでしょうか。だからこそ、忘れ去られる必然性のあった作品と私は解釈しております。

（ひらやま・みつお：1947（昭 22）年生。日本近代文学研究者　学習院大学大学院修了。関東学院大学、学習院女子大学などで教える。公益財団法人川端康成記念会評議員。川端文学研究会（現学会）の常任理事。同会事務局長として、中国とは東京と北京で、ロシアとは東京とモスクワで国際シンポジゥムを実施した）

「PTSDの日本兵と家族の交流館」は「日本が二度と戦争を起こさない。誰もが安心して暮らせる社会」をめざし「戦争はしません。白旗を掲げましょう。話し合い和解しましょう」の白旗を掲げ活動しています！

黒井 秋夫

★「ＰＴＳＤの復員日本兵と暮らした家族が語り合う会（語り合う会）」」は2018年1月17日に発足し、2020年5月10日に「ＰＴＳＤの日本兵と家族の交流館（交流館）」を開館しました。コロナ禍にもかかわらず、開館以来1250名を越える皆さんに来館いただいています。

2020年12月、NHK総合「おはよう日本」で「語り合う会」と「交流館」が報道されましたが、今年8月22日、同じくNHK総合「目撃！にっぽん」で30分間、8月19日には「クローズアップ現代+」でも活動を紹介されました。また、地元・武蔵村山市の「市報3月1日号」では2面全面で市民に紹介されるなど、「第二次大戦でPTSDの日本兵が存在したこと。戦争はPTSDの兵士を必ず生み出すこと」が報道されて、地元だけでなく全国に悲惨な戦争の後遺症の発生が知られるようになってきました。

★2021年10月25日、「語り合う会・交流館」の代表、黒井秋夫が東京都内の病院の職員研修会で講演いたしました。

講演では放送された映像のＤＶＤで活動のあらましを紹介し、2020年の中国人歴史研究者、李素楨さんとの出会い、交流が続いていて、今は中国訪問に備えて黒井秋夫が中国語をオンライ授業で受けていることなどお話ししました。また、日本が2度と戦争をしない、戦争開始の時は「銃は取らない。ただちに降伏する」決意を現わす「戦争はしません。白旗を掲げましょう。話し合い和解しましょう」と記した白旗を「交流館」の玄関に掲げている意味もお話ししました。

★参加者は20代、30代の若い皆さんで、真剣に聞いている気持ちが伝わり、黒井は話しながら何度となく声が詰まり感動しました。今までの講演会で高齢の参加者が多数でしたが、戦争の歴史を未来に語り継ぐ上で若い人たちに出会えたのは嬉しいことでした。同じ病院から2022年1月にも講演依頼されています。

★後日、感想分が届きましたが、そこでは、「PTSDの日本兵が存在したことを初めて聞いて、従来の戦争の見方が変わった」、「振るわれた暴力の影響が今も家族に連鎖し戦争の影響が続いている」、「戦争でPTSDの兵士が必ず生ずることが分かった。やはり戦争をしてはいけない」

「PTSDの日本兵の存在は語り継いでいくことが大事だ。」などの感想が寄せられました。以下、6人の感想を紹介いたします（一部、抜粋しました）。

1　加害の歴史を認めようとしない今の日本国憲法は、アメリカの押し付け憲法だと言っている自民党、特に保守の議員の頭の中が本当に分からなくてこわい思いをしています。一人の力は微力ですが無力ではないので、自分の意見、想いを周りの人に発信する、今日聞いたことを話すことからでも始めていきたいと思います。黒井さんの活動は必ず世の中を変えると思います。中国の方との交流お話しもすごい勇気づけられました。ニュースのメール送信を希望します。

2　お父さんの思いを率直に語り活動を起こす姿勢に感動しました。イラクのPKO活動を終えて帰国した自衛隊員にもPTSD、自殺の問題があると聞きます。時代は違っても戦争が与える心への影響の大きさに驚きました。今回のお話しを聞いて自身の祖父や祖母にも何らかの影響があったかもしれないと思いました。黒井さんと李素楨さんのエピソードには運命的なものを感じました。そして中国語を勉強されていると聞いて驚きました。黒井さんが中国に行かれることがあれば、そのお話しもぜひ聞いてみたいです。

3　黒井さんの「白旗をあげることは恥ずべきことではない」それは、イコール国民を守ることなのだと感じた。改めて戦争はいけないものと思う。今日はありがとうございました。

4　戦争のお話し、原爆の話しとか、よく聞くのですがPTSDの日本軍の話しは全く聞いたことがなかったです。海外のドラマとか映画とかでそういうアメリカ兵の話はあるので、考えてみれば帰還した兵士の中でPTSDの人がたくさんいるはずなのに、気づかない、分からない、国がかくしてきたということ、今回初めて知りました。

5　戦争というテーマのお話しは何回か聞いたことはありますが、日本兵の家族をテーマは初めてでした。自分は戦争の時代に生まれていないので全く実感はないですが、戦争の影響でその家族がいまだに苦しんでいるのはとても心が痛みました。
自分のじいちゃんも90才を越えていますが戦争の話しは一回もしたことなかったけど、実は辛い思いで毎日を過ごしているのかと少し不安になりました。戦争は終わったと言われていますが、日本には黒井さんのように苦しい思いをした方がたくさんいるので、そういった意味ではまだ戦争は終わっていないんだと思いました。今日のお話しを聞いて、なぜ戦争をしてはいけないか学べたし、自分の口からも他の人に伝えられるくらい自信を持ちました。

6　私が初めてPTSDを知ったのがイラク戦争後の米兵のドキュメンタリーでした。そこに

はまともに生活できず、自殺、家庭内暴力が多くみられたと放送されていました。今回、日本兵の PTSD については学校やテレビでも知ることはなかったのでとても良い勉強になりました。テレビでは 8 月に戦争をテーマにしたドラマやドキュメンタリーをやり、戦争の恐ろしさを知る事ができますが、その後の兵士たちの生活にフォーカスした内容は今まで見ることはありませんでした。

★李素楨さんとの交流は 2020 年 9 月に共同通信社から発信され山形新聞、南日本新聞などで報道されました。

特言

溝埋める交流

炎暑が続いた８月末、東京都武蔵村山市の「交流館」を中国人女性(67)が見学した。戦場から復員後、心的外傷後ストレス障害（ＰＴＳＤ）に苦しんだ元兵士らの実態を伝える施設。黒井秋夫さん(72)が自費で自宅脇に建設した。

女性は中国の大学の歴史研究者と名乗った。黒井さんの名は新聞で知ったという。交流館には父の陸軍経歴書や戦地からのはがき、ＰＴＳＤの学術書を展示している。

女性の出身地を聞き、黒井さんは驚く。吉林省公主嶺だったからだ。父が最初に徴集されたのが、南満州鉄道を守る歩兵隊があった公主嶺。因縁を感じた。父は復員した後に無気力状態に。「ほとんどしゃべらず、働かなくなった」。1989年に生涯を閉じた。

黒井さんは約５年前、ベトナム戦争帰還兵の多くが酒や麻薬におぼれていたことを知る。「父も同じ精神的な病だったのではないか」。兵士の戦争神経症を独学した。

黒井さんは女性に「戦時中、あなたのご両親らに対して行ったであろう父の非道な行為を謝罪します」と声を掛けた。女性は黒井さんの手を握り、日本語で「日中友好、日中友好」と応じた。

約３週間後、女性から黒井さんにメールが届く。「お父さまは庶民として戦場に行かされたのであって、責任はない。国境や民族を超えて平和な社会をつくるために、互いに協力しましょう」とつづってあった。

歴史認識を巡り、アジア近隣諸国との溝は依然として深い。大切なのは対話の回路を絶やさないことだろう。非難の応酬は何も生み出さない。わだかまりを溶かすような市民レベルの活動。その意義は小さくない。

「心が軽くなった」という黒井さん。印刷したメールを額縁に入れ、父の仏壇に供えている。（志）

「交流館」来館者の78％が小中学生です。１月以来668人！毎日5人が来館します！

★『戦争をしてはならない』を子どもたちにこそ語り継ぎたい！

＊「ＰＴＳＤの日本兵と家族の交流館・子ども図書室」来館者数（2021 年 1 月～9 月 30 日）

	子ども	大人	合計	子ども比率	開館日数
1~4月	278人	74人	352人	79%	60日
5~6月	255人	42人	297人	86%	30日
7月	89人	24人	113人	79%	10日
8･9 月	46人	42人	88人	52%	34日
合計	**668人**	**182人**	**850人**	**78%**	**134日**

★交流館東に学童保育・児童館が隣接しています。子どもたちの来館者増は交流館の当初の未来像を変えようとしています。

未来に語り継いでいくことを考え**「子どもたちに伝える」こと**こそ重要と考えています。5 年後、10 年後、20 年後の交流館では、今来館している子供たちが学生になり、青年になり、社会人になり、彼らが語り部の後継者の時代が来ると確信しています。想像すると将来が楽しみです。とは言え、「PTSD の日本兵の存在」を国民のほとんどはまだまだ知りません。「PTSD の日本兵の存在」が多くの皆さんに知れわたることが「戦争はダメだよね」の世論を作り、「日本が二度と戦争を起こさない。誰もが安心して暮らせる社会」に繋がると信じて活動を続けます。

★皆さんへお知らせ。

1，「語り合う会・交流館」の活動は全てカンパで支えられています。（2021 年 1 月 1 日～１０月 31 日の会計は以下の通り）

・カンパ２２万 2326 円（６７人・団体）心から感謝いたします。★1 月 1 日の残高は 19 万 3964 円　・2021 年のカンパ累計　24 万 9126 円

・講演料その他収入　4 万円　・収入合計　28 万 9126 円　・支出　通信費など　18 万 3455 円　**★９月 30 日現在の残高　29 万 9635 円**

2，放送されたＮＨＫ「目撃！にっぽん」は YouTube にアップされています。

3，黒井秋夫が 2020 年 11 月に三多摩平和交流会で講演した DVD も YouTube で見ることができます。

「語り合う会・交流館」ホームページ https://www.ptsd-nihonhei.com

☎080-1121-3888（代表・黒井秋夫）qqkc6av9@ceres.ocn.ne.jp

連絡先　〒208－0001　武蔵村山市中藤３－１５－４

（くろい・あきお：1948 年、山形県山添村（現・鶴岡市）生まれ。芝浦工大生協、新潟大学生協などを経て日本生協連（コープ共済連）などを経て 2010 年退職。2018 年、「PTSD の復員兵と暮らした家族が語り合う」を立ち上げ、現在に至る）

「満蒙開拓団」の生き証人、林正之さんの証言

千田　優子

はじめに

林正之さん一家は家族総勢10人で満蒙開拓団として旧満州に行き、二人のお姉さんたちは中国人と結婚したため30年以上経って帰国し、現在、日本でそれぞれが自立し仲良く暮らすファミリーです。90歳を過ぎた林正之さんに戦争体験を語って欲しく書き留めたものをまとめてみました。

林正之さんの証言

私、林正之は昭和５年４月５日奈良県にて出生。昭和18年、父が隣組の集まりで、満州行きを決めてきました。私は中学3年生でした。まだ雪があって白々としている頃の３月に村の人に送られて出発。広島の呉軍港近くではカーテンを閉めたりしました。下関についたものの乗船まで3日間もかかりました。4時間の乗船で釜山に着きました。船には憲兵も乗っていて騒いだりすると叱られました。船ではハヤシライスを初めて食べたことを覚えています。

＜後河屯＞（入植した村）は中国人が豚を飼い、朝鮮人が食肉工場で働いていました。与えられた家は今の今まで村人が住んでいた家だとすぐ解りました。でも、子どもたち同士は入植してすぐに仲良くなったし、遊ぶのは朝鮮人が多かったのです。遊んでいて口論になったりすると家の人が迎えに来て、負けていても日本人の子どもは勝ったことにしていました。

当時の中国人はコメ・麦・大豆・粟等を持って衣類と交換しに良く来ていました。開拓団から受ける米や麦ではとても足りなかったので、私達は喜んで交換していたのです。

昭和20年８月近くなると芳野開拓団の21才から45才までの男性は兵隊に招集され帰って来た人は誰もいません。日本が敗戦するまで中学生の私も兄について銃を持って南門の警備にあたりました。しかし、鉄砲を持っている方が危険と言われ井戸に投げ捨てました。

８月15日以降はロシアから離れていた村だったため大丈夫と思っていたものの末頃、２キロ離れた村からソ連の戦車が来ていると連絡が入りあわててトウモロコシ畑に3時間くらい隠れました。８月末、早く日本に帰るために移動しようということで牛車に荷物を詰め込み、山道を歩く事にしました。道が悪いため、一日、二日目と荷物をだんだん捨てやっと日本人がやっていた印刷所にたどり着きました。ここでは牛車が欲しいために朝鮮人が難癖をつけたうえ、ソ連兵を連れてきて刃物全部を持ち去り、さらに牛車も持ち去られました。ここも危険と判断してさらに歩いて日本人学校に移動。学校は人であふれ廊下の入口で横にもなれず座ったまま寝ていました。学校は安全でしたが毎日、死人が出てグランドに埋める状態でした。食べ物がないのです。

開拓団はこのままここにいても安全ではないと判断し、入植した村＜後河屯＞に帰ることにしました。戻る途中、何百人もいたと思うが、ソ連兵に連行された開拓団もありました。その一行の中に顔見知りの人がいて手を振っていたのをまだ覚えています。村に近くなるほどソ連軍の戦車が走っていました。この山中で川の水をみんなで飲みましたが、仲間の一人が上流の方に行ってみると日本兵の死体が転がっていて、近くの道路には戦車が走っており、みんな＜お＞の口をして死んだ日本兵があちこちに転がっている状態でした。

帰ってみると畑も家も朝鮮人の前の持ち主が使用していました。田は実りが悪いため手をつけていません。母は＜後河屯＞に戻るとすぐ寝込み、３日後に死にました。アメーバ赤痢でした。

私は保安隊本部のオンドル炊きに使われました。私たちが作った食べ物は現地の人のものであり、私たちは食べるものがありません。私は友達とトウモロコシを盗みに行き煮て食べていました。採っていた時、朝鮮人のおじいさんに見つかり、顔を見たら私らが入っていた家の持ち主でした。そのころ、中国が安定するまで「保安隊」という兵がいました。その隊長の本部が開拓団の本部だったのです。出戻った私たちはオンドル（冬の間まきを燃やし暖を取る）の当番として使われました。しかし、八路軍が来るというので、いつの間にかその兵隊たちは居なくなりました。食べるために姉は仕方なく保安隊隊長と結婚する事に話が進みました。姉は母も死んでしまいもう日本に帰ることを諦めたのでしょう。開拓団では親・兄弟を助けるために娘や母たちは結婚、再婚した人が多くいました。姉の結婚相手である保安隊長の実家に私の家族８人と友人家族５人が一緒に転居しました。しかし、夫になるはずだった保安隊長は八路軍を恐れて行方不明になり、４年くらい

帰って来ませんでした。そのため保安隊長の母親は、息子はもう帰ってこないと考え、姉は違う村の別の人と結婚することになりました。

友達のお母さんは豆腐屋の人に女の子二人、男の子一人連れて再婚しました。それから何年かたってそのお母さんは子どもを残して夜、井戸に飛び込み自殺しました。村の人たちは井戸水をみんなで汲み出し、死体を上げました。子どもを育てられない豆腐屋は遠く離れた村に子どもたちを連れて行きました。

この時期は帰る術も食べる術もなく親や兄弟たちを助けるために結婚や再婚にふみきった娘や母親が沢山いました。

何年かたって保安隊長だった姉の元結婚相手が八路軍につかまり、公開銃殺刑になりました。村中に知らせがあって私も見にいきました。「隊長」という立場だったために公開としたのでしょう。八路軍は地主や村の雇い主が不満の声を上げると角材で殴り殺す方法を取っていました。各村ごとに行われ毎晩５、６人の処刑がありました。私は子ども心に八路軍は正しいと言っても、人を殴り殺す事にはビックリしました。私の雇い主の主人も６回くらいたたかれ１ケ月起き上がることが出来ず、私は出ていくように言われ、別の家に働きに行きました。やがて中国の政治も落ち着いて来た頃、日本への引き揚げ船が出て帰る事が出来ました。私の姉、長女・二女は結婚していたため帰ることが出来ませんでした。しかし神戸の震災の後くらいの年に帰って来ることが出来ました。大阪の方で開拓団の帰国に力を注いでくれていた方が保証人になって帰国することが出来たのです。ツテが出来ると何度かに分けて結婚した子どもたちも孫たちを連れて帰ってきました。帰ってからは奈良の県営住宅に落ち着き、知り合いの工場で飯炊きの仕事について働きました。２年後くらいには結婚した長男・二男・三男・四男・長女の夫婦を呼び寄せました。中国は一人っ子政策のため日本に帰ってきてから弟や妹を産むことができました。その後は大阪府の市営住宅に入り娘夫婦と暮らしていました。姉の葬儀の時、身内は36人いました。孫を入れるとすごい数です。姉は８５才で他界しましたが、林一族はそれなりに安泰な戦後生活だと安堵しました。

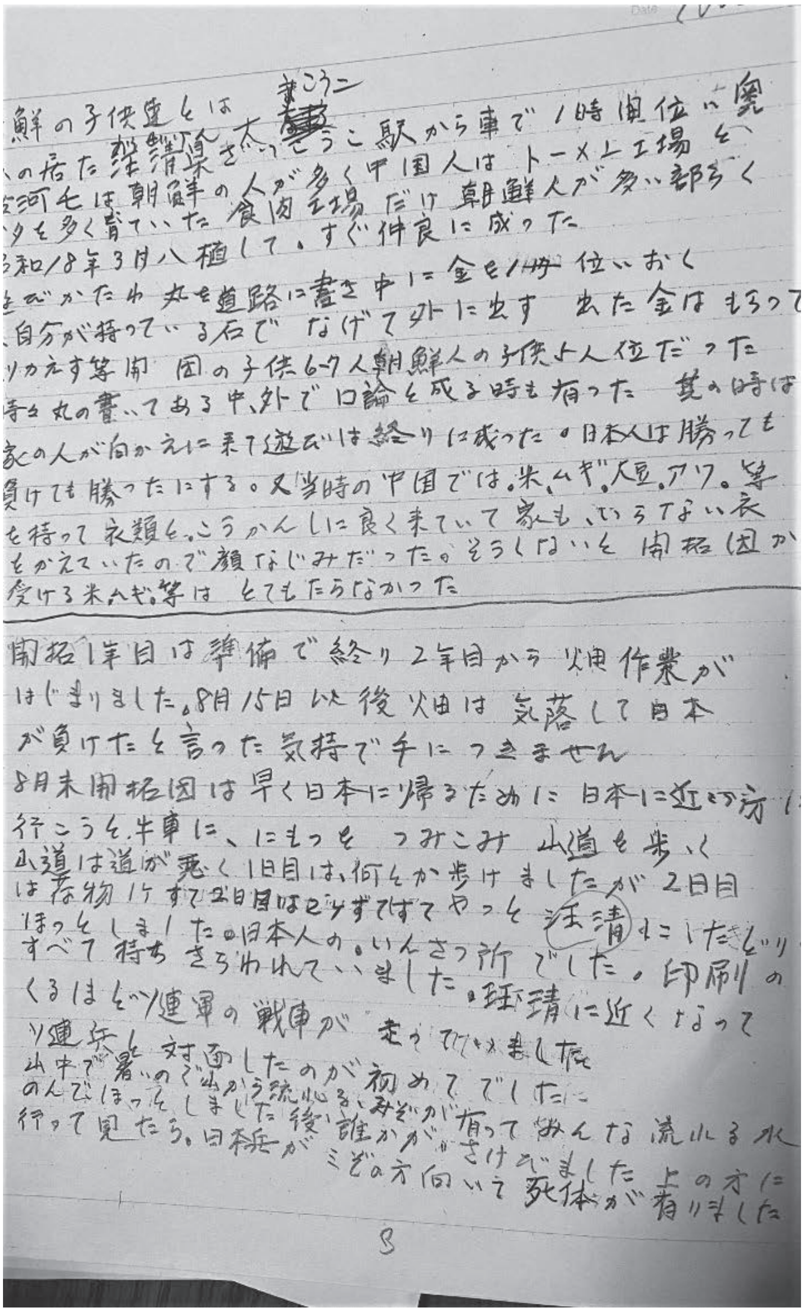
≪追記≫　千田優子

戦争体験談を聞く作業は、ノートに思い出すまま筆記する形式にしました。最初は思い出すのが大変つらいかなと思われましたが、10ページにも亘る記録を鉛筆書きで書いていただきました。

まだまだ書ききれないくらいの細かな描写があります。90才過ぎてもおじいちゃんの頭もけっこうしっかりしているとみんな驚いていました。

同居している娘さんは、おじいちゃんは孫が産まれた時おっぱいをやっているところは見たくないと言っていましたと。開拓村を逃げる時に乳飲み子は迷惑かけると、乳房を吸わせながら窒息死させた光景を思い出すかららしいとそっと教えてくれました。戦争はやる方もやられる方も砲弾が飛び交うだけでない悲惨な事だと思い知らされました。

大学生のお孫さんに「戦争は絶対ダメ！」とご夫婦でしっかり強い口調で話す意味が深く解りました。


鮮の子供達とは　まこうこ
の居た深溝泉さん こうこ駅から車で1時間位に奥
河モは朝鮮の人が多く中国人はトーメ上工場を
タを多く育ていた食肉工場だけ朝鮮人が多い部らく
昭和18年3月入植して、すぐ仲良に成った
地面にかたわ丸を道路に書き中に金を1円位いおく
自分が持っている石でなげて外に出す　出た金はもらって
りかえす等開　団の子供6-7人朝鮮人の子供5人位だった
時々丸の書いてある中、外で口論と成る時も有った　其の時は
家の人が向かえに来て遊びは終りに成った。日本人は勝っても
負けても勝ったにする。又当時の中国では米、ムギ、大豆、アワ、等
を持って衣類と、こうかんしに良く来ていて家も、いらない衣
をかえていたので顔なじみだった。そうしないと開拓団が
受ける米ムギ等はとてもたらなかった

開拓1年目は準備で終り2年目から畑作業が
はじまりました。8月15日以後畑は気落して日本
が負けたと言った気持で手につきません
8月末開拓団は早く日本に帰るために日本に近い方に
行こうと牛車に、にもつをつみこみ山道を歩く
山道は道が悪く1日目は何とか歩けましたが2日目
は荷物すて3日目はずてずてやっと琿清にたどり
ほっとしました。日本人の、いんさつ所でした。印刷の
すべて持ちさられていました。
くるはとソ連軍の戦車が走っていました。琿清に近くなって
ソ連兵と対面したのが初めてでした
山中で暑いので山から流れる水を
のんでほっとしました後、誰かが、みぞが有ってみんな流れる水
行って見たら。日本兵がみぞの方向いてさけんでいました 上の方に
死体が有りました
3

（ちだ・ゆうこ：33歳から45歳まで松戸市議。労働者協同組合センターを馘になり、その後、福祉関係ボランティアを経て2016年、＜NPO法人あらぐさ＞を設立するなど、地域での活動を続ける）

満蒙開拓青年義勇隊

こぼればなし ①

方正県以外にもう一基

「日本人公墓」があった

― 水戸市河和田町本法寺境内に ―

末広　一郎

中国東北元満洲国・哈爾濱（ハルピン）市郊外に、哈爾濱和平公益性墓園があり、そこに“日本人公墓”の石碑が2000年10月30日に建立されました。

続いて2001年５月には、“極楽世界碑”が建立されました。暫くして“張氏家之墓”となりました。

同じ場所に３回も違った碑が、改名されて建立した事実を後世に残すべく、無学で老々の身ですが、伝えたいと思います。拙文を終わりまでお読み下さい。

今は幻と消え失せた「日本人公墓」の碑

この写真は十三年三月撮影のもので、四月七日の訪中説明会の時点では「日本人公墓」は実在していました。一般に広く宣伝されないための配慮から門外不出、撮影禁止をお願いしましたが、現在（六月訪中時）では既にこの地球上からは姿を消し、現存しておりません。墓地事業完成に至る経過の一つとして記録に残したいために本紙に掲載しました。

「礎会だより」38号より掲載

満蒙青年義勇隊の礎会の方が取り組まれたことですが、この事実を報告できるのは、会員外の私しか居ないのではないかと思っております。私は礎会の友の会の一員で、2001年６月の墓園訪中54名に同行致しました。

哈爾濱和平公益性墓園（末広）

先ず“礎（いしずえ）会”とは何か簡単に申しますと、全満にあった義勇隊訓練所の各中隊の中から優秀な者を募集し試験して、哈爾濱に新設された嚮導訓練所、指導員訓練所、特技訓練所、を卒業された方、在籍していた訓練生の方のことであります。

この訓練所に附随して、官舎、倉庫、病院、作業場、その他を以って、義勇隊の施設がある基礎の地だからというので、礎の地と呼称されていました。

戦後帰国して何年かたって、集ってくる拓友達の会を“礎会”と言って、義勇隊の仲間の模範となり、指導もされ、エリート集団として活躍されました。以上を礎会と言います。

その中の一人、故・仰木道之さんは、５期生（昭19年入所）で終戦後、残務処理をしていて、残留させられて北京市で日本語放送を30年間に亘って勤務されました。石碑について中国側との交渉はすべて中国語の堪能な仰木さんを中心にして進めてこられました。仰木さんは中国との旅行会社を経営もしておられました。訪中の世話も一切仰木さんがされました。

現在の礎の地は、香坊幸福郷人民政府で、昔の礎の地には、少し建物が残っていたりして、病院なども昔の所に新しく建築されています。その院長さんより、仰木さん宛に電話が入りました。

「この香坊地区も中国の発展と共に、建設ラッシュが進み、高層ビルが建立されています。その工事の中から、たくさんの遺骨がでてくるので、病院で預っている」と仰木さんに電話が入ったのです。

緊急なことに驚いた仰木さんは、早速現地に飛んで行かれ、人民政府、実験農場、哈爾濱墓園を訪問されました。

哈爾濱墓園に建立「極楽世界」碑(末広)

帰国された仰木さんは、礎会事務局に報告され、その結果、礎会を代表して、一任された故・平野豊樹、故・深田允文、故・立原愛介、故・仰木道之の４名が派遣され、代表して、現地での交渉を４人が決断して取り纏めて、帰国し報告され、承認されました。

詳細については長くなりますし、下手な文面を並べるより、2000年12月発行の“礎会だより”38号２頁の記事を後ページに掲載しますのでご参照下さい。

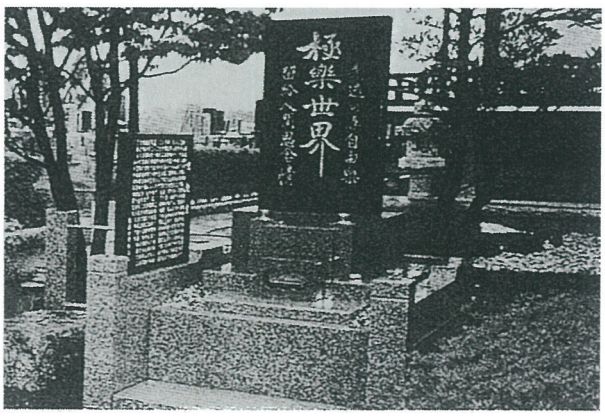
現地哈爾濱墓園に次々建立した、“日本人公墓”“極楽世界”のこの碑は、不思議なことに、わずか１年半後に撤去され、日本に来ます。空輸で本法寺境内に建立されました。一基の運送費80万円、一つの碑の作成費70万円と墓園の張さんが言われました。

2002年４月11日、本法寺では“極楽世界碑”の除幕開眼法要が実施されました。なんと盛会で100名以上の参拝者があったので、この一連の行事は、礎会の叡智の表れであると感じたりしました。

毎年２回～６回と法要が続けてこられました。私と山内るりさんとは毎回のように法要に参加しました。

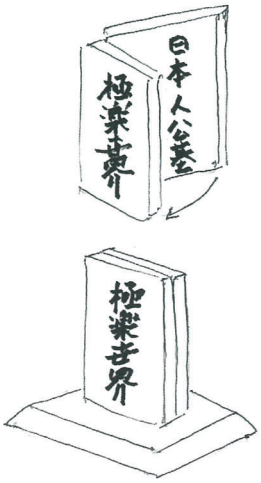
一つだけ礎会のやられることでおかしいと思うのが、二つの碑が図のように日本人公墓が抱き合わせになっています。“日本人公墓”が隠されています。何故隠されたのか、その真相を語ることは私にはできません。

―― 図面を参照下さい ――



本法寺別院にある極楽世界碑　(礎会だより)

「極楽世界」は哈爾浜市新香坊日本人収容所や、北満の地で非業の死を遂げた拓友、開拓関係者の慰霊のため哈爾浜市郊外に立てられた墓碑を2003年４月本院に移して安置されました。



本法寺では二つの碑を建立し、2003年４月11日に、“極楽世界”碑の除幕式を催行されました。翌年から１回目の法要が続けられました。

哈爾濱墓園では二つの碑が無くなった後に、“張氏家之墓”が建立されました。墓の納骨室に収められた遺骨や慰名簿などはそのままであります。「そっとそのままにして」、遺骨などは安らかに眠ってほしいと礎会では主張されていました。

平野　深田　仰木　　人民政府の方　立原

幸福郷人民政府に表敬訪問の４人
（礎会だより 38号より）

１日早くハルピンに着いた山内、
末広の二人は張氏家の墓に参る（末広）

極楽世界碑の第１回法要は、一人3,000円のお供えをして、お昼だけ弁当とお茶を頂きました。第６回目位まで礎会として、法要が続けてこられました。それにすべて参加したのが、山内るりさんと私でした。

拓魂公苑の慰霊祭が、毎年４月第２日曜日となっていましたので、第２土曜日を、法要日と恒例化されました。私の提案でした。第６回目から礎会としては実施されませんでした（理由は省略します）。でも６回目、７回目には、私と山内るりさん二人だけで参拝を続けておりましたが、その後はコロナのため催行しておりません。

折角、礎会の錚々たる面々によって、出て来た遺骨を温かい気持ちで正しく処理されたことに対し、一服の敬意を送りたいと考えます。おかしいと思うことはおかしいと思わないで先に進めます。

戦後、義勇隊開拓団の集いの中にあって、礎会の存在は常に模範として、沢山のことを教えていただき、尊敬と信頼を抱いておりました。

“日本人公墓”、“極楽世界”、“張氏家之墓”と三回も変更されました。中国事情に難しいところがあったことは、致し方ありません。遺骨が出て来た時、礎会の一部の方は、政府厚生省の問題だとの発言がありましたが、緊急のため、礎会の総意で独自に処理されました。

礎会が実行された二つの碑が、せめて日本に還ったことは、一応高く評価したいし、遺骨はそのまま哈爾濱墓園に埋葬されているから一安心であります。礎会の処理にご苦労の言葉を贈りたいと思います。

話を元の本法寺に戻して言わせて貰えば、参拝（見学）を続けたらどうだろうかと、提案させて頂くならうれしいと思います。本法寺の住職さんは、極楽世界、日本人公墓の二つが一つになっていることはご承知であります。参拝供養は歓迎されると思います。毎年４月第２土曜日11時に本法寺でお会いしようではありませんか。

哈爾濱和平公益性墓園　園長 張さんと末広

山内さんと礎会として参拝した本法寺にて末広

もう一つ、哈爾濱市和平公益性墓園に安らかに眠る“張氏家之墓”に納骨されている遺骨、霊名簿にも参拝（見学）をも提案させて頂きたいと申し上げます。

出て来た物言わぬ遺骨には、何の罪がありましょうや、今回この拙文に述べました事実を知って頂きましたが、本意をお伝えできたでしょうか。事実を伝え残したい一念から、不充分のまま、老骨に鞭打って努めましたが、お粗末で舌足らずで申し訳ありません。

終わりに臨み、よく考えてみると、何時までも大陸に眠る遺骨をこのまま放棄されていては戦後は終わりません。本当の意味での日中友好は実現できません。早く加害の責任を認め、謝罪するしか方法はありません。

南方の島々から、軍人の遺骨は収集され、国立千鳥ヶ淵戦没者墓園に収められています。シベリアからロシア政府の理解を得て、間違った日本人以外の骨まで持ち帰っているのに、中国に眠る８万の遺骨については、黒竜江省方正県にある“日本人公墓”があるだけです。中国全土に眠る遺骨はそのままです。

礎会がやられたと同じように、本当の遺骨が、帰国できることを強く願って終わります。

哈爾濱に納骨された十数人の遺骨、赤い布で包のが中国流とのこと

（すえひろ・いちろう：1925年生まれ。40年、嫩江訓練所に入所。43年、八家子（はっかし）開拓団へ入る。日本の敗戦後シベリアに抑留さる。49年、舞鶴に引き揚げ、49年から53年まで国立療養所に入院。55年みなみ工房設立。60年、とき印刷設立。定年で退職し現在に至る）

現地礎で掘り出された遺骨
処理のための訪中調査報告

礎会富山大会で、六期仰木道之氏から報告のあった、礎現地で遺骨が掘り出されて野晒しになっているという問題については、その後更に一期津田久稔氏訪中の折に、哈訓病院跡に新設された病院にも、二体の遺骨が保管されていることを知らされ、写真を撮るなどしてそれを確認し、病院長からはこの処理方法について質問されたが、帰国後に然るべく回答する旨を告げて帰国したとの報告があった。

東京事務局としては緊急役員会で協議し、現地調査を行うこととした。中国事情に明るい仰木道之氏、事務局立原愛介氏、平野豊樹氏、深田允文を加えて四名が自費での訪中を決め、十月十六日早朝新潟空港からハルピンへと飛んだ。

一、十七日早朝現場確認から始まる。

今は市場になっている練兵場角から哈訓病院脇を抜けて、裏通りに右折する。昨年訪中時には土煙りが立ち上る悪路だったが、見事に整備されていて目を疑うほどである。当時建築工事中だった住宅など煉瓦の建物は完成し、広いその一画が住宅街と化している。その中央あたりに、尖塔に十字架を設えた教会風の建物が一際は目に映る。

マイクロバスは更に奥に進む。慰霊の行事を行った空地に出る。こんなに狭かったのかと一瞬記憶を疑う。

かなり広かったはずの空地には既に建物が迫り、道路が整備され、残された空地には盛土が重ねられ、姿形は一変している。

仰木氏の案内で、遺骨の埋葬場所に立つ。今は草木はすべて枯れ、一段低い窪地に土まんじゅうが剥き出しになり哀れを呼んでいる。

宅造整備が急速なテンポで進められていることが想像できる。現場に立って目の高さまで盛り土されているのを見て、今後遺骨が掘り出される可能性は百に一つもないことを思い知らされる。もしやとの思いから盛り上げられた柔らかい土の上を歩き回ってみる。、そこに一片の人骨が見付かる。埋葬場所に合わせて合掌。

もう少し来哈の時間がずれていたら、この埋葬場所も盛り土の下になっていたであろうと、タイミングの妙を感じる。

このような現場の状況から、今後遺骨の掘り出しはありえないと判断し、現存の遺骨処理の方法に、問題を絞ることとした。

二、別科跡の香坊実験農場を訪れる。

昨年の表敬訪問では場長との会見であったが、今回は訪問の性格でもあろうか、党委員会書記・工程師の肩書きを持つ許家利氏との会見となる。当香坊農場の党責任者と推測する。仰木氏から来意を伝えて挨拶する。許氏は歓迎の挨拶の後、率直に、来訪の主旨は既に承知しているので、こちらからの意見を述べたいということで、病院で保管している二体の遺骨についての説明が述べられた。

1、病院長は人道的善意によって掘り出された遺骨を私的立場でこれを保管している。

2、この遺骨の処理については、貴方の希望通りに、いかなる方法であってもそれに全面的に協力し、便宜を計りたい。

例えば、引き渡し、火葬して墓地に埋葬、或いはこのまま放棄する、等々

3、引き渡すについては、現在病院は当農場の管理下にはあるが経営は切り離して独自の運営になっている。従って経営上極めて財政難の状況にあるので、病院側では救急車一台の寄付を得たい考えがあるとのこと。

概ね以上の説明があった後、許氏は私見とあえて断わった上で、極めて示唆にとんだ話を聞くことができた。

現在ハルピン市ではかつての様に勝手に埋葬することは禁じられ、すべて火葬して公設の墓地に葬ることになっている。これに従って墓地を買って保管してある遺骨を埋葬するのが最も良い方法かと思う。墓地としては市営、区営と幾つかのものがあるとのことである。

なお病院での遺骨保管は無期限とはならないので、年内といはず早急に回答が得たいとのことであった。

会談を終えた後私たちは、現場の状況判断から現在掘り出された遺骨と、病院の二体を、三千数百柱の代表として、当地の規則にしたがってハルピンの墓地に埋葬するのが最善の方法と考えた。

問題提起のあった救急車については、問題を切り離し、遺骨の受け取りだけを改めて交渉することとした。

会談は始終好意的に行われ、お別れに当たって、当方の所望で、今まで防疫上の理由で踏み込むことの出来なかった指訓本科跡に、車外に出ない事を条件に特別の計らいで案内され、見学することが出来た。

塀の中は指訓時代の建物は皆無で、同じ形の牧柵付きの乳牛舎が整然と立ち並び、牧柵内にはホルスタインが隙間が無い程に寝そべっていた。

広い場内に魅せられっぱなしの感であった。

三、午後は、幸福郷人民政府を訪問する。

三差路からバスでの距離感覚からすれば、ちょうど嚮訓あたりだ、武道場、加工場のあった辺ではないかと勝手に憶測する。

二階建の人民政府、会見室にはバナナ、リンゴ、梨子が器に配され、私たちを歓迎してくれる。

郷長、斎永江氏ら三氏が会見相手である。

仰木氏が、来訪の趣旨を説明する。五十五年前まで、青少年の時代当地で勉学、農事にたずさわった者達であること。敗戦によりこの地に三千幾百の死者を葬って帰国したこと、今この地で死者の遺骨が掘り出されていることを知り、この処理をしたいのでご協力願いたい等々である。

これに対し、郷長は、熱烈歓迎の言葉に加えて、話によれば皆さんはこの村の功績者である趣旨の発言まで聞かされて和やかな雰囲気のなかで会談は進められた。

皆さんからのこの願い出の趣旨はよく理解できるので、村としては積極的にこれを進めるために、上部機関に持ち上げるとの回答があった。

村では、これを機会に交流の深まりを期待したい様子がうかがえた。上部機関からの返答待ちということになる。

四、十八日墓地現場調査

人民政府との話合いについての結論には可成りの時間が必要との感触を得たこともあって、当面は、造成地から出た遺骨と、病院保管の二体の処理が急務ということで一致し、翌十八日に公営墓地の実地踏査を行うことにした。

最も礎の地に近いと考えられる香坊区営の墓地を目指す、香坊から牡丹江に向かう鉄道に沿うようにマイクロバスは大揺れにゆれる。四方へ一望千里の満洲野が原が開ける。昔を思い出させる半日一畦の広大な畑は、今は収穫も終わって只何処までも続く。真直ぐな一本道のポプラ並木の葉も僅かに黄色を残している。

着いた、哈爾浜市和平公益性墓園である。香坊から約八粁、ハルピン駅から新香坊と同じくらいの距離である。前面は阿什河の谷間になっている。

阿什河から水を取った貯水池が三つ四つ、白い水鳥が浮かんでいる。地平線には尚武ケ丘に続く丘が微かに望める。遠い昔、憧れた大陸、地平の果てをじっと眺める。思わず感涙を覚える。

仰木氏および旅行社の方に折衝して頂く。日本人の使用は拒否されるのではと心配したが特に問題はなく、むしろ好意的に受け入れられた。

墓地は阿什河の谷間に向かって階段状に造成されていて、下にさがる程小さい墓地になっているようだった。最上段で最も見晴らしのよい一画に着目して検討する。太陽の動きを見てほぼ東向きに思える。

この大陸に骨を埋める覚悟で渡満した昔日を思い、永久安息の地として最もふさわしい場所に思えて安堵感を覚える。

管理所の説明を聞く。墓碑の刻字は自由、納骨数・回数は無制限、祭祀等は自由、土地法の規定により七十年間使用できる。さらに契約時の納入金だけで以後の管理費などは一切不要等々、十分満足のいく条件に納得することができた。

翌十九日に代金を納入して、墓地の取得を終える。

五、訪中調査を終えて

訪中前には、写真で見た遺骨の状態から推して、次々掘り出された遺骨が、無残な姿で放置されている状況を想定していて気の重い出発であった。しかし現場確認により、そのような状況に無いことを知り、今後とも概ねそれは起こり得ないことが判断出来た。

掘り起こされないまま、今後尚あの地に眠り続ける御柱に対しては、慚愧の念絶ち難きを感じつつも、いま顕在する遺骨を三千数百柱の代表として懇ろに弔うことこそが、死者へのせめてもの慰めになるのではないだろうか。

今尚未解決部分は残されているものの、中国の公営墓地に正式な形で納骨できるまでになったことは最良の策であったと信じたい。

一方、元嚮訓・哈訓の敷地を中心に形成されている幸福郷では、人民政府としてこれを契機に日本との民間交流を深めて、村の発展につなげたい意向が伺えるので、今後の進展具合では、礎会としての新しい交流の拠点として期待できるのではないだろうか。

また病院設備について、何等かの寄付援助が実現すれば指訓跡地の実験農場も合わせて、日中交流の太い絆が生まれる可能性も考えられる。

かの地に眠る三千数百柱が礎となって、日中平和友好の花を開かせようとしているかのように思えてならない。

平成十二年十月三十日　　合掌

深田允文記

「長谷川テル訪問記念の碑」建立募金にご協力を

２０２１年１１月

奈良・長谷川テル顕彰の会
会　　長　宮城恭子
事務局長　田辺　実

「星火方正」の読者の皆さん

この度、古都奈良の名刹・般若寺境内に、日中戦争のさなか、反戦・平和を世界に叫び続けた長谷川テルさんの顕彰運動の一環として、「長谷川テル訪問記念の碑」建立のための募金を開始できるはこびとなり、『星火方正』の読者の皆さんに一言ご挨拶とお願いを申し上げます。

「方正」の惨劇と中国の人々のヒューマニズムに触れる

奈良・長谷川テル顕彰の会と大阪・長谷川テル顕彰の会の共同で行った佳木斯に眠る長谷川テル墓参の旅の際、私たちは、方正の「日本人公募」と「中国養父母公募」を訪れ黙とうをささげました。私たちは一行２５名で、２０１８年８月２４日哈爾浜から佳木斯（ジャムス）への途上、「日中不再戦　長谷川テル顕彰の旅」の一環として行ったものです。この時、方正の惨劇と中国の人々のヒューマニズムに触れ、深い悲しみと怒り、感動を覚えたことを思い起こします。この取り組みを通じて、大類善啓氏が主宰する方正友好交流の会とご縁をいただき、今日にいたりました。

テルさんの「記念碑」を
日中の平和と友好を願う両国の市民にとっての心の拠り所に

奈良女子高等師範学校（現奈良女子大学）に学んでいた長谷川テルさん（以下「テルさん」）は、日清・日露戦争から日韓併合、治安維持法公布、満洲事変と続く当時の閉塞的な社会に怒りを覚え、世界共通語・エスペラントを学びはじめ、労働農民運動とも交流をはじめた矢先、１９３２（昭和７）年９月、治安維持法違反容疑で逮捕され、奈良女高師から退学せざるを得なくなりました。その後もエスペラントを学ぶなかで中

般若寺を訪問した第２回奈良・長谷川テル顕彰の会総会参加者一同。
長谷川テル訪問記念碑建立場所前で、２０２０年１１月８日

国からの留学生・劉仁と結ばれ、決意を固めて中国に渡り、日本の残虐な侵略の実態に触れ、ゆるぎない国際的な反戦活動家に成長、想像を絶する困難にたじろがず生涯を通じて反戦・平和のために闘いました。

テルさんは、１９３２年４月３０日、学友と古刹・般若寺を訪れ、“抑圧的・閉塞的な社会のありようと闘おう”と誓いあい、生涯を通じてその信念を貫きました。

私たち、奈良・長谷川テル顕彰の会は、テルさんが社会進歩、反戦平和のため生涯をささげる決意をかためた記念すべき般若寺境内に記念碑を建立し、日中の平和と友好を願う両国の市民にとっての心の拠り所にしていきたいと思います。「記念の碑」と「記念の碑説明板」建立に対する般若寺さんのご賛同・ご協力もいただいております。

私たちは、今回、以上により２００万円を目標に広く募金をお願いすることを決意しました。皆さんのご協力をお願いいたします。

碑文

「長谷川テル訪問記念の碑」

１９３２年４月３０日、学友と般若寺境内を訪問し、抑圧的・閉塞的な社会のありようと闘おうと誓いあった。

奈良・長谷川テル顕彰の会

記念の碑説明板内容

長谷川テル

長谷川テル（中国名：緑川英子）

１９１２ ― １９４７

私は仲間たちとともに、ありったけの声で日本の兄弟たちに呼びかける。誤って血を流してはならない。

あなた方の敵は、海を越えたこちらの側にはいないのだ。

「愛と憎しみ」長谷川テル

（「中国怒吼」誌　収録　１９３７年８月　竹内義一訳）

１９１２年山梨県で生まれ、１９２９年に１７歳で奈良女子高等師範学校（現奈良女子大学）に入学。

１９３２年４月３０日　学友と般若寺を訪れ、抑圧的・閉塞的な社会のありようを打ち破る闘いに立ち上がることを友と誓い合い、人生をどう生きるか模索する中でエスペラントに出会い、労働運動、農民運動との交流をはじめた。同年９月、治安維持法違反容疑で逮捕され、奈良女高師をやめざるを得なくなった。退学後エスペラントの習得に努力。エスペラントを通じて中国からの留学生・劉仁と出会い１９３６年に結婚。１９３７年に中国にわたり抗日運動に従事。戦火の中国、武漢・重慶で毎晩のようにラジオで日本兵に抗日反戦を呼びかけた。また、エスペラントで世界にも中国の実情を発信した。

１９４７年１月中国東北部佳木斯（ジャムス）で死去。夫・劉仁も直後に死去。佳木斯市人民政府が中央政府の批准を経て、テルと劉仁の墓碑を建て、顕彰している。

奈良・長谷川テル顕彰の会

注　説明板内容は日本語以外に中国語、エスペラントを併記する。

日中不再戦の誓いを固め、北東アジアの平和に貢献する

―「記念碑」・「説明板」建立の意義を考える―

長谷川テルさんは、奈良女子高等師範学校（現奈良女子大学）の４年生のとき、１９３２（昭和７）年９月、治安維持法違反容疑で検挙され、奈良女高師をやめざるを得なくなりました。日本軍が中国東北部（旧満州）に侵略を開始した１９３１（昭和６）年９月１８日の柳条湖事件の一年後のことです。

私たちの先輩たちは、１９２７年には、全国で日本帝国主義政府の山東出兵に対して、「対支非干渉運動」を全国で展開しました。

侵略戦争に反対し平和と国民主権を主張した人々は、当時、「売国奴」・「国賊」・「非国民」と罵しられ治安維持法によって弾圧されました。テルさんは、治安維持法によって弾圧された全国の数十万人のうちの一人です。

日中不再戦の誓いを固め、北東アジアの平和に貢献する

テルさんが日本人女性として中国に渡り、抗日反戦を訴え続けたことは、輝かしい史実であり、日本と中国両国民の真の友好・交流の重要な架け橋であると考えます。

私たちは、エスペランチストとして抗日反戦を訴え続けた長谷川テルを顕彰し、長谷川テルの思想を学び今に生かし語り継ぎ、市民レベルの真の日中友好・親善を推進することは、日中不再戦の誓いを固め、北東アジアの平和の確立の運動に貢献すると確信いたします。

当時、古都・奈良においても、テルさんや仲間たちがいたこと、そして、全国にも少なくない人々が平和と国民主権を主張して闘っていたことを思い起こし、私たちが今日憲法９条を守る運動をすすめていることの意義をかみしめる機会にしたいものです。

わが国では、テルさんは、エスペラント協会、日中友好協会、奈良女子大学卒業生有志らによって顕彰されてきました。

中国・佳木斯市では、墓碑が建立され手厚く葬られており、佳木斯市立博物館などで長谷川テルの展示コーナーも設置され事績は顕彰されています。また、中国では緑川英子として、北京、哈爾浜など縁の各地でも顕彰されています。

このように、現在も長谷川テルの輝かしい生涯を顕彰する人々が、日本だけでなく中国をはじめ世界各国におられ、顕彰事業に取り組んでいる団体があることを心強く思います。

軍事的対応を許さない

菅義偉前首相は、４月１６日行われた日米首脳会談で、米国の意向に沿って、国民に一層の危険と負担をもたらす軍事同盟強化を鮮明にしました。

共同声明で、日本と中国との領土問題である尖閣諸島に関連して、「困難を増す安全保障環境に即して、抑止力及び対処力を強化する」とし、軍事的対処の意図を露わにしました。また、「台湾海峡の平和と安定の重要性」を強調、「両岸問題の平和的解決を促す」として、アメリカの対中国軍事対応に、日本がつき従うなど重大な合意を行いました。日米首脳会談にみられる対中国への軍事的対応を強く打ち出した重大事態のなかで、日中不再戦の誓いを重要なテーマとしている私たちの長谷川テルの顕彰運動は、今日の情勢に直結した運動となっています。

募金の振込先は次のとおりです

ゆうちょ銀行
払込取扱票　００９２０―４―２１２９６３
加入者名　奈良・長谷川テル顕彰の会

会の所在地
〒６３０―８１２２　奈良市三条本町５―５　宮城　恭子宅

会の事務局
〒６３０―８４２２　奈良市北永井町２７７―３　田辺　実宅
（☎/F　０７４２―６１―７１９４）
Email：tanabe66@amber.plala.or.jp

宮城恭子（みやぎ・きょうこ）

１９４５年北京で出生。奈良・長谷川テル顕彰の会会長。内科医師、現在、社会医療法人岡谷会・さくら診療所長。

田辺実（たなべ・みのる）

１９３８年、北海道旭川市で出生。奈良・長谷川テル顕彰の会事務局長。現在、治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟奈良県本部会長。

般若寺を訪問した推進委員の一行。
右から２人目が工藤良任般若寺住職３人目が宮城恭子代表。
同寺、十三重の塔をバックに、２０１９年４月２７日。

人類は一つの共同体なのだ！

『エスペラント～分断された世界を繋ぐ HOMARANISMO～』（大類善啓著）に思う

椎名 鉄雄

私は、本書で紹介されているエスペラントの生みの親、ザメンホフの思想「人類人主義」（HOMARANISMO）は、普遍的価値を保持していると思う。

今人類は大きな曲がり角に立っている。人類は、自らの力で切り開いてきた文明の力で自らを窮地に追い込んでいる。今なお地球上では、民族・国家・宗教間の対立・紛争が絶えない。その根源には、ナショナリズムがある。ポーランド生まれのユダヤ人ザメンホフ（ユダヤ人に対する大虐殺を経験）は、「我々は人類の一員である。国家・民族を超えたこの大地に生きる一人の個人を出発点として、この世界を考えていこう」と人類人主義の考え方を提示した。人類を一つの共同体と看做した。一つの共同体に暮らす人類が相互理解を進め、平和な暮らしを築くため、エスペラント(世界共通語)を創った。しかし、一部の国家は、国家間の争いの解決手段として科学技術の粋を集めた原子力兵器の使用も視野に入れている。私は、ザメンホフの「人類人主義」の思想と、その思想実現の為のエスペラント（世界共通言語）は、この危機的な状況を突破する力を秘めていると思う。

著者の大類善啓は、エスペラントの誕生（1887 年）の背景から書き始め、エスペラントの理念である人類人主義の思想がどのような歴史的背景の中で生まれたか、過去の歴史の中でどのように評価され、どのような人物がその思想に基づいて活動してきたか、豊富な資料（巻末に表示）に基づいて丁寧に書いている。

エスペラントの理念である人類人主義の思想は、文豪のトルストイやロマン・ロラン・魯迅等に高く評価された。

ロマン・ロランは、「今や自己の運命を自覚している人類の新しい最初の仕事は、万人に共通なる言語を採用することでなければならない。世界語は、武装せずしてしかも効果的な、革命の一つである。それは政治的革命より一層はるかに深いものである。それは人類の精神を改造するからである」と述べている。

日本では、二葉亭四迷、柳田國男、宮沢賢治等がエスペラント導入の魁となった。1930 年代のファシズム支配の時代、満州事変，日中戦争、第二次世界大戦、ベトナム戦争等、人類の苦難の時代に多くのエスペランテイストたちは、命をかけて世界を平和な状態に導くための活動を展開した。著者は、著書『エスペラント』の中での木村護郎との対談で、木村が引用したガンジーの非暴力主義の言葉（ほとんどの問題は、人間は非暴力で解決しているのです。たまたまそれがうまくいかないと戦争が起こるのであって、戦争ばかりで物事を解決しているなら人類はとっくに滅びている）を提示している。ガンジーの非暴力主義と、ザメンホフの人類人主義の理念は地続きである。それは、人種・言語の違いを越えて、人類を一つの共同体に結びつける力を秘めている。今こそ虚像としてのナショナリズム（参考：会報「星火方正」28 号の高井弘之の論文：日本人はどのように作られたか、そして、どこに向かうべきか）を克服しなければならない。

国連は、2015年にSDGS（持続可能な開発目標）を掲げ、人類が共通で取り組む目標を掲げた。世界は、ちょっとエスペラントの理念に近づいてきた。そして、今世界は、新型コロナウイルス、気候変動、核廃絶、格差・貧困・難民問題等地球規模での課題が山積している。人類は、一つの共同体として協力せざるを得ない状況となっている。世界は、エスペラントの理念（人類人主義）に近づきつつあることを示している。エスペラントの役割発揮はこれからである。

最後に、ジョン・レノンの作詞した「イマジン」を掲載したい。この詩は、エスペラントの理念を端的に表現していると思われる。

想像してごらん　天国なんて存在していないと
　　やってみれば簡単さ
僕らの下には地獄などない
　　上にあるのは空だけ

想像してごらんよ　みんな今日一日のために生きている姿を

想像してごらん　国家なんて存在しないと
　　難しいことではないさ
殺したり命を捧げたりすることもない
　　そして宗教もないと

想像してごらんよ　みんなが平和に暮らしている光景を

君は僕を夢想家だと言うかも知れない
　　でも僕一人ではないさ
いつか君も仲間に加わることを願っている
　　そして世界は一つになるんだと

想像してごらん　所有物なんて存在しないと
　　君にはできるかな　欲深くなる必要はない
　　人類がみんな兄弟であれば
想像してごらんよ　みんなで世界を分かち合っている現実を

君は僕を夢想家だと言うかもしれない
　　でも僕一人ではない
いつか君も仲間に加わることを願っている
　　そして世界は一つとして生きるんだ　　（オノ・ヨーコの詩集より）

（しいな・てつお：1936年千葉県匝瑳市に生まれる。法政大学経済学部在学中は有沢広己ゼミナールに所属。卒業後、千葉県信用農業協同組合連合会（現在：農林中央金庫千葉支店）に就職。千葉県農業コンサルタント協会出向。現在無職）

エスペラントの可能性に思いを巡らしつつ・・・

～『エスペラント』（大類善啓著）を読んで～

滝永　登

旧友に問われて思う

数年前、50 年来の旧友と一献交わす機会があり、そこで「君はなぜエスペラントをやっていたのか」と問われたことがある。いきなりの問いかけだったので、「世界平和」とか「人類愛」などとは、いかにも気恥ずかしく、とっさに「英語が嫌いだったからだ」と答えた。そのときは、質問の意図をかわしたいという心理が働いたのかもしれないが、振り返ってみれば決して的外れな受け答えではなかったと今思う。

自身がエスペランティストでもある本多勝一が、これも 50 年ほど前にこんなことを書いていた。今、原文が手元にないので、以下の記述は私の記憶による。

「ある米国人との間で、原爆投下について紙上論争をしたことがある。私が『ドイツではなく、日本に落としたのはアジア人に対する差別意識があったのでは』と問うと、彼は『原爆の完成はドイツ降伏後だ』と答えた。私は、『そんなことを聞いているのではない。もし、ドイツ降伏前に原爆が完成していたとしたら、どちらに落としたか』と再び問うた。彼は、その問いにはまともに答えず、『原爆投下が戦争終結を早めた』を繰り返すばかりだった。このとき私が許せなかったのは、このお決まりの「公式見解」などではなく、彼が自らの主張をすべて英語で書いてきたことだった。彼は日本で長く暮らし、日本語の読み書きにも十分な能力を持っていた。微妙な表現なら誰かに助けてもらうこともできたはずだ。アジア人（日本人）に対する差別意識を問題にしているときに、しかも日本人が日本語で問いかけているのに対して、彼は何のためらいもなく英語で書いてよこしたのだ」

この国では、学校教育において英語が「主要教科」となっていて、誰もが英語教育のために莫大な時間とエネルギーを費やしている。英語話者が日本に来ると、彼らは日本人に対して、誰はばからず堂々と英語で話しかけて恥じない。それに対して満足に受け答えができない日本人は、大変失礼なことをしたと自らを恥じるのだ。

一方でこんなこともあった。2021 年 3 月、スリランカ人女性が名古屋入管施設内での不法・不当な処遇により死亡する事件があった。事件の経緯を明らかにするためとして入管当局によって作成された『最終報告書』（真相解明とは程遠いものだが）は、当然全文日本語で書かれたものであったが、担当職員はこれをそのまま遺族の方に手渡したという。この職員に何ほどかのためらいは生じなかったのだろうか。

学生エスペラント運動に参加して

さて、本題「エスペラント」である。

このたび、本誌『星火方正』の発行責任者でもある大類善啓さんが『エスペラント』（批評社）を上梓した。満蒙開拓や日本と中国との戦中・戦後史を主要なテーマとしているこの冊子に、彼は最近エスペラントやザメンホフに関する記事を多く寄せていたので、もしかしたらこんなこともあるのかとは思っていたのだが、このたびこの書物を手にして彼のエスペラントに対する思いの深さを改めて知ることになった。

これも 50 年ほど前、私は学生エスペラント運動に参加していて、そこで偶然大類さんと知りあった。このとき、彼はすでに学生ではなく、自身を週刊誌記者と名乗っていたので、てっきりスキャンダル記事で禄を食む反体制記者程度の印象しかなかったのだが、このたび本書を読み返して、1960 年代にすでに伊東三郎と面識があり、その後も中断をはさみながらも、エスペラントの現場に居続けたことを知り、大類さんの過去への評価を変更する必要に迫られた。大学卒業と同時に現実のエスペラント運動とは距離をとり、「シンパ」の位置に自らを置き続けてきた私などとは比較にならないほどに、エスペラントと真剣に向き合ってきたのだった。ちなみに、伊東三郎については本書の中でも「清貧な理想主義者」として詳しく紹介されているが、彼の著作『ザメンホフ』（岩波新書）は、当時の私たちにとっては必読書だった。

理想のすそ野の広さ

本書は、1887 年にポーランド（当時はロシアの統治下）で生まれ育ったユダヤ人眼科医ザメンホフによって人工的に考案された世界共通語エスペラント（私たちは「国際共通語」としてなじんでいたが、大類さんはあえて「世界共通語」と呼ぶ。その理由は本書の中に。）がいかにして生まれ、そして日本社会に受け入れられてきたかについて、さまざまな文献と直接の聞き取りとをもとにまとめたものだ。この本の紙幅の大部分は代表的な日本人エスペランティストの評伝にあてられている。今でもファンの多い大杉栄や宮沢賢治が熱心なエスペランティストであったことを知ると、エスペラントに対する親近感がわいてくる人も多いだろう。日中戦争の際にかの地にわたり日本軍兵士に向かって銃を捨てるよう呼びかけた長谷川テルや、ベトナム戦争で米政府に加担する日本政府に対し焼身自殺という衝撃的な抗議を行った由比忠之進など、反戦平和に文字どおり命をささげたエスペランティストたちの記録は今でも私たちの心を揺さぶる。二・二六事件を思想的に扇動したとして即決裁判で処刑された北一輝や、戦時中の宗教弾圧としては最も過酷だった大本教団の聖師といわれた出口王仁三郎がエスペラントを高く評価していたという事実は、エスペラントの持つ理想のすそ野の広さを感じさせてくれる。ちなみに、「エスペラント」とはエスペラ

ント（語）で「希望を持つ人＝希望を失わない人」という意味である。

私が最も関心を持って読んだのは終章である。ここで、大類さんは木村護郎クリストフさん、臼井裕之さんとの対談を通じて、「なぜ、エスペラントは普及しないのか？」を考察している。これは、私を含めエスペラントに志す人が一度は必ず発する問いであり、もしかしたら 130 年前のザメンホフ自身もこの問いに大いに悩んだのであろうと思う。

この章では、まず、多くの日本人が抱いている「英語＝共通語」が事実として誤りであること、その誤解の原因が未だに「世界＝アメリカ」と信じ込んでいる日本社会の視野の狭さにあると指摘する。「英語嫌い」の私には心強い応援だが、しかしそれでも、英語が共通語に一番近い位置にあるという現状は否定できない。先進国の中ではビジネスや学術研究などの分野において英語が共通語的な役割を果たしており、また非英語圏の多くの国々でも学校教育において英語教育を重視している現実を見れば。だが、だとしても英語は共通語にはなりえないし、なってはならないと本書を読んで私は確信する。その理由を一言でいうならば、英語には「人類の連帯のために国境を超える」という理念、理想がないからだ。

エスペラントの可能性とは

では、エスペラントが将来いつか、決してエリートではない世界中のふつうの人々の共通語になりうるのか。この点についても、私は大いに悲観的である。

しばしば指摘されるのが、エスペラントの基本的な文法、文字、語彙がヨーロッパ系言語によっているということだ。考えてみれば、ザメンホフにとっての「世界」、「人類」とは 19 世紀後半のヨーロッパとそこに暮らす人々のことだった。彼の視界には、アジアやアフリカなどの非ヨーロッパ世界とそこに暮らす人々のことはほとんど入る余地がなかった。それでも、ヨーロッパ系言語を基礎とすること自体は、エスペラント普及の制約の一つではあるが、すべてではないと私は考えている。まったく意味のない記号ででも組み合わせない限りそもそも「中立」な言語などは存在しえないこと、国連の公用語が中国語以外はすべてヨーロッパ系言語であること（一部ではアラビア語も）、多くの国々で学校教育における外国語教育といえば英語をはじめとするヨーロッパ系言語であることなどを踏まえるならば、ヨーロッパ系言語を基礎とすること自体は妥当な選択だと思う。私自身の経験からしても、英語教育を受けていたことがエスペラントを習得するのに大いに役立ったことは事実だ。

したがって、問題はさらにその次だ。本章の中で木村さんは次のように言う。「世界的に見たとき、エスペラントだけが成功しなかったのではなく、他の理想も成功していないよね。……差別とか貧困、難民などの問題が残るのに言語問題だけが解決するわけはなく、エスペラントだけがうまくいかなかったというわけではなく……」このくだりを読んで私は納得した。つまり、私がエスペラントの将来に対して悲観的なのは、人類の将来に対して悲観的であることと同義なのだ。エスペラントの理想（ホマラニスモ＝人類人主義）が、地

球上の全人類が直面している課題（戦争、環境、食糧など）に対して、全人類で困難を平等に負担し合い、果実を公平に享受し合う世の中をめざすものだとすれば、それは残念ながら私の想像力が及ばない世界だ。この地球上には、貧困と飢餓が原因で多くの人々が毎日のように命を落としている一方で、やせるためにはお金と時間を費やすことをいとわない人もまた数多くいる。こんな悲劇を通り越して喜劇的な現実に対して、私は傍観するだけではなく、加担さえしているのだから。つまり、エスペラントの普及が進まない原因は、皮肉なことに、この言語に「人類の連帯のために国境を超える」という理念、理想がまといついているがゆえということなのかもしれない。

核戦争、環境・気候危機、食糧危機など、人類の生存そのものを脅かしかねない諸問題がいよいよ具体性を持って私たちの前に立ち現れている。そんなとき、言語としてのエスペラントがどんな役割を担うことができるのか、どのように受け入れられるのか、又は受け入れられないのか、正直なところ私にはわからない。しかし、確かに言えるのは、これからもずっと、たとえ少数であろうと、自らの問題を人類の問題として考えようとする人たちの中からはエスペラントを学ぼうとする人たちが生まれ、エスペラントを学ぼうとする人たちの中からは自らの問題を人類の問題として考えようとする人たちが生まれ続けていくであろうことだ。本書の出版によって、エスペラントの可能性をもう一度世に問おうとする大類さんの試みは、そんな希望（エスペ―ロ）を私に残してくれた。

最後に、本書を手にした方は、巻末のザメンホフ自身が書いた『第一書』（日本語訳）にもぜひ目を通していただきたい。たった 16 か条の文法だけでエスペラントを理解していただけるかは自信がないが、例えば、男性名詞と女性名詞の区別（中性名詞も）、複雑な格変化、文字と発音との非対応など、日本人がヨーロッパ系言語を学ぼうとして最初にとまどうこうしたわずらわしさがないことを知るだけでも、この言語の魅力に触れていただけるのではないか。それとも、難解さこそが外国語学習の醍醐味と考えておられる御仁には、大いなる物足りなさと感じられるのだろうか。

地球上の人間をすべて「人類」として一括りにしてしまうと、現実世界に暮らしている人々が属する階級、民族、ジェンダーなどのさまざまな社会的な関係を見えにくくしてしまうので注意が必要だが、本稿ではそこまで論を広げることができなかった。

（たきなが・のぼる：1950 年生まれ。学生時代に国際共通語エスペラントに親しみ、東京学生エスペラント連盟に参加。1974 年東京都庁に就職。その後定年で退職、今も細々と現代史を学び続けている。）

語り掛ける言葉をめぐって

『エスペラント――分断された世界を繋ぐ Homaranismo』を読む

森　一彦

『エスペラント――分断された世界を繋ぐ Homaranismo』大類善啓著（批評社 2021 年 5 月 25 日刊）を読了した。読了して、すぐにでも感想が書きたくなった。

その一因は、本書に関わった人々の想いが非常に丁寧な本づくりとなって表れているからではないかと感じた。なかでも装幀（臼井新太郎）のカバーデザインは秀逸で、「分断された世界とエスペラント」という本書のテーマに沿って、帯に書かれた＜ちょっと変わった人たちだけど、みんな個性豊かなホマラニスト＞という世界観を、歴史のなかに埋もれた静かな輝きとして、地中の宝石のように見事にデザイン化している。

このような丁寧な本づくりをさせた基をただせば、本書に描かれたひとり一人のホマラニストに対する、著者の愛情と敬意の力に他ならないであろう。

私（森）は「エスペラント」についてはまったく浅い知識しか持ち得ていないのだが、初めて「エスペラント」を知ったのは、いつのことだったであろうか。記憶を辿ると、十代最後の頃に読んだ『魯迅のこころ』新村徹著（理論社 1970 年）のなかで、魯迅と盲目の詩人エロシェンコとの友情について読んだことが、最初だったかもしれない。

新村徹はこの本のなかで、魯迅とエロシェンコの作品は、＜ともに暗い現実に対する悲哀と苦悩、憎悪を描いた＞が、根本的な点では異なるとしている。エロシェンコは人道主義的な甘さから《希望》を謳ったのに対して、魯迅は中国の厳しい現実のなかで《夢》を否定し、＜暗黒の現実とたたかうものにとって希望はないとはいえない＞と書いたという。

＜おもえば、希望とは、もともと、あるものだともいえないし、ないものともいえない。それは、この地上の道のようなものだ。／道は、もともとあるものではない。／歩く人が多くなれば、それが道になるのだ＞

希望とは、多くの人々が通り、一歩一歩を踏み固めることによってしか現れ得ないものであり、軽々しく謳うものでも、得られるものでもない、ということなのであろうか。

私の手許にある『魯迅のこころ』は、新村徹から直接サインをいただき、**「地上本沒有路，走的人多了，也便成了路」**という言葉が記されている。

この『魯迅のこころ』は、私にとっては青春時代の苦い思い出が詰まった本であり、否が応でも当時の風景にタイムスリップしてしまう。その頃の私は、途方に暮れていた。私は四十代半ばになってクローン病と診断されたが、二十歳前後の頃にも肛門周囲膿炎と診断され、膿を取り出すお尻の手術を繰り返し受けていた。その当時既にクローン病だったのかもしれないと今になっては思うが、時代的に病名自体が未だ知られていなかった。

その頃、私は病床で新村徹から一通の手紙を受け取った。その手紙には、魯迅が許広平と

の往復書簡に記した言葉が書かれていた――

＜しなやかで強いこと、絶えず刻むこと＞

――その時に私は初めて、言葉を語り掛けてもらえることの有り難さといったものを感じたような気がする。それ以来この言葉は、ずっと私を励ましつづけてきた。

話を本書に戻そう。第四章では、＜闘うエスペランティスト＞として長谷川テルを取り上げている。周恩来が長谷川に贈ったという言葉、＜「日本の帝国主義者はあなたを売国奴のアナウンサーと言っていますが、あなたは日本人民の忠実な娘であり、真の愛国者です」＞という言葉が、すべてを物語っているであろう。

日中戦争の時代に、かくも冷静に世界を見据え、熱い想いを持ち続け、行動した日本人がいたことは、日中関係がどのように変わろうとも、いつの時代になっても色褪せないような気がする。長谷川が中国の地で、放送マイクを通して日本の将兵に語り掛けた言葉は、いったいどのように将兵の耳に届いたのであろうか。

続いて、＜彷徨える理想主義者 由比忠之進＞の、第五章を読んでみよう。由比は1967年、米国の沖縄小笠原占領とベトナム侵略に抗議し、首相官邸前で焼身自殺をしている。

日本の敗戦を中国で迎えた由比は、戦後も波乱に満ちた人生を送る。家族の前から突然姿を消して＜一燈園＞に入ったくだりを読み、私は著者大類の人生との共通項を感じていた。大類の由比への眼差しは、彷徨える者への親近感に溢れ、硬直した思想を嫌う自由と勇気への憧憬がある。

戦後、「ソ連の核実験は良い実験」「きれいな原爆」といわれた時代に、＜「ソ連もまた帝国主義国家である」とはっきりと告発＞した由比の勇気。由比の追悼集会で最後に挨拶に立った中野好夫は、次のように語り掛けたという――

＜由比さんの死は、言葉で言い表せるものをはるかに超えたところに意味がある。……由比さんの残した一粒の麦はきっと見直される時が来る。由比さんは無神論者で魂が生き残ることは信じなかったが、その思想は生きている＞

その由比の追悼集会で、「由比忠之進の人となり」を紹介したのが、本書の第六章に登場する、＜清貧な理想主義者 伊東三郎＞だった。

1960年に、高杉一郎と一緒にいた中国人が伊東三郎の「父よ」から始まる詩を突然エスペラントでそらんじ、「あの詩人はまだ生きていますか？」と高杉に尋ねたという。

＜「思い出すことさえつらい日中戦争の十数年を越えて、ひとりの中国人の心のなかに『あの詩人』と、憎しみをもってではなく、なつかしさをもって生きつづけることのできた伊東三郎の光栄を、私は心の底から羨ましいと思った」＞

――という高杉の言葉を紹介し、直接伊東との交流があった大類は、＜「もっともっと聞きたかったことがあったのに」＞と惜しんでいる。

時を同じく1960年の安保闘争のデモの渦中にいた大学生の清水孝一（後に大手出版社の編集者となり大類と出会う）は、デモから半分気絶状態のままやっと逃げ出し横たわってい

た夜の診療所で、心配し駆け付けた伊東三郎に「もう死んでもいい」と思ったと告げると、「馬鹿いっちゃいかん！」と大声で叱られたという。そして、＜「清水君、いつまでも乳飲み児の気持ちでいちゃ、いかんよ」＞とも諭されたという。戦前から戦中にかけて厳しい拷問を経験してきた老いた伊東が、若者に掛けた言葉として、心を衝かれるものがある。

言葉を掛けるということは、掛ける人の経験・歴史によって積まれ刻まれた想いを、優しさと厳しさの眼差しで受け渡す、ということなのだろうか。

＜「小日本」に抵抗したカリスマ 出口王仁三郎＞を取り上げた、第八章にも触れておきたい。日本人のスケールを超えた王仁三郎とは一体何者なのか？本書は、解読を試みている。

大本の運動は戦前二度にわたる厳しい弾圧を受けた。6 年 8 カ月もの長い獄中生活は、王仁三郎の身体を弱めたようだ。それでも戦後、無謀な弾圧と長期拘留に関して政府に賠償を求めようとした弁護団に対して、王仁三郎は補償の請求をするなと語り掛けている――

＜「今度の事件のお蔭で大本は戦争に関与できない境遇におかれ、人類の平和に対する発言権を与えられた。これはまったく神の恩寵である。今度の事件は神様の摂理でわしはありがたいと思っている。賠償を求めて、敗戦後生活に苦しんでいる国民の膏血をしぼるようなことをしてはならない」＞

本書の終章では、「なぜ、エスペラントは普及しないのか」について、木村護郎クリストフ（上智大学外国語学部教授)、臼井裕之と著者大類との対話を収録している。

木村は次のように語る。19 世紀から 20 世紀にかけてナショナリズムが台頭する時代に、このままでは大変なことになるとザメンホフは予言し、それを見越してエスペラントを作ったが、第一次、第二次世界大戦と世界はザメンホフが危惧したとおりになってしまった。

その後も世界は紛争が続いたが、しかしここにきて、国連は SDG’s という人類が共通で取り組むべき目標を掲げて、＜やっと今、世界はちょっとエスペラントの理念に追いついてきたのではないか＞、と木村は目線を上げる。

世界は今「分断」の時代だという。インターネットは世界を繋げ、世界の距離を縮めたが、自分に都合の良い情報、心地よい情報ばかりが集まるソーシャルメディアは分断を煽り、悪意を垂れ流し、人々を情報に溺れさせ、他者への想像力の欠如を生んでいる。

とりわけ新型コロナウィルスの感染拡大の下で顕在化した「自粛警察」や「県外ナンバー車への嫌がらせ」といった行動は、ひとたび何かがあると、人々は容易に権威や世間の“空気”を追従し、異端者や少数派を排除し始めるということを改めて教えてくれた。

本書に登場するひとり一人の個性豊かなホマラニストは、カバーにデザインされた地中の宝石のように輝き、著者の想いによってその覆われた泥が落とされて、すぐそこに居る人のように蘇っている。「分断」の時代にこそ、宗教・民族・国家など立場の違いを認め合い共生するために、今こそエスペラントの精神を思い出し、地球人として「語りあう言葉」を持とうと呼びかける本書の願いは、宝石の原石のようにずっしりと重く尊い。その願いが輝くために、まずは私自身の心にしっかりと受け留める必要があるだろう。

私事で恐縮だが、この 10 月から五週にわたり勤務先の社内で、『障害者権利条約を読むかい』という勉強会を開いた。障害者権利条約は、「9.11」の世界がまさに分断の奈落に落とされた同じ 2011 年の 11 月に、メキシコの大統領によって国連の場で提唱され、2006 年に採択された。日本や中国を含む 180 を超える国・地域が締結している。

この障害者権利条約は、「私たち抜きに私たちのことを決めないで（Nothing about us without us!）」というスローガンの下に、世界中の当事者も審議過程から参加して作られた。「保護される客体としての障害者」から「権利の主体としての障害者」へと、それまでの価値観を覆す画期的な内容であり、誰もが属性によって差別・排除されることなく社会のなかでともに生きていける世界の実現を謳っている。

戦争や自然災害、感染症のパンデミックなどの下では、本書に登場したホマラニストたちのように、社会の異端者や少数派は行き場（生き場）を失っていく。しかしそれは、多数派にとってもまた危機的な状況であるのだ。「分断」の時代のなかで、その反動としての「融和」へと向かう動きが、社会の見逃されてきたところから芽吹いてきていることを、ここに紹介しておきたい。

最後におまけで（多少の忖度を込めて）、著者の大類について触れておきたい。

大類と私（森）との付き合いは、かれこれ 40 年近くになると思われるが、感謝を伝えられていないことがある。私が 40 代半ばでクローン病と診断され、7 カ月の絶食生活に入った当時、入退院を繰り返して勤務先の会社では降格となり、私の周囲からは潮が引くように人々が離れていった。

そんな時に、おそらく 5 年振りくらいに大類から連絡をもらった。2004 年の初春だったと思う。当時開館間もない東京六本木の森美術館で開かれていた『草間彌生展』を観に行かないかという誘いだった。大類について観に行って驚いた。明るくポップで生命感に溢れた草間彌生の世界に衝撃を受けた。それまでの私は、病気のことばかりを考え、かといって自分で背負う覚悟もなく、下ばかり向いていたのではなかっただろうか。世界は広く、何て明るいのだろう！その時に購入した草間彌生のポストカードは、その後ずっと家の玄関に飾っておいた。

展覧会を観終わり、美術館近くのカフェで大類とお茶をしたが、病気のことについてはあれこれと聞かれなかったように記憶している。いつもは饒舌な大類だが、その日はただ黙って、美術展に誘い出してくれただけだった。それが、当時の私にはどれほど有り難かったことか。それは大類なりの、言葉ではない「語り掛ける言葉」だった。

（もり・かずひこ：1958 年前橋市生まれ、方正友好交流の会事務局長。1993 年から西武百貨店北京駐在事務所長として北京で 3 年半を過ごす。㈱I&SBBDO 時代の 40 代半ばに難病のクローン病と診断され、現在 ㈱ゼネラルパートナーズにて障害者の就労支援に携わる）

エスペラントの内在思想に迫る

『エスペラント ― 分断された世界を繋ぐ Homaranismo』（大類善啓著 批評社）を読んで思う

初岡 昌一郎

この本は表題からはエスペラント語入門書と間違えられかねないが、ザメンホフ博士によって創始されたエスペラント運動とその思想を紹介することに主眼が置かれているので、「エスペラント思想入門」の書と言えるだろう。私が知る限り、本書は日本でこれまでに出版されたエスペラント思想紹介書として最も優れたものだ。何よりも明快でだれにも分かりやすく解説されている。それは筆者がこの思想を自家薬籠中のモノとしているだけでなく、フリーのジャーナリストとしての経験を生かした、並々ならぬコミュニケーション能力と優れた文章力によるところが大きい。

ザメンホフの履歴と思想の解説に始まり、それがいかに世界に広がったかを概観している。本書で最も読みごたえがある部分は、長谷川テル、由比忠之進、伊藤三郎，山鹿泰治、出口王仁三郎、斎藤秀一という６人のユニークな日本人エスペランティストを取り上げ論じている章である。これらの人は革命家、改革運動家、教育者、宗教者などとしての業績によって知られているが、エスペラント運動家としての未知の側面の人物像が興味深く浮き彫りにされている。

人工語としてのエスペラントを世界語として通用させることにはいろいろな制約があり、筆者もその可能性に幻想を持っていないようだ。制約の一つは、民族言語に代わる世界共通語を目指して創出されたにもかかわらず、エスペラント創始者は欧州言語の枠内でのみ共通語を考案しているからである。異なる民族文化と歴史背景を反映して、多様で共通性の大きくない諸言語を統合することは不可能な作業である。

しかし、英語を事実上の世界語とみなす現状に危惧を持つ人にとって、エスペラント運動がまっとうな疑問を投げかけていることは評価できる。アングロサクソンの民族言語を世界語として容認することは、その民族的な覇権を容認する危険につながるからだ。

長年、日中の友好を草の根レベルで推進することに尽力してきた筆者は、エスペラント思想の中国における受容に紙面を割いて考察している。世界で最多数の人によって使用されている中国語を母語とする話者たち

が、エスペラント思想をどう容認するか、あるいは否定するかは今のところ定かでない。

優れたヒューマニズムと普遍性に裏打ちされたエスペラント思想が、なぜこれまで世界のメインストリームで大きな影響力を発揮することがなかったのか。この疑問に筆者は「なぜ、エスペラントは普及しないのか」と題する終章で言及している。この疑問を持つ方々に、特にこの章の一読をお薦めする。

＜注：本稿は、メールマガジン『オルタ広場』38号（通算210号　2021.6.20）掲載されたものを著者了解の下に転載＞

（はつおか・しょういちろう：姫路独協大学名誉教授、元国際郵便電信電話労連東京事務所長。1935年生まれ。著書に『アジアの経済と社会』（明石書店）、『ソーシャル・アジアへの構想力』（日本評論社）など多数ある）

心優しき「ホマラニスモ」への誘い

世界語としてのエスペラントに魅せられた群像に触れて

木村　知義

不思議な書だ。

エスペラントという言語の歴史を縦糸に、それに魅せられ、あるいはその「伝道師」とも言える人生を歩んだ人々の群像を横糸に、まるで綾なす一反の織物のように丹精込めて物語を織り上げ、そして優しく語りかけてくる。言語の歴史や言語論の解説の書でもなく、ましてや入門書でもなく、エスペラントとともに生きた人間の物語を語ることで、エスペラントという言語が引き受けなければならなかった「運命」を胸に沁みることばで紡いでいく。

表紙に記された丸みのある「エスペラント」という大類善啓氏の書名を目にしたとき、実は、子供のころの「エスペラント」との唐突な出会いが蘇った。中学に入ったばかりのことだったと記憶している。大阪で育ったゆえにその光景は大阪ことばで立ち上る思い出となっている。

「おまえエスペラント語って知ってるか？英語なんかよりどこの国でも通じるんや」と横の机に座るその男の子は話しかけてきた。なぜそんなことを言い出したのか、その脈絡は思い出せないのだが、たぶん英語の授業か何かの後だったのだろう。しかし、なじみのない「エスペラント」という音のことばを使ったことははっきり記憶に刻まれている。

「世界のどの国でも使えることばなんや。知らんか？」と続けて聞いてきた。

「英語とどない違うねん。きみは喋れるんか？」

「おれはでけへんけど、親がやっとるんや」

「ふ〜ん・・・」

教室での子ども同士の会話はそこまでだったように思う。しかし、不思議な響きの「エスペラント」ということばが記憶に残って家に戻って母親にたずねたのだった。

「世界で使われていることばで、誰でもできるやさしいことばだと言われているんだけれどね、実際に使っている人はそんなに多くないと思うんだけど・・・。キリスト教かなにかのおうちの子どもなのかな、その子は・・・」といった話が返ってきたように記憶に残っている（プロテスタントのキリスト教徒だった母親は大阪の育ちではなく生涯東京ことばだった)。

なぜそう覚えているかといえば、西洋の宗教と何か関係があるような、しかも大人のことばで言えば、どこか敬虔な響きを帯びた神秘的な世界を「エスペラント」に感じたからであった。

ささやかなエスペラントとの出会いというべき記憶である。

この書を手にしてページを進めながらそんな記憶がよみがえってきたのだが、一面ではその時の子どもの感覚に間違いはなかったと思うと同時に、実はそんなものではなく、エスペラントの世界はもっと、もっと深いのだという両方のことを知らされることになった。

間違っていなかったというのは、エスペラントが、成り立ちからなんと理想主義にあふ

れた言語であるのかという思いに駆られるからである。エスペラントの創始者ザメンホフの出自と育った環境がまさにそうだったことを本書から知ることになるからである。

「諸民族がお互いによく知り合い、人々が自由に意思を通じさせれば、多くの民族たちも自分たちとまったく同じ人間であることがわかるだろう、と彼は改めて思ったのでした」と、著者はザメンホフになり替わってその「夢」を語る。

「現在のベラルーシの国境に近いポーランドの東部に位置するヴィアリストクという町」に生まれたという「舞台」のしつらえだけでも、もうある種のイメージを掻き立てられるものだが、ユダヤ人の両親の下に生を享け、父が無神論者の教育者、母はユダヤ教を信仰するという家庭に育ち、ユダヤ人、ポーランド人、ロシア人、ドイツ人、ウクライナ人など、多民族が重なり合いながら「隣人」として暮らしていたという環境が多感なザメンホフをして民族と国家を超えた言語への「夢」を抱かせたことが、序章から、実にしみじみと胸に迫って来るのだった。

子どもの頃のエスペラントとの不確かな出会いだとはいえ、エスペラントの響きに抱いた感覚が間違いではなかったことを確認したというのは、こういうことである。

しかし、もっともっと深いものだという感慨は、この言語が理想の下に生まれたことで避けることのできなかった「宿命」ともいうべき、その後の平たんではなかった、時には過酷なまでの、この言語の運命についてである。

著者は、エスペラントの担い手となる人々の生と向き合いながら章を進めていく。

「ことば」（言語）を学ぶことは、その言語の「使い手」（担い手）たちの思想や文化、そしてなによりも生き方に触れ、それを学ぶことでもあるということを、読む者の奥深くに語りかけてくる。そして、それぞれの章を読みながら、そこで語られる登場人物（主役）が立つ一幕の舞台劇を見つめるかのような不思議な感覚にいざなわれる。まるで身にまとう衣服から街の風景、時には、主人公を襲う過酷なまでの事件や「出来事」などが瞼の奥に色彩を伴ったイメージとして呼び起こされる。そんな不思議な力を持った著者の語りかけに引き込まれながら、エスペラントとそれに魅せられた人々の群像に出会うことになるのだった。

二葉亭四迷、柳田國男、宮沢賢治、大杉栄、魯迅、周作人、長谷川テルそして伊東三郎、出口王仁三郎・・・と各章に登場する人物の幾人かを挙げていくと、すでにそれだけでも様々な思いの交錯する世界が思い浮かび、イメージがかきたてられる。それぞれの人間の生きざまを通して、人間の実在とエスペラントという言語とのかかわりが綴られ、同時にそれによって、エスペラントのめざした志、あるいは夢のありかとそれゆえにたどった時には苛烈な運命を知らされるという、順逆が綾なす物語が繰り広げられる。

第 5 章で描かれる由比忠之進は、著者と同世代の私にとっては、米国のベトナム侵略とそれへの日本の佐藤政権の加担に死を賭した「異議申し立て」に至る首相官邸前での「焼身自殺」という衝撃的な「事件」で鮮烈な記憶に残る人物である。エスペランティストだったことは当時報じられた様々な記事で目にはしていたが、あらためて由比の生きざまと

思想にエスペラントがどれほど深いかかわりをもっていたのかを知ることになった。

福岡に生まれ「国に忠義を尽くす人になるように」との父の思いが込められた忠之進と名付けられた由比が「父親の期待に背を向けて」上京し、苦学のなかで東京高等工業学校に学び、名古屋中央放送局で電気技師として仕事に就いた後、満州（中国東北）に渡り、そこで目にした日本人の横暴と中国人差別に抗ったこと、それゆえに本来の仕事とはかかわりのない農業に従事する境遇を強いられ、しかし、日本の敗戦後は中国に残って中国の再建に尽くすという人生が語られる。さらに、日本に引き揚げた後京都の一燈園に身を投じたということをこの書で知り、由比の無私の純粋な人間愛のありように胸を突かれる。その純粋さゆえに己の身を賭して時代に抗うという選択に至る一人のエスペランティストのまさに心優しい、それゆえに苛烈な生きざまが描かれ読む者の胸を打つ。とともに、読みながら背筋の伸びる想いで時代を振り返るひと時を持つことになるのだった。

言語は思想であり生き方であるという重い想念に突き当たりながらページを進めるうちに、エスペラントの言語としての矜持といったものを知ることになる。なるほど、それゆえに英語のように「普及」しなかったこともうなづけると合点がいくのだった。

それにしても、そんな重い「物語」が重ねられていくにもかかわらず、著者のこのやさしい「語りかけ」（文体）はいったいどこから来るのだろうかと思う。読むうちにその優しい語りかけに引き込まれていく不思議さが全編を覆っている。これもまたエスペランティストゆえというべきなのだろうか。そして、知らず、知らず著者の語りかけに導かれていくうち、そこで語られる人物群像にいとおしくなる気持ちが呼び起こされ、読む側の裡にもまた心優しい世界が広がっていくのだった。

世界が根底から揺らぎ、大きく変わろうとしている歴史の転換点に立って、言語とはいかなるものなのか、それが人間の実在とどうかかわるのか、そして社会や世界のありようとどう関係してくるのか、平明でやさしく語りかけてくる著者ではあるが、その語りかけは心底深いことを読み終えてかみしめる一冊である。

また、長く中国とのかかわりを生きてきた著者だからこそ描ける世界が、各章、随所に広がっていることも記しておかなければならないだろう。

ここに登場する心優しき人々の群像を通して、エスペラントが引き受けざるをえなかった運命についても考えさせられることはすでに書いたが、その上に、表紙の「エスペラント」の表題の下に小さくではあるが「分断された世界を繋ぐ『Homaranismo』」と記されている「ホマラニスモ」が「人類人主義」と訳されるエスペラントである意味を、パンデミックに苦しむ時代の中で、あらためてかみしめることになる一冊である。

それにしても、エスペラントなど無縁に生きてきた者にさえ胸の奥深くに響く、不思議な書である。

（きむら・ともよし：1948 年生まれ。ＮＨＫ在職時代、ラジオの特集番組『21 世紀日本の自画像』で方正日本人公墓を取り上げる。現在、「北東アジア動態研究会」を主宰。本稿は日中科学技術文化センターの会報『きずな』（2021 年 9 月発行）からの転載である）

読売新聞（2021年8月22日付朝刊）より転載

エスペラント

大類善啓著

評・瀧澤 弘和（経済学者 中央大教授）

ユダヤ系ポーランド人ザメンホフが19世紀末に発表した世界共通語エスペラント。彼の理念は国家、民族、宗教の違いを乗り超えた新しい世界を獲得することだった。

日本におけるエスペラント受容史に焦点を当てた本書の中心をなすのは、日本の個性的なエスペランティストたちの列伝である。普及活動に長年携わってきた著者の強い共感が伝わってくる。

エスペラントが日本に入ってきたのは、国同士の分断が深まっていく時代だった。その中でエスペランティストであることは、時流に抗して生きることを意味した。中国人の夫とともに国際主義を掲げて抗日闘争に身を投じ、中国で亡くなった長谷川テルのように、理念に忠実な人生は苛烈なものとなった。

巻末の「なぜ、エスペラントは普及しないのか!?」という著者と言語学者との対談も興味深い。

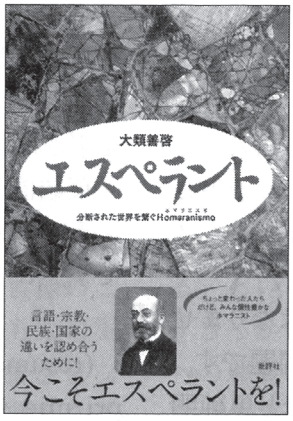
地球環境問題など、世界が共通課題の解決に向かっている今こそ、エスペラント普及のチャンスかもしれない。世界のエスペランティストたちが培ってきた強固な絆が希望を示している。（批評社、1870円）

わたしの出した
1冊の本

大類 善啓（おおるい よしひろ）

エスペラント
分断された世界を繋ぐ Homaranismo

大類 善啓 著
批評社、2021年、197p、税込み1870円



2013年ごろ、改めてエスペラントに注目したのはザメンホフの言うHOMARANISMO（ホマラニスモ）、人類人主義という思想だった。当時、日本と中国では領土問題を契機にナショナリズムが噴出し、中国の「人民日報」からは「国際主義」が消え、頻出してきた言葉が「愛国主義」だった。

それから3年後だったか、日中文化交流市民サークル誌「わんりぃ」（月刊）の編集部からエスペラントについての原稿依頼がきた。「わんりぃ」の読者は、まずエスペラントの知識がない人だという前提で、ザメンホフのこと、エスペラントが日本に伝わった経緯、その日本から中国にどう伝わったかを記し、また、人類人主義を体現したと思われる日本のユニークなエスペランティスト6人を挙げて書いた。

その6人とは、日中戦争下の中国から日本に向けて、戦争反対をラジオで呼びかけた長谷川テル。＜彷徨（さまよ）える理想主義者＞として由比忠之進を、『ザメンホフ』（岩波新書）の著者・伊東三郎を＜清貧な理想主義者＞として、またキリスト者からアナーキストになった山鹿泰治を、＜「小日本」に抵抗したカリスマ＞として出口（でぐち） 王仁三郎（おにさぶろう）を、そして戦争中、教員をやりながらも大勢に抗して反戦活動をして何度も入獄した斎藤秀一（さいとうひでかつ）である。

彼らが日本を代表するエスペランティストだと言うことには異論もあるだろう。しかし私としては、「日本」を超えた、いわば「非日本的日本人」として評価したいのである。

この連載は結果的に2年半ほど続いた。この原稿を基に一部削除し、また補筆し、そして新たに、今や「死滅している」かのように言われるエスペラントが、なぜ、そのように言われるのか。エスペランティストの木村護郎クリストフ（上智大学教授）さんにインタビューして、エスペラント界の現況、エスペラント界の新しい動き、「英語ハラスメント」と言われるほど、英語があたかも唯一の国際語と言われるようないびつな現状を明らかにしてもらった。

コロナ禍の世界的な蔓延（まんえん）状況を考えると、環境問題一つをとっても、世界的な発想で課題の本質を探らないと解決できそうもない時代だ。木村さんは、「やっと今、世界がエスペラントの理念に追いついてきた」と言う。

分断が続く世界の中で、人類人主義はますます見直される時代になってきたと思う。いわば、ザメンホフの考えは世界を先取りした思想だと言っていいだろう。大手書店には言語学コーナーに置いてあるが、私としては語学について書いたのではなく、その内在する思想について書いたので人文コーナーに置いてほしいところだ。

東京新聞、読売新聞をはじめ日中関係団体の機関紙などでも拙著を紹介してくれ、またメールマガジン「オルタ広場」では初岡昌一郎（姫路獨協大学名誉教授）さんがとてもいい書評を書いてくれた。書店、あるいはアマゾンでも入手できますので、ぜひ拙著をご笑覧いただきご叱正ください。

『エスペラント　分断された世界を繋ぐ HOMARANISMO」

出版を巡って

大類　善啓

今年 2021 年 5 月末に批評社から上梓した表題の拙著は、自分で言うのは気が引けるが予想以上に好評で嬉しい限りである。

まず、日本のエスペランティストの中では、世界一有名人ともいえる堀泰雄さんが A4 版２頁の分量で拙著を推薦するメールをエスペラント界の友人知人に発信してくれ、かなり拙著が知れ渡った。

また、本誌に転載したが、メールマガジン「オルタ広場」で初岡昌一郎さんの書評（P60 転載）がとても良く、私より早く知った友人から「いい書評だったね」という電話をもらった。

日中関係団体の機関紙では、日本国際貿易促進協会の「国際貿易」、公益社団法人日中友好協会の月刊紙「日本と中国」、またもう一つの日中友好協会の旬刊紙「日中友好新聞」（五段組みの書評欄）で取り上げていただいた。

本号でも寄稿していただいている横井幸夫さんが毎月発行しているメール通信「中国業務通訊」（8 月 1 日発信）＜わが友人抄＞と題して、私との交友を回顧しつつ拙著を詳しく紹介してくれた。同じくかつて寄稿していただいた加藤毅さんが法政大学経済学部同窓会報誌に、また、＜ヒロシマへ　ヒロシマから＞を月に 2、3 回発信する竹内良夫さんが、まるまる全面で紹介してくれた。これらすべてを本誌に転載して紹介するのは、自分の編集する会報に自己宣伝するのもいい加減にしろとお叱りを受けそうなのでしませんが、ご執筆していただいた方々には改めて感謝し、またご了承ください。

また本会の事務局がある日中科学技術文化センターの会報「きずな」に、木村知義さんの原稿を読んだ知人から「とても良かった。ぜひ読みたい」（P62に転載）と電話があった。「きずな」はセンターの会員や限られた人しか読んでいないが、こういう連絡は嬉しい限りである。

一般紙では東京新聞（7 月 24 日付）の文化欄に、そして本誌にも転載したが読売新聞（8 月 22 日付）で瀧澤弘和（経済学者、中央大学教授）さんが書評に取り上げていただいた。日本一の発行部数を誇る全国紙だけあって反響も大きく、30 数年ご無沙汰だったかつての仕事仲間が神戸からショートメールをくれた。

「読売新聞を見て知った。元気で活躍の由、嬉しい。神戸にきたらぜひ連絡をくれ」という。また東京郊外に住む知人からも電話をもらい、やはり全国紙だけあるなと思った。メールや電話をくれなくとも、新聞を見てくれた友人知人も多くいるのではないかと思う。

本誌に拙著について寄稿していただいた椎名鉄雄さん、滝永登さん、森一彦さん、そして拙著をご紹介していただいた各位、またお買い求めいただいた方々には改めて感謝の意を表したい。誠にありがとうございました。

（おおるい・よしひろ：本会理事長。本誌編集人。著書『ある華僑の戦後日中関係史―日中交流のはざまに生きた韓慶愈』（明石書店）他）

集団自決 兵士いなければ…

家族失った元開拓団員 最後の慰霊

慰霊碑前で話す岩下博志さん＝8日、長野市（有賀史撮影）

「ここへ来ると不思議と気持ちが落ち着くんだ」。8日午前、長野市の花岡平霊園。慰霊碑に手を合わせた岩下博志さん(87)＝塩尻市片丘＝が、ほっとした表情を見せた。76年前、旧満州（中国東北部）で集団自決した中和鎮信濃村開拓団の元団員で、父母と弟4人、妹を亡くした。コロナ下でも仲間と続けてきた慰霊だが、車の運転もままならなくなり「今年で最後」と決めて来た。「いったん戦争になると、皆が一つの方向に向かう」。戦争の怖さをそう訴えている。

戦後76年 今、語らねば

岩下博志さん（87）塩尻市

1940（昭和15）年3月ごろ、東筑摩郡筑摩地村（現塩尻市北小野）から家族で満州へ渡った。「万歳、万歳」。日の丸を持った親戚や住民が地元の神社で送り出してくれた。満州には広大な土地があった。近くの川で弟や妹と遊んだことを覚えている。

敗戦から半月ほどたった45年8月29日、現地人の襲撃に遭った。数百人ほどもいて恐ろしかった。ソ連軍も侵攻してきた。若い男性は召集され、残された団員の多くが女性と子ども。関東軍の食糧庫があった方正を目指し、着の身着のまま逃げた。

途中、逃げて来た関東軍兵士約30人が合流。女性たちは「兵隊さんが守ってくれる」と喜んだ。兵士たちは山を越え、朝鮮半島を経由して帰国することを提案。それに従った。だが、食べる物もなく飢え「捕虜になるより、ここで死のう」との声が強まった。

中和鎮信濃村開拓団　旧満州（中国東北部）への移民政策で、県が全県から募った。1938（昭和13）年3月に満州の中和鎮に第1次の入植があった。45年8月15日の敗戦後、開拓団を現地人が襲撃し、ソ連兵も侵攻した。当時約千人いた団員のうち130人余が集団自決し、他にも現地人の襲撃や病気、飢えで多数が死亡。46年10月に帰国できたのは約350人とされる。

9月1日夜、「悲惨な開拓団の末路を伝える人も必要」と皆で決めた。銃を撃つ兵士の他、団員数人が生き残ることになった。私は父と兵に生き残ることを志願した。

翌日午前、130人余が丘の上に並んだ。晴れた日で遠くに中和鎮が見えた。母と弟、妹もいた。私は木の枝などで作った小屋の中で膝を抱え、目をつぶって震えていた。しばらくすると「天皇陛下、万歳」と叫ぶ声が3回聞こえた。銃声も聞こえた。母らの弾痕は1、2発。「苦しまずに死ねただろうか」

父は翌年8月、発疹チフスで亡くなった。私は同10月に帰国。筑摩地村の伯父の家に身を寄せた。「一旗揚げるために行ったんだ。死んでも本望だろう」と言う親戚もいた。同級生は「引き揚げ者」と呼んでばかにした。「死ぬ思いまでして帰ったのに…」

中学を卒業後、地元の洋品店などで働いた。生活はやっとだったが「家族や仲間から託されて生き残った」と思い、悲しみと自責の念を抱きながら生きた。

人間は追い込まれると簡単に死を選ぶ怖さを知った。ただ、兵士たちがいなかったら集団自決はなかっただろうと思う。関東軍は結果的に住民の命を奪った。あの時、方正を目指せば、もう少し生き残った人がいただろう。（佐藤 勝）

戦争中 国は命守ってくれない

次世代へ　開拓団では足手まといになるからと、子を親が殺してしまうこともあった。戦争になれば国は住民の命を守ってはくれない。自分を含め戦争体験者はどんどん減っていく。開拓団員の慰霊碑が建てられた1975年の法要には約100人が参列したが、今年は元団員は3人だけだった。若い人には戦争の恐ろしさを知ってほしい。

八重山毎日新聞（2021年8月9日付）より転載

8月、忘れてならないこと

大浜敏夫

1945（昭和20）年8月9日は、世界で2発目の原子爆弾が長崎に投下された同じ日の未明、日本のかいらい国家「満州国」に突然ソ連軍が侵攻してきた日でもある。

かつて日本全土の約3倍もの面積の中国東北地方に13年間だけ存在した実質日本の植民地「満州国」があった。そこへ国策として日本全国から「満蒙開拓団（以下開拓団）」として送出された農業移民が約27万人もいた。開拓民が最も多かったのは長野県の3万7858人、次いで山形県1万7177人、熊本県1万2680人と続くが、沖縄からも恩納、今帰仁、南風原など七つの開拓団から2994人の開拓民が渡満している。

これは1936（昭和11）年8月、2・26事件後の広田弘毅内閣によって20年間で100万戸、500万人の農業移民を満州へ送り込むという国策に基づくもので、当時の日本も世界大恐慌のあおりを受け国民経済は不況のどん底にあった。中でも農村部では米価や生糸価の暴落のため主要産業であった養蚕業が大打撃を受け、農地の少ない農家の二男、三男は「満州へ行けば20町歩の土地がもらえる」という魅惑的な誘いと「拓け満蒙！行け満州！」の国策移民募集ポスターに飛びついたという。疲弊した農村部はもとより都市部の困窮層も含めて全国約800の開拓団の受け入れ先が広大な希望の新天地満洲であったにちがいない。それに国は貧しい寒村に対して「農山漁村経済更生運動」と称して開拓団を送出した母村には財政支援を施すという交換条件策も付けた。

なぜなら、当時の日本からすれば「満洲国」には北に隣接するソ連からの防衛と各地で不満を抱く現地人による反日暴動に対する「人間の盾」の役割と、日本内地への食糧供給や不足する軍馬および危急の時は兵士の供給源となる二つの役割を開拓団に担わせる必要があったからだ。つまり、開拓団が満洲に送り込まれたのは、深刻な経済不況にあえぐ国内事情から「日本からの人減らし」とソ連と対峙（たいじ）する満洲防衛の「人間の盾」とを、時の満洲に駐留する関東軍が「満洲農業移民送出計画」を立案し、広田内閣で閣議決定したものである。

しかし、名目は満蒙「開拓」というものではあったが、その内実はほとんどが現地農民の耕作している畑や家を安い価格で買い上げて強引に追い出し、開拓団へ払下げたものであり、現地農民たちは日本人開拓民の下男（苦力クーリーと呼ばれた）となり、または炭鉱や鉄鋼労働者に追いやられ、多くの現地人は日本人に対し恨みや反感を抱いていたという。しかし、そのことが「加害者」であるとの立場に気付く開拓民は皆無に等しかった。

冒頭に戻り、1945（昭和20）年8月9日、日ソ不可侵（中立）条約を破って突如約157万人ものソ連軍（航空機3450機）戦車5500輌）が怒濤（どとう）のごとく満洲に侵攻してきた。実は、同年2月4日から7日にかけてクリミヤ半島のヤルタでスターリン（ソ）、ルーズベルト（米）、チャーチル（英）の3国首脳による会談で、ドイツ降伏の3カ月後にソ連の対日参戦が承認されるとともに、南樺太や千島列島のソ連引き渡しなど5項目が承認され2月11日にヤルタ協定が成立した。つまり、連合国3首脳によってソ連の満洲への武力進攻がひそかに承認されていたのである。

一方、精鋭部隊といわれた満洲防衛の関東軍は南方戦線へ次々と引き抜かれ、その補充のため18歳から45歳までの満洲の日本人男性のほとんどが関東軍へ徴兵され、開拓団には女性、子ども、老人が残された。その数22万3000人。大本営は対ソ作戦のため大連、新京（長春）、図們を結ぶ南満州を作戦区域、残る4分の3の北満洲を放棄地区に指定し、軍主力をひそかに作戦区域に移動させていたのである。そのため移動手段の鉄道は関東軍によって破壊され、持てるだけの物を背負い、子どもを抱え徒歩による逃避行しか開拓団には残されなかった。そこへ空陸から圧倒的な物量で侵攻するソ連軍である。加えて日本に反感や憎しみを抱く一部の暴徒化した現地の人たちによる襲撃もあり、希望の新天地であった満洲が一夜にして果てしない逃げ惑う荒野と化し、一転して被害民族となった開拓団の逃避行は、各地で凄惨（せいさん）を極めたという。守るべき軍隊のない開拓団員たちは大本営によって放棄地区となったソ連との国境に近い黒龍江省に多く、開拓団単位による集団自決によって多くの犠牲者を出した。中でも特異な「麻山事件」は、8月12日黒龍江省鶏西市麻山において、ある開拓団（具体名省略）がソ連軍の包囲攻撃を受ける中、婦女子421人が集団自決する事件が起きた。その介錯は40人余の男子団員の手によって行われ、男たちは携帯する銃で自分の妻子や隣人を「処置」という表現であやめていった。絶望の淵で、自決に臨んだ妻や子どもたちの凄絶（せいぜつ）な最期を、中村雪子は自著「麻山事件―満洲の野に婦女子四百余名自決す」で詳細に伝えている。満洲での集団自決事件は記録に残っているだけでも13件3800人を超える。

開拓団27万人は、敗戦の年の帰国はかなわず、ソ連軍に追われるように夏服の着の身着のままで避難民収容所や開拓地でその年の冬を越さなければならなかった。零下30度にもなる酷寒の満洲で団員たちを襲ったのは、飢えと寒さであり、弱った体にノミを媒介した発疹チフスであった。栄養失調や伝染病、凍死によって、約7万人の命が失われたといわれる。こうした状況下で、多くの残留孤児や残留婦人が生まれることにもなった。

開拓団員を含む日本人がようやく満洲から引き揚げられるようになったのは、翌年1946（昭和21）年5月からで、「葫蘆島」から邦人105万人が日本へ引き上げることができたのである。8月、広島、長崎と並んで満蒙開拓団の悲劇、この歴史的事実を忘れてはならないと思う。

さて、終戦時日本政府の方針は、外地の「居留民は出来得る限り定着の方針を取る」との外相訓令を発し、「在外邦人は現地に留まって生き延びよ」というものであった。つまり、満蒙開拓団という農業「移民」は、戦後は「海外現地に定着せよ」という「棄民」扱いとなり、いずれも国策によって翻弄（ほんろう）される結果となったといえよう。

この国策満蒙開拓団から学ぶことは数多くあるが、主権者としての自覚を忘れず国や自治体の方針や施策に対して自らの目で確かめ、「イヤなものはイヤ」「ダメなものはダメ」という意思を示す勇気と、安易に国策には妥協しない見識を磨いていきたいものである。

手記『満州開拓団棄民の私』を昨年出版

今から76年前の敗戦時、国の「棄民政策」によって旧満州（中国東北部）にとり残された入植者は、凄惨な逃避行を強いられました。中国に残らざるを得なかった子どもや女性も多く、後に日本への帰国を果たした人も、苦難は長く続きました。痛苦の体験をつづった手記『満州開拓団棄民の私』を昨年出版した人がいます。（青野圭）

和歌山・白浜町

福田茂子さん（90）

その体験と思いは…

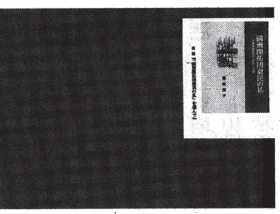
和歌山県白浜町に住む福田茂子さん（90）。1930年、和歌山県に生まれ、42年に祖父（1年後に帰国）と両親、弟、妹2人とともに旧満州吉林省の塔拉站高野開拓団に入植しました。2年半後の敗戦・逃避行のなか、5歳と8歳の妹が餓死、37歳だった母は栄養失調とチフスで亡くなりました。チフスで生死の境をさまよっていた茂子さんは、中国人に引き取られます。15歳でした。

自ら命を絶った父

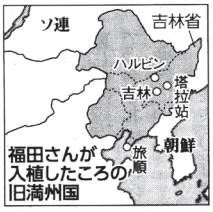
それから30年後の1976年7月、46歳で一時帰国した茂子さんは、この時初めて父の消息を知ります。父親は、茂子さんが引き取られて2日後、日本への引き揚げが決まった日の夜、自ら命を絶っていました。手には「お父さんは、日本に帰る資格も面目も無い。家族3人も死なせ、生き

東京からの取材に携帯電話で答える福田さん（中央）と田所さん（右端）。左は中国帰国者支援事業の「日本語教室」を担当して手記に協力した横矢道子さん＝8月22日、和歌山県白浜町の自宅で（榎本清司さん撮影）

吉林省の塔拉站高野開拓団の本部落（当時、福田さん提供）



◎…田所さんの解説を加えた本300部（A5判135㌻）は出版から2週間で完売。その後、読後文など65㌻を加えた簡易製本版を製作。購入希望の方は、84円切手10枚同封で〒646-0023 和歌山県田辺市文里2の10の27 田所顕亜さんまで



安保法制強行 執筆の動機に

『お国のために』でした。若い時に仕事で右手を機械に挟まれて人差し指と中指を落とし、『そのために兵隊に行けなかった』と語っていたそうです。『お国のため』に満州への入植を決断された結果、家族3人を死なせ、1人を中国に残してしまった。実直なお父さんには耐えられなかったのではないでしょうか」

田所さんは「手記」の特徴として〝事実の捉え方〟をあげます。手記には当時、まだ子どもだった茂子さんが、現地の人々に思いを寄せる記述が幾つも見られるのです。

助けてくれた人々

手記には、「口では言い表せない悲惨と苦痛」の逃避行の様子とともに、手をさしのべてくれた人々のことも。

ロシア兵から「辛い辛い屈辱」を受けた知人女性のこと、被害は日本人にとどまらず、「大勢の満人にも及んだ」こと。そんな「満人さん」から水や食べ物をもらいました。

小さな廃映画館に泊めてくれた「朝鮮人」は、お肉の塊とお汁をくれました。貨物列車に乗せてくれた「満人運転士」。

（避難所の場所を紙に書いてくれた）朝鮮人は…弟の手に、当時の百元紙幣を握らせ、足早に立ち去って行きました。

日本人も。シベリアに連行される途中だったのでしょう。

一列になって歩いてきた日本の兵隊さん…が、薄い緑色の毛布をそっと道に置いた。すぐ後ろの兵隊さんもそっと一枚置いてくれました。

戦後の中国、とりわけ「日本スパイ、反革命」と言われ迫害もあった文化大革命のころもそうでした。茂子さんに危害が加えられないよう、職場の仲間が毎晩、三交代で見守ってくれたといいます。

戦争起こさないで

「両親の最期に立ち会えなかったことを、いまだに悔やんでいます」と話す茂子さん。手記執筆を決意させた動機の一つは、2015年に強行された安保法制でした。

「日本の政治のことは正直、よく分かりません。でも、テレビで〝戦争をするな〟と叫ぶ人の姿を涙を流して見ていました。戦争は太平洋戦争で終わりにしてほしい。忘れてはいけない過去の苦しさを、今の子どもたちに知ってほしくて、家族の反対を押し切り、自分の過去を書く決意をしました」

手記の最後には、こうつづられています。

日本国にお願いがあります。「もう、二度と、戦争は起こさないでください」

証言 戦争

満蒙 悲惨きわまる逃避行

父は撃たれ、母は衰弱死

戦後、日本の植民地や占領地から引き揚げてきた民間人は320万人近く。なかでも「満蒙開拓団」は国策によって日本のかいらい国家「満州国」（中国東北部）のソ連（当時）との国境付近に送り出され、1945年8月9日のソ連の突然の参戦、侵攻で悲惨きわまる逃避行を強いられました。（西口友紀恵）

東京都武蔵村山市在住
土屋好子さん（86）

東京都武蔵村山市の土屋好子さん（86）はその一人です。

43年、8歳の夏。好子さんは両親に連れられ、母方の祖父母を含む一家13人で、内モンゴルにあった仁義仏立（じんぎぶつりゅう）開拓団に入りました。

「そこは、電気も水道も学校もない大平原。村にはラジオ1台もない陸の孤島でした」。麦やコウリャンなどを栽培しました。冬は髪を洗うとすぐにバリバリに凍ってしまう酷寒の地。祖父はその冬に、祖母は翌年に相次いで病死しました。

突然の悲劇は、敗戦直前のソ連軍の怒涛（どとう）のような侵攻で始まりました。

関東軍は開拓団を見捨てていち早く撤退。開拓団は、ソ連軍の銃撃や、日本人に家や家財道具などを略奪された中国人たちによる襲撃にさらされ、集団自決も相次ぎました。500～600人いた仏立開拓団のうち、生き残ったのは好子さん一家を含め4家族25人でした。

成人男性が狙われ

一家は、「とにかく日本に帰る」の一念で、野宿の逃避行が始まりました。成人男性がまず狙われました。

母、好子さんと3人の弟妹、3人の叔母ら9人は南をめざして逃げました。あちこちに銃やこん棒をもった男たちがいました。昼間はトウモロコシ畑で息をひそめ、未熟なトウモロコシをかじり、夜に山道を歩きました。

初めて迎えた「満州」の冬。前列中央が好子さん、後列左は父、1人おいて母

生後6カ月の赤ちゃんを連れていた叔母は、母乳が出ず泣く子を、みんなに迷惑をかけられないと山に置いてきました。声を押し殺して泣いていました。

大勢の男たちがきて、母や叔母が遠くの畑で強姦（ごうかん）されて戻されることもしばしばでした。「母親たちが鎌で頭を斬られ、血だらけで意識を失っていたこともあります。16歳だった叔母は『舌をかみ切って死にたい』と泣いた」と好子さん。

叔母が身ぐるみはぎとられてパンツ一枚にされ、トウモロコシの葉で胸を隠し、はだしで歩く姿を忘れることができないといいます。

スイカ畑のなかにある干し草小屋に隠れていたある日、一人の中国人がやってきました。「怖がらなくていい」と手振りで示し、いったん戻った後、数人の男たちとコウリャン、トウモロコシ、豆などがまざった残りごはんと食器を持ってきました。あちこちの家から集めたものでした。

「今思えば豚のえさと同じでしたが、みんなでガツガツとたいらげました。地獄で仏に会った思いでした。私たちは助かったのです」

その後、数軒の家に分かれて引き取られました。逃避行で衰弱した母親は日を経ずして倒れ、男たちがコウリャンの茎でくるんだ遺体を遠くの山に運んでいきました。

86年娘たちと帰国

「私がいた家は、開拓団よりずっと西にある内モンゴルのへき地でした。貧しかったけれど、家族同様に扱ってくれて差別もいじめもなかった」と好子さん。16歳になったとき、その家の長男と結婚。夫の病死で再婚を経て、86年に娘とそれぞれの中国人の夫とともに帰国しました。好子さん51歳、娘34歳でした。

「食べ物も水もなく逃げた体験はつらく、今もいつも思い出す」と好子さん。「心優しい中国人に助けられて九死に一生を得ました。戦争はこのように悲惨なものだと知ってほしい。二度と繰り返してはいけません」

朝日新聞（2021年9月11日付）より転載

元義勇軍 満州で失った青春

奈良教育大准教授 県内4人に聞き取り

日本が1931年9月に中国東北部に侵攻を始めた満州事変から90年。翌32年に傀儡国家「満州国」を建国し、農業移民の満蒙開拓団＝🔑＝が送り込まれた。群馬からの移民も多い。今の中高生の年代で訓練を受けた満蒙開拓青少年義勇軍もあった。大陸で青春を送り、敗戦で多くを失った。

満蒙開拓団　1932年の試験移民に始まり、全国から約27万人が渡った。このうち15～18歳の満蒙開拓青少年義勇軍は約8万6千人。群馬からの義勇軍は約1600人。敗戦で満州国は消滅し、開拓団は暴民の襲撃や集団自決、伝染病、栄養失調などで約8万人が亡くなった。戦後も残留邦人の問題が残った。

高崎市の建設資材会社会長の長井竹男さん(95)は42年2月、15歳で旧満州に渡った。北安省（現黒竜江省）の鉄驪（ろ）義勇隊訓練所で軍事訓練や農業を2年間学び、群馬出身者による大利根義勇隊開拓団で米や大豆を作った。

戦況が悪化していた45年1月に徴兵検査を受け、2月に関東軍に入隊。ソ連（現ロシア）と満州の国境地帯へ移動中、チチハルで8月15日を迎えた。駅近くで朝食の準備中、ソ連軍の爆撃機に襲われ、ヨモギの草むらに隠れた。近くに爆弾が落ち、熱い砂に覆われた。仲間とともに命は助かった。

9月にシベリアのクラスノヤルスク収容所に送られた。食料が不足し、草の根も食べた。冬は零下40～50度。仲間は栄養失調などで次々と死んだ。凍っていて穴を掘れず、死体は山に置いてきた。「人が死ぬのが当たり前になり、何も感じなくなっていった。私がいた収容所では184人が亡くなった」

3年のシベリア抑留に耐え、48年10月に帰国。「義勇軍に行くときは万歳三唱で盛大に見送られ、『国に忠、親に孝』と一生懸命務めた。帰国して褒められると思ったら非国民のように冷たい目でみられた」。義勇軍の経験は長い間話さなかった。戦後50年の95年、義勇軍の仲間と「曠（こう）野に消えた青春」を出版し、語り伝えるようになった。

「相手を殺さなければ、自分が殺される。それが戦争だ。勝っても負けてもいい人生は送れない。戦争はやめたほうがいい」

義勇軍の少年たちも90歳を超え、多くが亡くなった。県義勇軍連合会は今年3月末で解散した。「寂しいが、わずかな会員も動けなくなった」と、会長を務めてきた安中市の小俣喜一郎さん(92)。

小俣さんは、11人きょうだいの三男で父は石材業。小学校で「満州に行けば10町歩（約10㌶）の土地がもらえる。地主になれる」と教師に勧められ、14歳で満州に渡った。鉄驪義勇隊訓練所で訓練を受けていた16歳の時、敗戦を迎えた。

飛行機の潤滑油にする松の木の根っこ掘りから訓練所に戻ると、副所長が「日本は負けた。牛でも馬でも全部食べて、玉砕だ」と話した。「玉砕という言葉がおっかなかった。全員、刺し違えて死ぬんだ」と恐怖を感じた。

武装解除した訓練所は暴民に襲われ、新京（現長春）に逃れた。さらに西安に移動し、炭鉱で働きながら冬を越した。落盤事故やガス爆発事故があった。コレラなどの伝染病で亡くなる人が相次いだ。「よく命を落とさなかったものだ」

引き揚げて10年後、小学校の教師に再会した。教師は「満州に行かせて悪かった」と涙を流して謝った。「帰れたからいいんだ」と先生を恨まなかった。

小俣さんの孫は中学生。義勇軍に入った年ごろだ。「戦争は勝つ国も負ける国もない。共倒れになる」。そう伝えたい。

奈良教育大の太田満・准教授は、長井さんや小俣さんら群馬の元義勇軍4人に話を聞き、「群馬県送出の満蒙開拓青少年義勇軍―入隊者の戦中・戦後体験の記録―」と題した冊子を今年3月に出した。

「義勇軍は、教員が勧誘して送り出した。満蒙開拓や敢戦後の引き揚げ、戦後の生活など一人ひとりが生きてきた歴史を伝えたい。現職の教師にも考えるきっかけにしてほしい。同じ轍（わだち）を踏まないために」

（柳沼広幸）

群馬県送出の満蒙開拓青少年義勇軍
―入隊者の戦中・戦後体験の記録―

太田 満（奈良教育大学）

満蒙開拓青少年義勇軍の経験者の話などをまとめた記録

記者報告

上左満蒙開拓青少年義勇軍への入隊直前の長井竹男さん＝本人提供 上左95歳になった長井竹男さん＝高崎市上大類町 下県護国神社にある「義勇軍之碑」の前に立つ小俣喜一郎さん＝高崎市乗附町

教員が勧誘 現職教師も考える契機に

中國新聞（2021年9月15日付）より転載

「戦争のリアル」考える糸口に

広島大大学院准教授　中村江里さん

旧日本軍兵士とトラウマ

戦争は究極の殺し合いだ。戦場や軍隊での体験が原因で心に傷を負い、精神疾患を発症する兵士は少なくない。かつて日本が突き進んだ戦争でも、精神疾患になった旧日本軍兵士たちがいた。しかし彼らの存在は、戦時中は隠され、戦後は忘れ去られ、長く「見えない問題」にされてきたという。なぜなのか。彼らに光を当てる意義とは―。戦争と心的外傷（トラウマ）の歴史に詳しい中村江里・広島大大学院准教授（38）に聞いた。

（論説委員・森田裕美、写真・山田太一）

―なぜ旧日本軍兵士のトラウマに目を向けたのですか。

欧米では第1次大戦以降、兵士のトラウマが映画などのメジャーな題材とされてきたのに対し、日本では最近まであまり取り上げられてきませんでした。アジア太平洋戦争では日本でも多くの兵士がトラウマになるような体験をしたはずです。なのになぜ、長い間「見えない問題」になっていたのか。そこに問題意識があったからです。

―精神疾患になった兵士はどう扱われていたのですか。

旧日本軍は日中戦争以降、外傷がないのに手足が震えたりまひしたりする「戦争神経症」への対策を始めました。表向きは「勇敢な皇軍兵士に戦争神経症はいない」と主張して、精神疾患兵士を国民の目から隠していましたが、実際には患者は増え、対応を迫られたのです。

1938年には千葉県の国府台陸軍病院が精神疾患兵士の治療拠点になり、終戦までに約1万人が収容されました。全国の陸軍病院に収容された人や除隊後に民間病院へ入った人もいましたが、全容は分かっていません。

―精神疾患の要因としてどんなことが考えられますか。

最大の暴力とも言える戦争で心身のリスクが高まったことです。また精神科医による聞き取りに対し、上官の命令で罪のない中国の市民を殺してしまったり、加害行為を拒んで顔が変形するほど上官から殴られたりした体験を語る患者もいました。加えて、暴力に耐えて当然という抑圧的な軍隊の構造があります。精神疾患は本人の弱さが原因とみなされ、さげすまれ、なきものにされました。

―「見えない問題」にされたのは軍隊の構造的問題ですね。

それだけではありません。銃後の社会は「お国のために尽くす」ことが当然。患者も家族も精神疾患に対する偏見を内面化していました。陸軍病院のカルテには「国賊」というような言葉が度々出てきますし、家族から病院への手紙には「申し訳ない」とつづられています。

―しかし戦後は社会の価値観が変わったはずです。見えなくなったのはなぜですか。

戦後社会の反戦意識と裏腹でもあるのですが、加害を伴う軍隊の話題に触れることに強い忌避感があったことも一つでしょう。本人は語れず、周りもタブー視して聞く耳を持たなかったと言えるかもしれません。

―今からできることは。

まずは陸軍病院のカルテなどの記録をきちんと残すこと。当事者だけでなく、家族への影響も調べる必要があります。

―家族への影響ですか。

暴力によるトラウマ体験は、家族関係にまで影響を及ぼすと言われます。軍隊で上官が暴力で部下を服従させるというような力関係や価値観が、家庭に持ち込まれたケースもあります。元兵士の入院記録を分析すると、多くの患者に、自分や他人への攻撃がありました。ドメスティックバイオレンス（DV）や虐待にもつながる問題です。

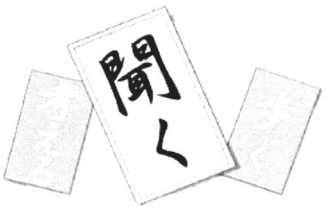
日本では最近になって、元兵士の家族が心の傷について語り合うグループや交流の場ができています。これまで家庭や個人に閉じ込められていた問題を語り合えることは、家族にとっても社会にとっても大切です。

―語られなかった、あるいは語れなかった記憶の継承にもつながりますね。

元兵士や家族の証言を社会で共有していくことは、戦争の暴力構造を理解し、防ぐことにもなります。また誰しもかかり得る精神疾患への理解や支援にもつながるでしょう。トラウマという視点は、何世代にもわたって影を落とす戦争のリアルを私たちが知り、考える上でも重要な糸口だと思います。

■取材を終えて

中村さんが浮き彫りにしたのは、精神疾患と診断され、病床日誌など史料に残る元兵士のトラウマだ。診断されなかったケースも含め心に傷を抱えたまま戦後を生きた人はもっといたことだろう。中村さんは当事者や家族への聞き取りも進めている。情報をお寄せください。



なかむら・えり　山梨県南アルプス市生まれ。一橋大大学院社会学研究科博士後期課程修了。同大大学院特任講師などを経て、20年10月から現職。著書に「戦争とトラウマ―不可視化された日本兵の戦争神経症」（吉川弘文館）、共著に「自衛官と家族の心をまもる―海外派遣によるトラウマ」（あけび書房）など。

東京新聞（2021年9月18日付）より転載

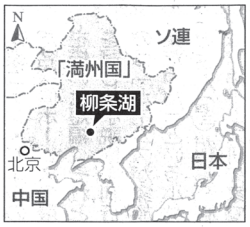
きょう柳条湖事件90年

満州にソ連侵攻、逃走中に衰弱

「連れて行って」仲間の声 今も

開拓義勇軍参加の男性 心痛め

一九三一年九月、日本の旧関東軍が中国・奉天（現在の遼寧省瀋陽）近郊の柳条湖で南満州鉄道の線路を爆破した「柳条湖事件」から十八日で九十年となる。日本が中国東北部を占領した満州事変の発端となり、現地につくられた「満州国」には新天地での生活を夢見た移民が多数渡った。しかし太平洋戦争の激化を経て、希望は絶望に。当時壮絶な体験をした男性が、平和への思いを語った。



銃声と、あちこちで上がる悲鳴―。四五年の終戦前、十五歳だった須田光司さん（九二）＝長野県山ノ内町＝は満州でソ連軍の侵攻を受けていた。「連れて行ってくれ」。今も耳に残るのは、共に逃げながらも力尽きて動けなくなった仲間の声だ。

長野県長沼村（現長野市）で八人きょうだいの三男として生まれた。十四歳の時、「満州で訓練すれば大地主になれる」と担任の先生に説得され、満蒙開拓青少年義勇軍に志願。学校を卒業後、茨城県の内原訓練所に入り、中隊の一員となった。

四四年六月、満州へ。「いつか自分の土地を持つ」という夢を支えに、現地の訓練所で朝から晩まで開墾作業を続けた。

状況が一変したのは四五年八月九日。ソ連軍の戦闘機や戦車が満州に攻め入り、逃げる背中を目がけて砲弾が発射された。山中に身を隠しながらの逃避行。草の根やネズミをとって食いつなぎ、橋が壊された川を隊員の脚半をつないで渡った。休憩のたびに、衰弱で動けない仲間が増えていった。

九月、中隊はソ連軍に降伏。刑務所跡につくられた難民収容所に入ったが、過酷な日々は続いた。氷点下三〇度の極寒で、配給されたのは麻袋二枚。おやすみと言葉を交わした仲間は翌朝に凍死していた。死体の衣服を剝いで生き延びる生活は「地獄のよう」だった。

暖かくなると、痩せ衰えた人の体にうじが湧き、感染症がまん延。一日で二十～三十人が亡くなり、遺体をソ連軍の倉庫に積み上げた。義勇軍の先輩からはストレスのはけ口で虐待を受け、同期の一人は集団で殴られた揚げ句、外に縛り付けられたまま放置され、死んでしまった。

四六年にたまらず収容所を逃げ出し、町をさまよった。在留邦人や中国人の家庭に引き取られ、五三年に帰国。「次に死ぬのは自分だと思いながら生きていた。戦争は残酷だ。二度と繰り返してはいけない」と振り返った。

（上）満州に渡った当時の状況を語る須田光司さん＝長野県山ノ内町で
（下）1944年、満州に渡る前に茨城県の内原訓練所で撮影された須田さんが所属していた隊の集合写真。前から2列目の左から5人目が須田さん＝本人提供

朝日新聞（2021年9月18日付社説）より転載

満州事変90年

歴史を複眼視する重み

9月18日が何の日か、知っていますか。

90年前のこの日、中国東北地方の奉天（いまの瀋陽）郊外の柳条湖で、鉄道の線路が爆破される事件が起きた。

日本の関東軍の謀略による満州事変の勃発であり、中国侵略の起点となる事件である。その後、日本と中国は断続的な戦闘を繰り返し、泥沼とも言われた全面戦争へと進んでいく。

日中戦争全体での死傷者数は、日米間の戦いをはるかに超える。中国では9月18日は盧溝橋事件の7月7日とともに「国恥の日」と呼ばれる。

だが日本では、この日はそれほど意識されない。名古屋大学名誉教授の安川寿之輔さん（86）が大学生を対象に毎年続けている調査でも、中国との戦争がいつ始まったのかを答えられる学生はあまりいないという。

被害の記憶に比べ、加害の歴史の伝承は難しいと言われる。ましてや、それを証言する人も少なくなってきている。

1940年に徴兵され、中国戦線に送られた体験を語ってきた三重県の元日本軍伍長、近藤一さんは今年の5月に亡くなった。101歳だった。

中国人捕虜の刺殺訓練や、多くの人を縦列させて銃殺する貫通実験……。戦友らからは「仲間の恥をさらすな」と疎まれたが、それでも証言を続けた。「あったことを隠したら、戦争の実像が伝わらない」と話していた。

中国での残虐行為と、後に転戦した沖縄で仲間の兵隊が無残に殺されていった記憶。近藤さんにとっては、その二つの体験をともに語ることがあの戦争を伝えることだった。

現在に目を転じれば、中国は周辺国の懸念をよそに強引な軍拡路線を強めている。これに呼応し、日本でも専守防衛をないがしろにするような危うい政治の動きが目立つ。

歴史は同じ形では繰り返さないが、時に立場を変え、手段をたがえ、韻を踏むものだ。20世紀前半と現在では多くの条件が異なるとはいえ、過ちを繰り返さないための視座を過去に求める努力を怠ってはなるまい。

その際に不可欠なことは、自国だけでなく、関係する他国の目線でも過去を顧み、思考することだ。当時の自国の行動と思惑が他国にどう映り、なぜ誰も望まぬ破局に陥ったか。

自らを相対化する複眼的な歴史観と分析がなければ、現在に有効な外交・安全保障政策も創出できない。その基本が、加害・被害を問わず、史実を謙虚に受け止め伝えることだろう。

9月18日という日が何の日なのか。忘れずに、心にとどめていきたい。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

関係者に聞けば、朝日新聞の社説で9月18日の「満州事変」を取り上げたのは戦後初めてということである。

東京新聞（2021年9月26日付）より転載　P77からお読みください。

こちら特報部

軍国少年 軍人になって自死 戦意高揚へ小説化

弱者で興味引く手法 今も

大人の思惑で引っ張り出された子どもたちは、どんな気持ちだったのか。残っている記事や文集を読む限り、輝かしい役割を果たせる名誉に心躍らせていた様子がうかがえる。

三二年の学童使節に参加した少年は、出発前のあいさつで満州事変にかかわった陸軍幹部を前に「満州国のお友達と仲良しになり、東洋平和のためにお尽くしになった帝国軍人の方にお礼を申し上げたいと思います」と語った。

この使節の中でとりわけ周囲の期待も本人の意識も高かったと是沢教授が見るのが、仙台市出身で小学六年生だった松岡達（とおる）さんだ。仙台は満州事変で戦闘の中心を担った陸軍第二師団の拠点で、満州事変への関心が高い土地柄。松岡さんは地元小学生から託された絵はがきを携え、駐留する第二師団を慰問した。

生々しい戦いの跡を視察した際には、仙台で泣いていた戦没者遺族を思い起こし「止めようとして止めかねた涙を地下の英霊にささげた」と、記録誌「日本学童使節満州国訪問記」に手記を寄せた。松岡さんは後に軍人への道を志す。

「満州事変は、一般の人からの軍人の評価を一変させた」と語るのは、戦時下のメディア事情に詳しい編集者、早川タダノリさん。

「それまでは一般的には忌避されるような存在だったのが、新天地（満州）に国を建てたというストーリーが国民に受け入れられ、今で言う『日本スゴイ』という本がたくさん出版された」。その物語を子どもたちは純粋に信じ、大人によって知らず知らずのうちに宣伝の役割を担わされ、さらに拡大させる状況になっていた。

松岡さんは旧制仙台一中から一年飛び級でエリートが集まる海軍兵学校に進学。卒業後は飛行兵となり、四二年に七〇五海軍航空隊に配属された。家族にあてた「なんと言っても今の時代に男と生まれ、海軍軍人、しかも海軍の華たる飛行将校として生きていること。こんな幸いなことはない」と気を吐く手紙が、今も遺族の手元に残っている。

軍国少年から軍人への歩みは、翌四三年四月十四日、二十二歳で途絶える。戦友が書いた記録によると、ニューギニア島周辺での大規模空襲作戦の最中、敵機の攻撃に遭い、自爆したという。

㊤子どもと戦争のかかわりを研究している是沢博昭・大妻女子大教授
㊦子どもたちの作文や手紙を収めた冊子や新聞
＝いずれもさいたま市北区で

「最初の出来事」

その八カ月後、雑誌「文芸春秋」に、松岡さんをモデルとする海軍中尉が主人公の小説「海鷲」が掲載された。敵の攻撃で不時着した中尉が、捕虜にならないよう自死するシーンが感動的に描かれた。海軍に従軍した記者が執筆したものだった。少年時代に満州事変の正当化に利用され、それによって始まった戦争で命を落とし、死まで戦意高揚の材料になった。

是沢教授は「子どもなど社会的弱者を使って感情に訴える手法は、物事の本質を見えなくする効果がある。満州事変は、官民でその手法が本格的に始まった出来事だった」と話す。満州事変から始まる日本の十五年戦争で、結果的に国内外で多くの犠牲が出た。松岡さんもその犠牲者の一人とみる。

さらに「社会的弱者を使って大衆の興味を引く手法は今にも通じる」と指摘。例えば、現在選挙活動中の自民党総裁選で、四立候補者のうち三人が「こども庁」の早期創設に意欲を示していることに触れ、「どこまで本気で言っているのか。新型コロナウイルス対策で失敗した自民党の印象を子ども施策で回復させようとしているように見える」と眉をひそめる。別の意図が隠されていないか。

「私たちは利用されないように、その裏側を冷静に見なければならない」

本質見えなくする効果　利用されないよう裏側の注視を

デスクメモ

子どもの話題は今に続く新聞の十八番。読者の多くは親世代で関心が高い。読まれる記事を、という記者本能にも沿う。戦前の記者もプロパガンダの自覚なく「いい話」として書いていたかもしれない。子どもの笑顔で無自覚に「不都合な真実」を隠していないか。自戒していきたい。（歩）

2021・9・26

満州事変勃発90年

純真イメージ 友好演出のプロパガンダ
一翼担わされた子どもたち

九十年前の九月十八日、旧日本軍が中国で鉄道爆破事件を自作自演し、満州事変が始まった。半年後には傀儡の「満州国」を樹立させ国際社会から厳しい批判を浴びたが、国民の多くは熱烈に支持した。そんな国内の空気をつくり出す一端を、子どもたちが担わされていたという。子どもと戦争のかかわりを研究する大妻女子大の是沢博昭教授（子ども史）は「純真無垢な子どものイメージを利用したプロパガンダの危うさは、今にも通じる」と警告する。

そろいの制服を着て、結団式に出席した日本学童使節の子どもたち＝遺族提供

海風に日本と満州国の国旗がはためく。船上には、十二～十五歳の子どもたち十五人の姿。見送りに来た地元の小学生や行政関係者ら約千人が、「バンザーイ、バンザーイ」と大きな声援を送った―。一九三二年九月二十一日、神戸港から「日本学童使節」が出発する時の熱気あふれる様子を、当時の東京日日新聞（現毎日新聞）が伝えている。

この使節は、同年三月に「満州国」が成立した祝いと両国友好の証しとして、小学校教員でつくる民間団体「全国連合小学校教員会」と東京日日新聞などが企画した。その三カ月前には満州国から少女使節が来日しており、「返礼」の意味も込められていた。

使節は約三週間にわたって満州国や朝鮮の都市を回り、各地で歓迎会に出席したり、満州国執政の溥儀ら要人に面会したりした。その様子は同紙や現地の邦字新聞で逐一報じられ、写真とともに「大連の歓迎攻め」「童心・善隣と結ぶ握手」など、友好ムードを強調する見出しが躍った。

日本への国際社会の目は厳しく、中国の訴えを受けて国際連盟が派遣したリットン調査団は、満州国の成立を認めない報告書を書いた。そんな中、両国の子どもたちが友好を深め、平和を演出する。是沢教授は「満州の占領は軍事侵略ではなく、国と国との融合だと印象づけるため、かわいらしい子どものイメージが利用された」と見る。

人形交流ヒントに

是沢教授によると、子どもを使ったプロパガンダは、満州事変以前は見られなかったが、ある出来事がヒントとなり、広まった。二七年の日米人形交流だ。

日露戦争後、米国では反日感情が高まり、日本人の排斥運動も起きた。日本側も対米感情は悪化。決定的な衝突に発展することを懸念した米国の宣教師が「世界の平和は子どもから」と考えて人形交流を提案し、日本側では実業家の渋沢栄一が尽力した。

全国の小学校などにアメリカから来た青い目の人形が飾られ、お返しにと日本人形を米国に贈り、子どもたちが喜ぶ様子が報道された。子どもを前面に押し出した大規模な国際交流は「国内では初めてだった」という。

人形交流には平和や平等な社会の実現への願いが込められていたが、メディアが着目したのはその話題性だった。「子どもを使うと注目され、新聞の売り上げが伸びそうだと気付いた。それが日満使節へつながった」と是沢教授は分析する。

満州事変から四カ月後、まず大阪朝日新聞（現朝日新聞）が満州国に駐留する兵士にあてた子どもたちの作文や絵を掲載。その後、東京日日新聞の学童使節が成功裏に終わり、伊勢新聞も三四年、「童心に結ぶ日満親善」をうたって満州国の子どもたちへの手紙を募集し、冊子にまとめた。東京日日は三九年にも満州国へ子どもを訪問させた。

軍部も子どもに着目。満州事変に関する美談をまとめた冊子の中で、貧しい家の兄弟が兵士への慰問のために募金するエピソードを紹介するなど、子どもの作文を多数取り上げた。

メディア 使節団企画　軍部 美談を冊子に

東愛知新聞（2021年9月27日付）より転載　P79へ続く

発言

弁護士
内田雅敏

9・18を知っていますか

1931年9月18日、中国東北部の奉天（現瀋陽）郊外の柳条湖付近で日本軍は、謀略によって南満洲鉄道の線路を爆破し、これを中国人の仕業として軍事行動を起こしました。いわゆる満州事変です。翌32年、日本は「五族協和」をうたった満州国を創りました。五族とは、日本、朝鮮、中国、満洲、蒙古の5民族のことです。「五族協和」は建前で、実情は日本の傀儡（かいらい）国家でした。

国際社会から非難を受けた日本は33年、国際連盟を脱退し孤立の道に進みました。そして37年7月7日、北京郊外での盧溝橋事件により日中戦争の泥沼にはまり、41年12月8日のハワイ真珠湾奇襲攻撃による日米開戦から45年8月15日の敗戦への道をたどりました。

満州事変以降のこの一連の戦争を歴史学では「15年戦争」とか「アジア・太平洋戦争」と呼びます。この転落の歴史の契機となったのが、この謀略であったのです。本年は事件から90年の節目となります。

被害を受けた中国人たちは、7・7事件とともに9・18事件を絶対に忘れていません。学校教育でもしっかりと学んでいます。しかし近現代史教育をなおざりにしている日本では、一部の運動家、学者を除いてこの問題が語られることはほとんどありません。このギャップをそのままにしていたら中国、韓国など隣国との間に真の友好関係を築くことは困難です。

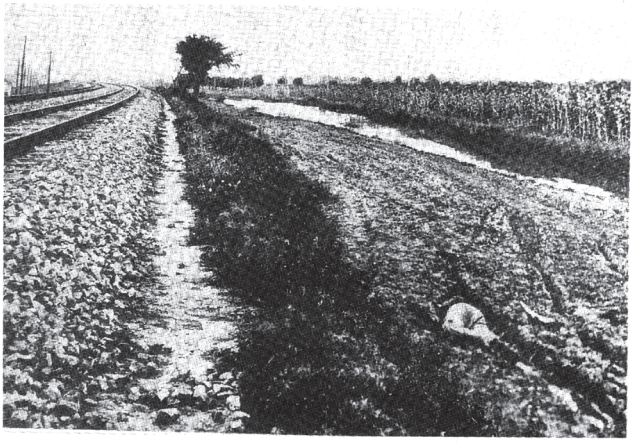
9・18「満州事変」から90年

国会議員の「選良」たちにこそ近現代史教育を

近現代史教育の欠如

北米1課長などを経て外務省を退職し、小泉純一郎首相の補佐官なども務め、先頃亡くなった外交評論家の岡本行夫氏は、講演録「日本にとって最大の危機とは」（文芸春秋社）の中で「なぜ韓国は怨念をもつのか」として以下のように語っています。

「ある意味では戦争で暴虐を行った中国戦線よりも、朝鮮に対して日本がやったことの方が罪深いとすら言えると思います。民族のアイデンティティを完全になくしてしまったわけです。名前、言語、宗教も取り上げ、日本のようにやれとして、二流の日本市民を作り出す皇民化政策を行いました。韓国にはそのことに対する深い恨みがある。我々はそこを理解しなければいけない。彼らの怒りの源泉を理解しなければならないと思います。中国人、韓国人の胸の中には非常に重くあることを我々が直視しない限り、私は、和解は成立しないと思っています」



柳条湖事件の現場（ウィキペディアより）

「私は、近現代史というものを独立科目として、しかも必修科目として高校生たちに教える、ということが絶対に必要だと思っています」

その内容について異論がないわけではありませんが、近現代史教育の欠如という指摘については全面的に賛成です。

ただし、それが必要なのは高校生だけでなく、岡本氏、筆者（2人とも敗戦の年生まれ）ら「戦後民主主義」教育を受けてきた世代を含めすべての成人についても必要です。岡本氏の言及する植民地支配について私たちは何を知っているといえるのでしょうか。

（2面へ続く）

発言

弁護士
内田雅敏

（1面から続く）

の基調を為し真髄を為すのは、己を捨てる精神だと思ひます。この言葉を儒教では仁と申し仏教では慈悲と申してゐます。日本では清明心―御慈悲とも申してゐます。（中略）

自己の総てを天皇に捧げまつることを日本精神といふのであります。また天皇におかせられて慈悲を行わせ給うことを皇道と申すのであります。大君におかせられは皇道、われ〳〵臣民においては、これが臣道であります。

自分を捧げ、自分を捨ててこの精神こそは、人類の生きる道の中で、最も気高い、また最も完全な真理に近い道であると存じます。何故ならば、われ〳〵の目標、日本人としてのわれ〳〵の目標は、米英のように国の強大を計るのでなく、この世界人類を完全に救ふにある。それは歴史を通じて論らないことです。そしてこの目的の達成がわれ〳〵の目的であるが、その目標を達成するのはわれ〳〵個人ではなしに、天皇であらせられる。

われ〳〵はこの天皇を翼賛申し上げながら死ぬものである。私は、この自分を完全に捨て、自分を総べて奉げるという精神こそは、大東亜精神の基本でなければならないと存じます。

◇

大東亜精神は真理そのものでなければならず、国際聯盟が作り上げるような人為的のものではならないと存じます。私達はこの大東亜精神を、こゝで樹立するのでなく、発見するのだと考へます。

この大東亜精神は最も判り易く申しますと、そ

大東亜文学者大会

1942（昭和17）年11月3日、東京の帝国劇場で大東亜文学者大会が開催され、朝鮮、台湾、満洲、中国、蒙古からの参加者が日本の文学者らと討議しました。

大会は土屋文明の司会で始まり「開会に先立って、国民儀礼を行います。宮城遥拝、英霊感謝」の掛け声に促され、満約1500人の参加者は一斉に「宮城」（皇居、昔の江戸城）へ向けて深く頭を垂れたといいます。「英霊感謝」は、まさに戦争真っ盛りの中での大会だったからでしょう。大会でなされたある演説を引用します。

◇

大東亜精神は真理そのものでなければならず、国際聯盟が作り上げるような人為的のものではならないと存じます。私達はこの大東亜精神を、こゝで樹立するのでなく、発見するのだと考へます。

この大東亜精神は最も判り易く申しますと、そ

香山光郎の演説の一部です。大きな拍手が起きたとのことです。ファナチックな天皇賛美の無内容な発言です。これを戦争という「狂気の時代」のなせる業と片付けることは簡単です。

しかし、香山が朝鮮代表であり、朝鮮名李光洙であったことを知る時、彼の演説を単に「時代の狂気」と片付けるわけにはいきません。とりわけ彼の経歴を知ればです。

李光洙は1892年に朝鮮の平安北道に生まれ、日本留学時代に朝鮮独立運動に関わり、1919年の3・1独立運動の基となった「2・8独立宣言」の起草者の一員となり、4月に設立された大韓民国上海臨時政府にも参加しました。

そんな香山光郎こと李光洙に前記のような、読むのもつらい演説をさせた天皇制植民地支配の凄絶さに絶句します。

演説だけではありません。大会2日前、海外からの代表団は下関で上陸し、特急「さくら」で東京駅に着くや、待ち構えた日本側の文学者らに迎えられ、直ちに宮城遥拝し、さらに明治神宮に参拝させられました。翌日は靖国神社に参拝しました。大会当日も明治神宮に参拝しました。帰路では、特急「つばめ」で西下し、伊勢神宮と橿原神宮に参拝しています。

「名前を変え、言葉を変え、異民族の異教の神を祭った神殿に額ずき、侵略し、植民地支配をしている国の王の居城を拝跪し、そしてその王の仁慈を言葉の限り誉め称え」させられたのです（川村湊「満州崩壊『大東亜文学』と作家たち」より）。

日本は1894年の日清戦争の勝利で台湾を取得し、朝鮮半島を支配しました。大陸を侵略しながら1901年、北白川宮能久親王を主祭神とする台湾神宮▽25年には天照大神、明治天皇を祭神とする朝鮮神宮▽40年には満州に天照大神を祭神とする建国神廟▽41年には蒙古に天照大神、明治天皇、北白川宮永久王らを祭神とする蒙疆神社―など、次々と天照大神を祭神とする神社を建設しました。そして現地民に参拝を強要し「我等八皇国臣民ナリ、忠誠以テ君国ニ報ゼン」と「皇国臣民ノ誓詞」を唱えさせたのです。

近現代史を十分に学んで来なかった私たちは、こうした天皇制植民地支配のすさまじさについて知りません。

川村湊氏は、李光洙らについて「私たちはそうした傀儡人形なようなパフォーマンスを他人事として笑うわけにはいかない。それは我われ（あるいは、父母の、祖父母の）姿でもあったと同時に、それを奨励し、要請し、強制したのは、ほかならぬ我われ自身であったのだから。彼らにそのような言葉を語らせ、そのようなパフォーマンスを強制したのは、たとえば朝鮮代表の中に含まれている何人かの日本人であり、李光洙を叱りつけたといわざるをえないのである」（前同書）と書いています。

9・18「満州事変」から90年

草野心平や河上徹太郎のような日本人文学者であり、そして大東亜文学者大会を企画し、実行し、参加し、協力した日本人文学者たち全員である。

そこには久米正雄、菊池寛から高村光太郎、小林秀雄、横光利一、三好達治まで、日本の近代文学を代表する人々が網羅されていた。これらの人々の中で、1957年の東京での国際ペン大会に関与した人も少なくなかったのである。そしてそのことを日本近代文学の問題として、考えてくることのなかった戦後の日本文学に関わる人々の問題

「選良」たちにこそ近現代史教育を

書店に歴史捏造（ねつぞう）のヘイト本が平積みされ、ネット空間でもすさまじいばかりのフェイクニュースが飛び交っています。

自民党の総裁選が真っ盛り。本来ならば、9年弱にわたる安倍・菅政権の総括こそがなされなければならないにもかかわらず、それが全くなされないまま、候補者の全員が安倍晋三前首相の顔色をうかがっています。

私たちは、近現代史を学ぶ前提として安倍氏がどんな歴史観の持ち主であったか、改めて確認しておく必要がありそうです。

「日本を取り戻す」「この道しかない」「明治の日本人に出来て、今の日本人に出来ないはずがない」「昭和の日本人に出来て、今の日本人に出来ないはずがない」―。

自民党総裁選の候補者（党のサイトより）

2015年2月12日、安倍首相（当時）の施政方針演説で語られた言葉です。

彼は14年5月、シンガポールでのアジア安全保障会議での基調講演でも「新しい日本人は、昔ながらの良さを、ひとつとして失わない日本人です。貧困を憎み、勤労の喜びに普遍的価値があると信じ、アジアがまだ貧しさの代名詞であるかのようにいわれていたころから、自分たちにできたことが、アジアの他の国々で同じようにできないはずはないと信じ、協力を続けました。こうした無私無欲の貢献をそれぞれが喜びとする点で、父、祖父たちと、なんら変わるところはないのです」とやりました。

一体どこの国の話でしょうか、なんと空疎な言葉でしょうか。まさに「言葉は形容詞から朽ちる」（開高健）です。近隣アジア諸国はこの基調講演をどう受け止めたでしょうか。さらに以下のようなくだりもありました。

「国際社会の平和、安定に、多くを負う国ならばこそ、日本は、もっと積極的に世界の平和に力を尽くしたい。〝積極的平和主義〟のバナーを掲げたい…自由と人権を愛し、法と秩序を重んじて、戦争を憎み、ひたぶるに、ただひたぶるに平和を追求する一本の道を日本は一度としてぶれることなく、何世代にもわたって歩んできました。これからの幾世代、変わらず歩んでいきます」

ドイツの首相が、欧州議会でこのような演説をしたら、ドイツという国の存在が認められたでしょうか。

こんな人の顔色を伺う自民党総裁選の候補者、世襲による2世、3世の国会議員たちの歴史認識の欠如には目を覆うばかりです。故岡本行夫氏が、独立の必須科目とせよと主張した近現代史教育は、まず「選良」とされる政治家に対してこそなされなければなりません。

東京新聞（2021年10月2日付）より転載

幻の村 哀史・満蒙開拓

手塚 孝典 著

（早稲田新書・990円）

悲劇の裏に…今語る真実

時がたち風化していく歴史がある一方、歳月を経たからこそ明らかになる歴史もある。本書は一九六五年生まれの信越放送ディレクターが、長野県内のかつて満州移民だった高齢者を中心に取材を重ね、満蒙開拓の実相に迫ったルポルタージュだ。

満州国建国後、国策により約二十七万人が開拓民となって大陸に渡った。長野は中でも最多の移民を送り出した県である。国は農村の困窮層救済を宣伝していたが、実際はソ連国境防衛と植民地支配が目的。だがソ連軍が侵攻するや関東軍は逃亡。置き去りにされた人びとは過酷な逃避行のさなか、侵略者の日本人を恨む中国人に襲撃されたり、絶望の果てに集団自決したり。八万人以上が亡くなった悲劇はよく知られている。

取材を始めた当時、すでにほとんどの開拓民は他界していたが、だからこそ存命者は人生の最晩年に、封印していた後ろ暗い過去を語り始める。例えば十四歳で開拓団に参加した男性は、集団自決の夜、母親たちがわれ先にわが子の首を絞める光景に呆然としていると、大人に叱られた。「何しているんだ、早く手伝ってくれなくちゃ」。どれほどの時間、何人に手をかけたかわからないと語った。

九十五人を満州へ送り七十三人が自決した旧・河野村の村長は、敗戦翌年に四十二歳で自死した。この話題は一族のタブーだったが、真実を残すべきとの子息の判断で、戦後六十年目に日記が公にされた。死の直前まで綴られた日記からは、地主の家に生まれ農民を思いやる若き村長が、誤った国策に正義感を鼓舞され、開拓団を送り出すに至った心の軌跡がたどれる。

国策による被害者が、図らずも人を殺め、侵略に加担した加害者となったというつらい事実。国家は国民に何をし、何をしなかったか。人はいかにして時代にのまれていくのか。本書は満蒙開拓の不都合な歴史をつまびらかにし、様々な問いを投げかける。

今年で満州事変から九十年。満蒙開拓の歴史は遠い過去ではなく、私たちが生きる現代と地続きなのだ。若い人たちに、ぜひ読んでほしい。

評 瀬川 千秋（翻訳家）

1965年生まれ。ドキュメンタリー制作者。広告会社を経て信越放送入社。

もう1冊 江成常夫著『シャオハイの満洲』（論創社）

朝日新聞（2021年8月30日付）より転載

地下道の7歳 強烈な飢えの記憶

戦争孤児、弟と生きるため盗み殴られ

終戦後の東京・上野駅地下道で、生きのびるため残飯を拾い、弁当を盗むほかなかった戦争孤児たち。栄養失調で倒れても手を差しのべてくれる人はなく、公的支援も届きませんでした。当時7歳だった女性の証言です。

鈴木賀子さん（東京大空襲・戦災資料センター提供）

終戦後間もない1945年秋。空襲で家を焼かれ、親を亡くした鈴木賀子（よしこ）さん（88）＝埼玉県川口市＝は、上野駅の地下道にいた。

当時7歳。「浮浪児」と呼ばれた戦争孤児の1人だった。隣には4歳の弟がいた。

強烈なのは飢えの記憶だ。生き残った当時14歳の姉が都内にいたが、事情があって姉と暮らせなかった。姉は数日おきに食べ物を届けてくれたが、飢えはしのげなかった。

ヤミ市の残飯をあさり、下痢を繰り返した。米兵の車にしがみつき「ギブミーチョコレート！」と叫んだ。チョコをもらえたら、ヤミ市で雑炊と物々交換した。

孤児仲間に、生きのびるための盗みを教わった。数人で上野公園などを訪れる人のお弁当を狙う。相手に近づくのは鈴木さんの役割。女の子で警戒されにくいからだ。

ヤミ市の食べ物を1人で盗んだことも。仲間には「すぐ食べ物を口に入れろ。そうすれば捕まっても取り返されることはない」と教わった。だが口に食べ物を入れると逃げ足が遅くなる。何度も捕まり、殴られた。おなかをすかせて泣く弟を思い、ひたすら耐えた。殴られた後で、おまんじゅうを口から出し、弟に半分あげた。

極度の窮乏期で、世間の目も冷たかった。

「通行人が寝ている子をけとばして歩いていました。あのころ、私のような戦争孤児、浮浪児なんて野良犬といっしょです。でも、けられても動かない子もいた。栄養失調で死んでいるんです」

終戦後の上野駅の地下道は「浮浪児」「浮浪者」であふれた。当時の朝日新聞（45年11月）は、上野駅の餓死者は多い日で1日6人、平均1日2・5人だと伝えている。だが次第に地下道の「死」にも無感覚になっていった。

「当時は、人の生き死によりもなによりも、おなかがすいていることが、空腹がつらかったの」。鈴木さんは絞り出すように語った。

過酷な地下道生活を抜け出せたのは、姉が必死で探した孤児施設に弟が入所できたからだ。ただ鈴木さんは定員オーバーで同じ孤児施設に入ることはできなかった。その後、茨城県の親戚宅をへて、血のつながりはない家に引き取られた。中学校卒業後に就職して上京するまで、その家で育った。

弟とは、その後一緒に暮らすことはなかった。弟は20歳で自ら命を絶った。

東京・上野駅の地下道で眠る人々＝1946年8月

たくさんの子が亡くなった 語らなければ

鈴木さんから家族を奪ったのは、45年3月10日の東京大空襲だ。自宅は現在の東京都江東区。父を病で亡くし、45歳の母と17歳と14歳の姉2人、弟の5人家族だった。

あの日、家に残した大切なものを取りに戻ろうとする母と長姉から、先に逃げるように指示された。「お母さんもすぐ行くよ」。それが最後に聞いた母の言葉だ。遺品や遺骨も見つからぬまま、母と長姉は帰らぬ人となった。

次の海を生きのびた後、次姉と弟と3人で都内の親戚宅を転々とした。その後、親戚だという女性に引き取られ、弟と鈴木さんは北海道で暮らすことになった。姉は東京に残った。

この女性の家で半年ほど暮らした。だがつらい仕打ちに耐えかね、女性に「（姉のいる）東京に帰してください」と頼んだ。東京に戻れることになった。青函連絡船に女性と一緒に乗り込んだ。ところが「弁当を買いに行く」と言ったまま、鈴木さんと弟を残し、女性は姿を消した。同乗の男性に「おまえら、捨てられたんだよ」と言われた。

鈴木さんと弟は、青森から無賃乗車と物乞いを繰り返し、姉のいる東京・高円寺にたどり着いた。何日かかったか、覚えていない。

東京で再会した姉は、2人をみて身をよじるように泣いた。姉が暮らす寮に転がり込んだ。だが2、3日しかいられなかった。寮の住人のモノがなくなり、鈴木さんと弟が疑われたのだった。追い詰められた先にたどり着いたのが、上野の地下道だった。

鈴木さんは22歳で結婚、亡き夫との間に3人の息子がいる。過酷な経験を証言するようになったのは、還暦を過ぎてからだ。敗戦後の歴史がきちんと教えられていないという憤りが胸にある。

「わたしは運良くここまで人生をまっとうできた。でも地下道で亡くなった子もたくさんいる。誰かが語らなければ、知らない人には何があったかわからないでしょう」

（編集委員・清川卓史）

〈戦後の孤児〉 厚生省（現厚生労働省）が1948年に実施した調査によると、全国の孤児総数（沖縄県を除く）は12万人を超えた。駅や公園などで暮らした「浮浪児」の正確な実態は明らかではない。行政は「かり込み」（巡回して強制保護し児童施設に収容すること）を繰り返したが、施設の劣悪な処遇に耐えかねて逃げ出す子が後を絶たなかった、とされる。

東京新聞（2021年8月31日付）より転載

負の記憶 風化させない

朝鮮人虐殺の証言集 30年ぶり復刊

有志ら 矮小化に危機感

一九二三年九月の関東大震災の際に起きた朝鮮人虐殺の記憶を継承するため、東京・下町の有志の手により出版された証言集「風よ鳳仙花の歌をはこべ」が、増補版となって約三十年ぶりの復刊を果たした。虐殺の事実を矮小化しようとする論調に危機感を持った市民グループが「正しい歴史を伝える責任がある」と企画した。（砂上麻子）

東京都墨田区八広の荒川近くに二〇〇九年に建立した朝鮮人犠牲者の碑で毎年九月、追悼式典を行っている市民グループ「ほうせんか」の編著。小学校の教員だった絹田幸恵さん（〇八年没）ら、ほうせんかのメンバーが一九八二年から十年間をかけて震災や虐殺を記憶する約百五十人から聞き取った旧版の証言集に、近年の活動記録を加えた。

記憶継承の活動は、絹田さんが八二年、地元のお年寄りから「関東大震災では荒川の河川敷で、朝鮮人が殺されて埋められた」と聞いたのがきっかけだった。鎮魂のための発掘を実現しようと、ほうせんかの前身の団体が結成された。発掘では遺骨は見つからなかったが、その後、地域で起きた朝鮮人虐殺の調査活動が本格化することにつながった。

証言集は関東大震災の研究に大きな影響を与えた。「九月、東京の路上で」（加藤直樹著）をはじめ、大震災関連の数々の書籍で引用がされた。ただ、刊行から三十年近くが過ぎた本は絶版となり、入手困難になっていた。証言者も多くが亡くなっている。ほうせんか理事の矢野恭子さん（六一）は「（虐殺を）見聞きした世代がいなくなり、歴史を伝える難しさを感じていた」と語る。

朝鮮人虐殺を否定する本が相次ぎ出版される時代だ。墨田区の横網町公園で行われている朝鮮人犠牲者の追悼式典に、小池百合子都知事が二〇一七年から追悼文を送るのをやめた。記憶の風化も心配されている。

ほうせんか理事で在日韓国人二世の慎民子（シンミンジャ）さん（七一）は「三十年間で朝鮮人虐殺を巡る歴史観は後退した。加害責任の否定にあらがうには伝える努力を怠ってはいけない」と力を込めた。問い合わせは、出版社の「ころから」＝電03（5939）7950＝へ。

㊤朝鮮人虐殺犠牲者の追悼碑を囲む慎民子さん（右端）、矢野恭子さん（右から2人目）ら「ほうせんか」のメンバー＝東京都墨田区八広で
㊦復刊された「風よ鳳仙花の歌をはこべ」

関東大震災の朝鮮人虐殺　1923年9月1日発生した関東大震災で朝鮮人が「井戸に毒を入れた」などのデマが広がり、自警団や軍隊、警察により多数の朝鮮人らが殺傷された。国の中央防災会議の報告書は、震災の死者・行方不明者約10万5000人の1～数％が虐殺の犠牲者だとしている。

東京新聞（2021年9月21日付1面）より転載

扉1枚 生死を分けた

封印されたビデオ

東京大空襲 体験者の証言

— ❶ —

一夜にして十万人が亡くなった一九四五年三月十日の東京大空襲など戦争の記憶を継承しようと、東京都が約三百人の体験者の証言を収録したビデオテープが四半世紀公開されず、倉庫で眠っている。貴重な体験を後世に伝えるため、本紙は、ビデオの収録に応じた証言者をできる限り探し出して話を聞いた。六回にわたって紹介する。＝継承の思い応えて㉕面

越部恵美子さん（82）

間一髪で講堂内へ 「入れてくれ！」たたく音

「たくさんの遺体を車に積んできて、深川えんま堂で組み上げて焼いていた光景が頭から離れない」

一九九七年、東京都北区の越部恵美子さん㈧はビデオカメラの前で、神妙な面持ちで語った。

都は外郭団体「東京都映画協会」に委託し、ビデオの収録を進めていた。当時、越部さんが都から受け取り、保管していたビデオを今年夏に見せてもらった。

越部さんが戦時中に暮らしていたのは隅田川近く、現在の江東区福住地区。ビデオで「提灯店、材木店、釣り船店などが並ぶ下町情緒のある街だった」と回想している。

空襲の瞬間を語る口調は生々しい。「真夜中なのに昼間のように明るくなった。家の前に逃げ惑う人があふれた。燃えた木材が倒れかかり、頭上から火の粉が降り注いだ」

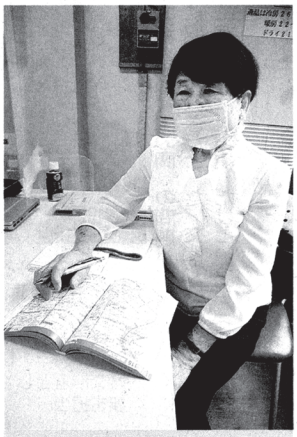
父は軍隊に召集され、いなかった。母と祖父母、二人の弟と一キロ北西の隅田川に架かる清洲橋を目指した。はぐれないように、胴体にくくりつけたひもを母の腕にしっかり結んで歩いた。

清洲橋は焼夷弾が炸裂し、あちこちで火の手が上がっていた。「リュックを背負ったお年寄りの背中に焼夷弾が直撃し、よろけながら隅田川に落ちた。まさに生き地獄だった」。必死で逃げ惑ううちに明治国民学校（現明治小学校）にたどり着き、鉄筋コンクリートの講堂に逃げ込んだ。

「何とか隙間に入れてもらった数分後に、鉄の扉が閉められた」。外は火の勢いが増していた。

「入れてくれ！」。ドアをたたく音が響いた。無情にも鉄の扉は閉ざされたままだった。

「私は六歳で一度死んだようなもの。運がよかっただけ。それから私は何年、生きてこられたと数えながら、命の大切さをかみしめてきた」（井上靖史）



上講堂に逃げ込んだ東京大空襲の体験を語る越部恵美子さん＝東京都北区で（井上靖史撮影）
下越部さんの体験談を収録した東京都の証言ビデオ画面

貴重な資料 公開を

解説

十万人が犠牲になった東京大空襲をはじめ、都民三百三十人の戦争体験を収録した証言ビデオは、一九九〇年代に計画された「東京都平和祈念館（仮称）」で公開される予定だった。だが展示内容を巡り都議会が紛糾。石原慎太郎知事時代の九九年、財政難なども理由に建設は凍結された。

証言ビデオや防空ずきんなどの資料はお蔵入りとなり、「東京都庭園美術館」（港区）の倉庫に保管されたままとなっている。都は毎年三月に開く空襲資料展で、九人のビデオ証言の一部を公開しているだけだ。

本紙は非公開の証言者を探し出して取材を進めた。証言者には当時、収録テープが渡されていた。証言は詳細かつ具体的で、戦争被害を伝える貴重な資料だ。

原爆投下や沖縄の地上戦などの被害者の証言が後世に伝えられているのとは対照的に、二十年を過ぎても倉庫に眠ったままというのは重大な不作為と言える。

戦後七十六年がたち、体験者がいっそう高齢化する中、公開を望む証言者や家族は多い。ビデオ収録には一億円の公金も投入されている。都や都議会は公開に向けた対策を一刻も早く講じるべきだ。（井上靖史）

ビデオの収録から二十四年が過ぎた戦後七十六年の夏、越部さんは記者に訴えた。

東京都が1996～99年度に行った空襲体験のビデオ収録事業で証言した人や関係者を探しています。ファクス＝03（3595）6917＝か、Eメール＝shakai@tokyo-np.co.jp＝へ情報をお寄せください。

東京新聞（2021年9月21日付25面）より転載

平和継承の思い 応えて

封印されたビデオ
東京大空襲 体験者の証言

収録から二十年以上が過ぎた今も公開されず、都内の倉庫に眠る東京大空襲などの戦争体験者約三百人の証言ビデオ。終戦から半世紀後の一九九〇年代後半、都は貴重な戦争体験を広く後世に伝えようとしていたが、なぜ封印されたのか。（井上靖史）＝❶面参照

証言した空襲経験者の苦しみを理解してほしいと訴える早乙女勝元さん＝東京都足立区で

祈念館凍結 証言320人公開されず

収録へ尽力 作家・早乙女勝元さん

証言を収録するよう都に求めたのは、作家の早乙女勝元さん（八九）だ。自らも空襲体験者で、その証言の記録に半生をかけて取り組んできた。九五年には「いま空襲体験者の声を集めなければ時間切れになる」と、当時の青島幸男都知事に訴えた。

早乙女さんは「大空襲を伝える施設を設ける方向は固まっていたが、建物ができるまでは相当な時間がかかり、その間に亡くなってしまう人もいる。映像だけは元気なうちに確保しては、と提案した。都民参加でやることに大きな意味があるとお伝えした」と話す。

収録を担当したのは都の外郭団体「東京都映画協会」。女性映画監督の渋谷昶子（のぶこ）さん（故人）らが九六～九九年度に制作したビデオには、空襲体験や疎開先での生活など幅広い都民の戦争体験が集まった。防空ずきんや焼け焦げた万年筆といった物品も集まった。

だが、展示施設となる予定だった「東京都平和祈念館（仮称）」を巡り、加害についての内容や「軍事都市東京」の表現などに対し大学教授や一部の都議から反対の声があり、祈念館の整備計画は九九年に凍結された。それから二十年以上が過ぎた。

都は毎年三月に開いている空襲資料展で、九人の証言ビデオを公開している。その他の約三百二十人については「平和祈念館以外で使用する同意を得られていないため、公開の対象としていない」（生活文化局の担当者）という態度だ。

だが、そもそも公開に向け、二〇〇〇年に意向を確認したのは九人のみ。「なぜ九人しか確認していないのか」と問い合わせると、都の回答は「当時の資料がなくわからない」だった。

本紙が証言者の名前や住所の情報公開を求めても都は開示しなかった。本紙はこれまでの取材で約二百人の名前は確認したものの、亡くなった人や連絡先のわからない人が多い。

都は収録に際し、証言者に「貴重な証言を後世に伝えていく」とする生活文化局長名の文書を渡したものの、その後の経緯は文書の趣旨とは正反対だ。ある都の関係者は「私たちもこのままでいいとは思っていないが、（祈念館の建設計画を凍結した）都議会の付帯決議は重い」と語る。ビデオテープはDVD化を済ませているという。

早乙女さんは訴える。

「つらい体験で本当は話したくない人もいたはず。二度と繰り返さないようにと口を開いた人たちの思いに応えてほしい」

東京新聞（2021年9月22日付）より転載

家族が吹き飛ばされた

封印されたビデオ

東京大空襲 体験者の証言

— ❷ —

船渡和代さん（89）

「家族が吹き飛ばされた」。一九四五年三月十日の東京大空襲では「火事場風」と呼ばれる熱を含んだ突風があちこちで吹いた。東京都葛飾区の船渡和代さん（89）は二十五年前、都の要請に応じてビデオカメラの前で、その恐ろしさをまざまざと語っていた。都が船渡さんに渡したビデオテープを見せてもらった。

「寒い日だった。六つ下の妹と二人でふとんに入って温まっていた」。船渡さんは十二歳の記憶を振り返る。七人きょうだいの真ん中で、父母含めて九人家族だった。国民学校の卒業式を控え、疎開先の山形県から現在の江東区大島の実家へ戻っていた。目が覚めたら外が騒がしい。空襲だ。

「十カ月の弟をおぶった母、妹と四人で逃げた。途中、消火活動をあきらめた父、三人の兄と偶然、合流して猿江恩賜公園を目指した」。公園は人がいっぱいで入れなかった。小名木川に架かる大通りの進開橋にたどりついた。

「風にさらわれた母が、煙の中で見えなくなった。父は母を追った。父のベルトをつかんでいた三男も見えなくなった」

残されたのは二人の兄、妹との四人。大通り沿いには深さ二㍍に満たない堀があった。「行くぞ」。長兄の掛け声のもと走った。背負っていたリュックが炎いしたのか、次兄が突風で吹き飛ばされた。助けようとした長兄も飛ばされた。

妹と二人きりになった。「立ち上がれば突風に飛ばされる」と、火の粉を浴びながら堀の中で耐えた。妹の防災ずきんが燃えた。「熱いよ。水ちょうだい」。叫ぶ声を聞きながら、素手で必死に土をかいた。少しは深くなった堀に、妹を寝かせた。

夜が明け家族を捜した。父、母、二人の兄には会えたが、次兄は見つからなかった。母が背負っていた弟がいない。どうしたと聞くと、母は首を振った。「かぶせていたずきんが燃えて焼け死んだか、飛ばされたのか。家族とはぐれた進開橋は川がせき止められるほど遺体が積み上がった」

空襲から九日後、妹は破傷風で死んだ。「土の上に寝かせたときに、傷口からばい菌が入ったのか。近所の家にいて別々に避難した祖母、祖母と一緒に避難したはずの三歳の妹にも二度と会えなかった」

二〇〇八年、撮影を担当した映画監督の渋谷昶子さんから書面が届いた。「何らかの形で日の目をみるよう努力します」とあり、期待したが、渋谷さんは一六年に先立った。船渡さんは「ビデオが公開されるのを見届けられるかどうか…」と悔しそうに話した。

（井上靖史）

❶証言ビデオを公開して自身の体験を教訓にしてほしいと願う船渡和代さん＝東京都内で
❷船渡さんの空襲体験を収録した東京都の証言ビデオ画面

封印されたビデオ　10万人が犠牲になった1945年3月10日の東京大空襲をはじめ、戦争被害の実態を後世に伝えようと東京都は1990年代後半、被害者330人の証言をビデオ収録した。当時、建設が計画された東京都平和祈念館（仮称）で公開される予定だったが、展示内容や歴史認識で都議会が紛糾、計画は99年に凍結された。ビデオは9人分を除き、公開されないまま都内の倉庫に保管されている。

「火事場風」避難中に離散、妹と2人きり

東京新聞（2021年9月23日付）より転載

「助けて」の声…逃げた

やけどの女性を残し、後悔今も

封印されたビデオ ―東京大空襲 体験者の証言― ❸

甚野年子さん（90）

上 目も開けていられないような炎の中を逃げた体験や疎開の記憶を話す甚野年子さん＝東京都墨田区で
下 甚野さんの空襲体験を収録した東京都の証言ビデオ画面

惨事の中、とっさにとった行動が悔やまれる。「あの人はどうなったのだろう」。東京都墨田区の甚野年子さん(九〇)は、七十六年たった今も脳裏から離れない記憶がある。

都に頼まれてカメラの前で話した内容は、DVDにして保存している。東京大空襲に襲われた日の朝の記憶を生々しく語った。

錦糸町駅近くに店を構える製材業者の長女だった。弟をおぶって火のなかを逃げ、店の近くの自宅付近まで戻ってきて安心しかけたとき。突如、地を這うように手が伸びてきた。「助けて…ください」。髪の毛は焼け、着物がボロボロの女性だった。思わず足を上げてよけた。

空襲警報を聞いたのは床に就く直前だった。両親、幼い弟三人と家を飛び出した。「渦巻く炎の中を逃げまどった末、家から百㍍ほどの場所に偶然、納豆工場を見つけた。石室で朝を待った。幸運に命を救われた」

親族を頼り、疎開した。現在のあきる野市や青梅市で暮らした。四月十六日から日記を始めた。当時の生活が克明に記されている。

十四歳、多摩地方の飛行場への勤労動員に駆りだされた。「格納庫で、びょう打ちをやった」と書いてある。

「六～七月には空襲警報が朝や昼の食事の時間など一日三回ぐらいある」

「工場に行っても仕事がない日があった。時間が長くて仕方なかった」

日記からは戦局の悪化する様子が分かる。

「山中に金属のひも状のものがばらまかれている。電波妨害するためにスズをいっぱい山に落としたのではないか」と、米軍機による工作とみられる実態も記録した。

八月十五日の終戦から六日後の二十一日は「緑色の山に光る金属を見た」と記した。「憎らしい、憎らしい。やっつけたい」という言葉が添えられている。

甚野さんは、日記などに基づく自身の証言を聞き直すたびに「当時は、そんなふうに思っていたのか」と、教育の影響の大きさを実感する。

「いろいろなことがあったから証言を残したいと思った。後世のためにも大事でしょう」。それを非公開とする都の態度が不満だ。「連絡は何もありません」

（井上靖史）

東京新聞（2021年9月24日付）より転載

疎開先でも空襲 工場壊滅

動員学徒の遺体捜し続けた

封印されたビデオ ―東京大空襲 体験者の証言― ❹

「中学生のとき、学徒動員され工場で働いた。一歩間違えれば死んでいた。収録に応じたのは、平和がいかに大切かを感じてくれればという思いからだった」

東京都世田谷区の三好重遠（とう）さん（八九）は、都の依頼で戦争体験をビデオに証言した理由を語る。テープは手元になく、四半世紀前の記憶をたどってもらった。

「渋谷区松濤で母、姉、弟と暮らしていました」。一九四五年三月十日の東京大空襲の後、インドネシアのスマトラへ軍属として赴いていた父親のつてをたどり、山口県に疎開した。

「十三歳でした」

現地の旧制柳井中学に入ってまもなく、光市の海軍工廠（しょう）（兵器工場）に学徒動員された。「毎日、毎日、工員が隠れる防空壕（ごう）を掘らされた。機械なんてないから手でスコップを持って」

八月十四日の昼休み。空襲警報が鳴った。窓から逃げ、教えられたとおりに「耳をふさぎ、口を半開きにして目を押さえて伏せながら前進した」。何とか三十メートルほど離れた場所にあった防空壕にたどり着いたが、爆撃は近くまで迫っていた。

「ここも危険だ」。防空壕を飛び出し、海岸や裏山を駆け回った。空襲は一時間超にわたった。最盛期には三万人が働いていた巨大工場は「跡形もなくなった」。記録によると、空襲では約百三十人の学徒を含む約七百三十人が死亡した。

足を負傷した。翌十五日は工場へ行くのを休んだ。玉音放送時の工場の様子はわからない。十六日に工場へ行くと、亡くなった学徒の遺体を捜せと言われた。

「でも終戦で気が抜けたようになってしまって真剣に捜せないんですよ。一日中、工場中を歩いたことは鮮明に覚えていますけれど。空襲は終戦の一日前。もっと早く戦争が終わっていれば。朝、元気に出て行った子が帰って来なかった親のことを考えるとたまらない気持ちになる」

撮影の際、都から受け取った依頼文書には「貴重なお話を後世に残すために証言を集めたい」と書いてあった。そこで三好さんは「ビデオはてっきり公開されたと思っていた」と驚く。

「何もわからない中学生が戦争に動員され、亡くなった方もいるということを知っておいてほしい」

（井上靖史）

三好重遠さん（89）

空襲で亡くなった動員学徒の写真を収めた文集を手にしながら体験を振り返る三好さん＝東京都世田谷区で

封印されたビデオ　10万人が犠牲になった1945年3月10日の東京大空襲をはじめ、戦争被害の実態を後世に伝えようと東京都は1990年代後半、被害者330人の証言をビデオ収録した。当時、建設が計画された東京都平和祈念館（仮称）で公開される予定だったが、展示内容や歴史認識で都議会が紛糾、計画は99年に凍結された。ビデオは9人分を除き、公開されないまま都内の倉庫に保管されている。

さて、東京都におきましては、戦争の惨禍を語り継ぐとともに、平和について学び考えまた、都民の平和への願いを世界に向けて発信する拠点施設として、東京都平和祈念館（仮称）を建設するべく準備を進めております。

ことに、戦後50年を経て、先の大戦における惨禍を、体験者自らが語る内容を記録し、後世に体験を継承していけるような証言記録映像を制作するための証言収録を実施することは、今日緊急の課題となっております。

つきましては、あなたの体験の証言をビデオテープに収め、記録し、保存・活用させていただきたいと存じますので、よろしく御協力のほど、お願い申し上げます。

東京都が証言の収録の際に渡した依頼文書の一部。三好さんが受け取った書面にも「後世に体験を継承していけるよう」といった趣旨が書かれていた

東京新聞（2021年9月25日付）より転載

砲弾の破片 拾いに行った

焦土の子どもたち 恐怖と冒険心

封印されたビデオ
東京大空襲 体験者の証言
— ⑤ —

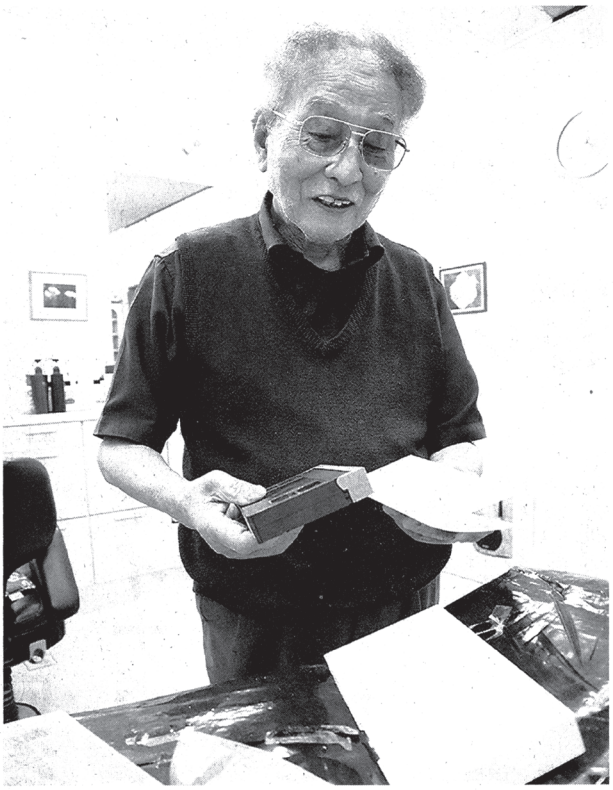
岡本邦夫さん（86）

「ここまで覚えているかって思うね」

東京都豊島区の理容業岡本邦夫さん(八六)は、改めて二十年以上前に撮影された自らのビデオを見て語った。

「当時はまだ六十歳ぐらい。記憶が鮮明だった」

都の依頼に応じ、一九四五年四月十三、十四日の城北大空襲について語った。池袋駅から西へ一キロほどの家は奇跡的に焼け残ったが周辺の住宅街が焦土と化した。「板橋に高射砲陣地があり、当たらずに破裂した砲弾の破片を拾いに行った。子どもだから怖さもあったけれど興味もあった」



東京都が収録し本人用に渡されたビデオテープを手にする岡本さん＝東京都豊島区で

（東京大空襲当時）

岡本さんの戦時下の体験を収録した東京都の証言ビデオ画面

不発弾を見つけたときのことも語った。

「七十センチぐらいの筒がたくさん束ねられていた。中にはゴムのりみたいにドロドロとした接着剤みたいなのが入っていた」

夏になると空からビラが降ってきた。「『日本は早く戦争をやめなさい』と書いてあった。三～四枚拾って交番に届けた」

疎開はしなかった。埼玉県内に母親の実家があったが、「来ても食べさせる米がない」などと言われたからだ。疎開しなかったから、戦時下の首都の姿を目に焼き付けた。「空でシラミくらいにしか見えなかったB29が低空を飛ぶようになると、魚のキスぐらいの大きさになった」

とにかく食べ物はなく、生活は苦しかった。

「貴重な砂糖は使わず、空襲で防空壕に身を隠すたび、もう終わりかもしれないからみんなでなめようと、少しずつ指に付けてぺろりとなめていた」

学校では毎日のように先生に殴られた。「級友が何か悪いことをすると、連帯責任だといわれてほおをたたかれた。吹き飛ばされるくらい、毎日毎日たたかれた」

子どもたちに、自分のような体験をさせたくないという思いで、ビデオ撮影に応じたのに、公開されないことに憤りを感じている。

「本当に起きたこと。知らせなければいけない。今の政治が何かを隠そうとしているのだろうか」

（井上靖史）

東京新聞（2021年9月26日付）より転載

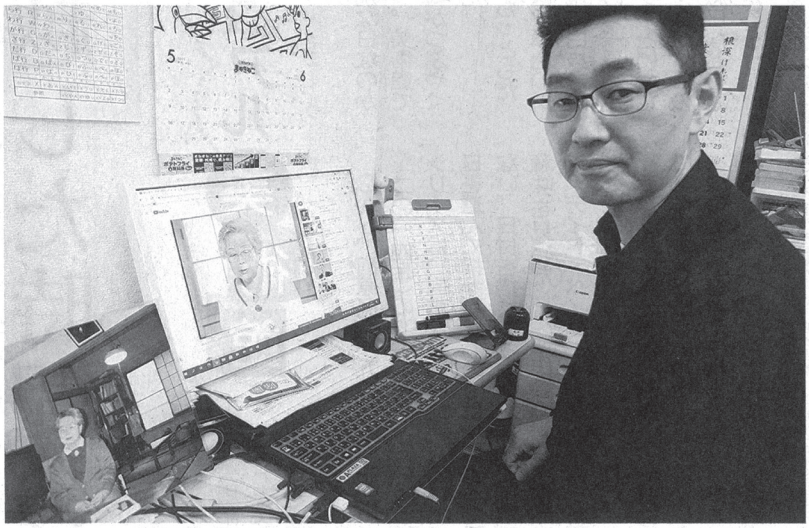
一生 残るはずだった

封印されたビデオ ―⑥―

東京大空襲 体験者の証言

故横谷イセ子さんの孫・神尾守さん（49）

祖母の声 代わりにネット投稿



祖母の横谷イセ子さんの証言映像をユーチューブで公開している神尾守さん＝東京都品川区で

「祖母は証言が残ると期待して撮影に応じた。多くの人に見てもらわねばならない」。東京都品川区でパソコン教室を開く神尾守さん(四七)は、二〇一〇年に九十五歳で亡くなった祖母、横谷イセ子さんの証言映像を動画投稿サイト・ユーチューブにアップした。

「みんな追い詰められて隅田川にどんどん飛び込むんです。言問橋のところに右からも左からも（台東、墨田両区側から）いっぺんに火が入ったんですね」

横谷さんは都の依頼で応じたビデオ収録で、隅田川に架かる幹線道路の橋の情景を語っている。空襲当時は夫が出征しており、現在の墨田区東駒形の実家に娘と身を寄せていた。娘は後の神尾さんの母親である。

空襲が激しくなり、娘や近くにいた妹らと避難しようとしたが、「（東の）押上方面からも（西の）浅草方面からも人の波が押し寄せてきた」。火の粉が降り掛かる中、数百㍍離れた隅田川沿いの隅田公園に逃れ、対岸の浅草方面に目をやると、焼夷弾が落ち、真っ赤に燃えるのが見えた。

間もなくして言問橋の惨状を目の当たりにした。

「お父ちゃん、お母ちゃん、という叫び声も聞こえた。遺体やけが人があふれ、夜が明けた時の状況は、もう忘れられないぐらいひどいものでした」

神尾さんによると、池袋に自宅を構えたイセ子さんに都の取材陣が来たのは二十五年ほど前。スタッフからは「一生、残りますよ」と言われ、収録には半日以上かけた。だが、待ち続けた都からの連絡は一切、なかった。

「祖母は『いつか出るのかね』と、ずっと気に掛けていた」。亡くなる直前に証言映像をインターネットに上げると伝えると、「いいよ」と二つ返事だったという。

「祖母は戦争体験を引き継がなければといつも言っていた。私も引き継がれるべきだと思って公開した」と神尾さん。

「戦争反対と きちんと言っていかないといけないし、それには体験した本人が出ているビデオを公開するのが一番いい。別の方の証言ビデオもあるなら、ぜひそれも見てみたい」

（この連載は、井上靖史が担当しました）

証言の情報 お寄せください

この連載は、10万人が犠牲となった1945年3月10日の東京大空襲をはじめとする戦争体験者330人の貴重な証言ビデオが、9人を除き公表されないままとなっていることから、本紙が非公開の証言者を探し、記事にしたものです。

都は96～99年度に1億円の公費を使い、証言ビデオを収録しました。「東京都平和祈念館（仮称）」で公開する予定でしたが、歴史認識などを巡って都議会が紛糾し、祈念館の建設計画は99年に凍結されました。

本紙は、都や都議会は公開に向けて対応するべきだと考え、今後も証言者や関係者の取材を続けます。ファクス＝03（3595）6917＝か、Eメール＝shakai@tokyo-np.co.jp＝へ情報をお寄せください。

東京新聞（2021年7月5日付）より転載

元日本兵墓地 清掃50年

異郷に眠る元日本兵を、子どもの頃から見詰めてきた。日本海に面したロシア極東ナホトカにシベリア抑留者の墓地があり、１人のロシア人女性がボランティアで清掃に通っている。終戦から76年を迎える今、命の重みを再びかみしめながら。（ナホトカで、小柳悠志）

ロシア・ナホトカ 祖母と２代のボランティア

「どこの国だろうと人を弔う気持ちに変わりない」

草刈り…「語り部」役も

海辺から続く坂を上り切ると日本人抑留者の墓地が見えてくる。近くに住むオリガ・ショーブリナさん㈹が枯れ枝を拾っていた。会社を退職し、年金生活を送る。

「墓地の掃除を始めたのは祖母でした。私もそれに倣って毎日来ています」

ナホトカはシベリア抑留の終着地。強制労働で精根尽きた元兵士はこの港町の収容所に集められた。彼らは帰郷できるか不安に駆られながら、ソ連を賛美する歌を歌ったり、壁新聞を作ったり。乗船前に命が尽きる者も多かった。海を望む丘には墓が造られた。

「祖母は勤労を貫ぶソ連人で『なすべき務め』があると働きたがりました。墓があるなら世話をしなきゃ、と思ったようです」。祖母エレーナ・エフィモブナさんは、抑留という記憶の風化にあらがうように一九七〇年に掃除を始めた。

墓地には広葉樹がある。雑草も茂る。落ち葉を取り除き、草を刈った。祖母にとって墓を美しく保つことは「人の務め」だった。

ごくまれに日本人が訪れた。手入れの行き届いた墓は話題になった。祖母は八五年に亡くなり、オリガさんは墓地清掃のバトンを継いだ。墓を放っておくわけにはいかなかったという。

「抑留された人は飢えや病気、不慮の事故で最期を迎えたでしょう。そんな苦しみは二度とあってほしくない。どこの国であろうと、亡き人を弔う気持ちに変わりはありません」

季節の移ろいが、オリガさんに仕事を与えた。草刈りや落ち葉拾い、参道の除雪など。近所の子どもたちには、日本人墓地がある理由を説明している。

日本人墓地も姿を変えてきた。二〇〇四年、日本の厚生労働省が五百二十四柱の遺骨を掘り起こして、日本に持ち帰った。ナホトカ市は骨が回収された後、日本人墓地記念公園を整備した。

遺骨が日本に返っても、オリガさんにとって墓地は特別な存在であり続ける。「戦争は過ちだと伝えていきたい。墓に向き合えば、人は平和の価値を学ぶはずです」。祖母と通ったこの五十年の歳月、その思いを忘れたことはない。

㊤日本人墓地に立つ生前の祖母エレーナさんと若き日のオリガさん㈹＝オリガさん提供
㊦ナホトカで６月、日本人墓地を清掃しているオリガさん＝小柳悠志撮影

シベリア抑留

ソ連は第２次大戦終結直前の１９４５年８月９日、対日参戦して旧満州（中国東北部）や朝鮮半島、南樺太（サハリン）の日本軍将兵ら60万人以上をソ連領内やモンゴルの収容所に連行、鉄道建設や鉱山などの強制労働に従事させた。飢餓や寒さ、病気で６万人超が命を落とし、生き残った抑留者の多数はナホトカ港から日本に帰った。

93年、ロシアのエリツィン大統領（当時）は、シベリア抑留について「非人間的な行為だった」として日本側に謝罪している。ナホトカは戦後、日本とソ連（ロシア）をつなぐ港となり、福井県敦賀市、京都府舞鶴市、北海道小樽市と姉妹都市関係を結んでいる。

ナホトカの収容所で帰国を待つ日本人抑留者たち＝モスクワのグラーク史博物館提供

台湾の人権問題で闘った日本人たちがいた！

大類 善啓

毎朝、自宅で購読している新聞や事務所で取っている新聞に目を通しているが、詳細に読んでいたら、それこそ時間が取られてしまう。私が畏敬する 90 歳を超える T さんは、テレビも見ず、新聞は読まず、ニュースはインターネットでチェックするぐらいだ。それでも社会に対する鋭い発言は衰えを知らず、「大類さん、新聞もテレビもないと、読書がはかどるよ」と言う。確かにそうだろうな、と思いつつ、まだそこまで私は行っていない。まだまだ新聞もテレビも時に頭脳に刺激的なニュースを提供してくれている。

さて、朝日新聞の 10 月 18 日付夕刊の第一面を見て驚いた。台湾の政治犯を救う活動を支えた中に、「街の日本人」がいたという記事が全面に大きく掲載されていたのだ。そして、すぐにリードの短い文章を読み、その記事を書いた古谷浩一さんの名前を見て、また驚いた。旧知の人なのだ。

台湾はかつて戒厳令下だった！

まず、記事になった台湾について記しておこう。

かつての台湾は、日本の敗戦後の国共内戦で中国共産党に敗れた蒋介石が台湾に逃亡して独裁的に支配し、戒厳令を敷いて人権が抑圧され、多くの台湾の人たちが政治犯として収容されていた。しかし、その実情は海外にもなかなか知られずにいた。

古谷さんが書かれた記事は、かつてのそのような過酷な状況を海外に知らせ、政治犯を救う活動に日本人がいたという内容である。

その記事は古谷さんの許可を得て縮小して転載（P94）したのでお読みいただきたい。

この記事の主人公は、台湾の政治犯の実情を外国に知らせなければいけないと、秘かに活動した人、当時台湾に留学していた三宅清子さんという日本女性である。三宅さんは、台湾の政治犯をなんとか外国に知らせてほしいという手紙と政治犯の名前、罪名などを記したメモをある台湾人から託され、命を懸けて日本に伝えたのです。そして 1977 年 7 月、東京で「台湾の政治犯を救う会」が結成された。

しかしその活動は、日本の大手メディアは一切報道しなかった。何故か。当時は中国大陸が混乱の「文化大革命」の時代を終えて、改革開放政策に向かう直前の時代である。新たな中国の時代を歓迎する雰囲気は新聞テレビを覆い。メディアは中国大陸の動向を常に報道したが、その一方、台湾の活動をほとんど報道することはなかったのだ。

また文化人なども中国政府に遠慮してか、台湾の人権問題などに関わろうとはしなかった。一方、右派の政治家などは台湾の蒋介石政権の反共政策などを支持していて、台湾の獄中にいる政治犯などは眼中になかった、いや存在することさえ知らず、仮に知ったとしても何もすることはなかっただろう。そして「人権問題」に敏感なインテリからも無視されていたのが実情なのである。

「人類愛善新聞」の連載レポート

そのような時代、厳密に言えば、1976 年ごろからか、私は出口なお、出口王仁三郎が率

いた大本（教）にいたく関心を持ち、大本の人たちと知り合い、京都府の亀岡市にある大本の外郭団体である人類愛善会が発行する「人類愛善新聞」（月刊紙）から依頼されて毎月原稿を送るようになった。1977 年頃である。

この「人類愛善新聞」はかつて鶴見俊輔が「今、一番面白い新聞だ」と言っていた時期から時間は経っていたが、それでもまだまだマスメディアに報道されていない記事があったのではないか。私も、大手メディアは報道しないが、注目すべき活動をしている人たちにスポットを当て、紹介する記事を書いた。

その一つが「台湾の政治犯を救う会」だった。この会に参加していたのは、今は亡き片岡敏洋、そして今やアナキズム研究家でもある手塚登士雄さんらエスペランティストたちがいて私も親しくしていたのだ。

当時の「人類愛善新聞」はブランケット版（大手の新聞の大きさ）であり月刊である。原稿は、七段組みで「日本の世論はなぜ黙殺するのか」という見出しもついて、「救う会」の活動は 1997 年 9 月号に掲載された（P95 参照）。ちなみに現在、この新聞は発行されていないという。

「初めてこんな大きな記事になった！」

この記事を見た「救う会」の仲間たちは、マスコミで報道されることも全くない中で、「人類愛善新聞」が「救う会」の活動を大きく取り上げて記事になったのはメディアでは初めてだ、ぜひこの記事を大量にコピーして、新橋駅前などの繁華街で行き交う人々に配布して世間にアピールしようと思った。

私はこの記事の中で、このように書いたところがあった。

＜その知られざる台湾の人権状況を多くの人々に知ってもらおうと、米人ジャーナリスト、リン・A・マイルス氏や国籍確認訴訟で闘っている台湾人、林景明氏を支援する人たちによってこの七月二十四日「台湾の政治犯を救う会」が結成された＞

実は林景明氏は熱烈な台湾独立運動家でもあった。当時私は、「台湾独立」の政治的な意味合いを巡る微妙な政治状況に疎かったこともあり、林景明氏が「国籍訴訟」で闘っていて、それなりに社会的に知名度があることもあり、彼の名前を記したのである。しかし、「救う会」の事務局は、「救う会」が「台湾独立を支持している」と見られることはまずい、より大衆的に「救う会」の活動が支持されなくなる恐れがあると感じて、駅頭でビラ巻きすることを取り止めた。

私自身、「救う会」で活動していた人たちと知り合いではあったが、とりわけ「救う会」の活動家とは言えない。いわば「救う会」のシンパ、いわゆる支持者程度と言えるだろう。しかし 10 月 18 日付け朝日新聞の記事の中に、当時の＜「救う会」のメンバーたち＞というキャプション付きの写真が掲載されており、20 人ほど写っている集合写真の後列に私も写っている。

実はこの記事が出るひと月ほど前に、リンダという女性から英文のメールが来て、「この集合写真に貴方は写っていますか」と言う問い合わせがあった。

台湾政府「国家人権博物館」を創る

前述したが、台湾は 1949 年から 1987 年まで戒厳令下にあり、会話や手紙の中でさえ、

政府批判は「反逆行為」とみなされ、中国共産党のスパイとして逮捕され、過酷な刑罰を受け、数万人が政治犯として捕まり、一千人以上が処刑された。その後、民主化になり、台湾政府は人権がなおざりにされていた過去の歴史をしっかりと確認しておこうと、「台北二二八紀念館」などを創設し、また 2018 年 5 月に国家人権博物館が創設され、その流れで、この 9 月 15 日から 11 月 15 日まで、東京の虎ノ門の台北駐日経済文化代表処・台湾文化センターで、＜台湾国家人権博物館特別展―私たちのくらしと人権＞という展示会が開催されたのだ。それもあってリンダさんというアメリカ女性のメールや朝日の記事が掲載される契機になったのだ。

記事の中に、こういう箇所がある。

＜三宅さんらは最近のミャンマーや香港などでの動きに心を痛めている。中心メンバーのひとりで当時は会社員だった桐越大道さん（71）は「人権は守らなければいけないという思いでやっていた。問題意識の根はいまも同じだ。いまの日本社会は大丈夫か。若い人にはちゃんと考えて欲しいと思う」と話す＞

私は、桐越さんとも今でも交流があるが、当時のみんなはマスメディアがまるで注目されない中でも黙々と活動をしていたのだった。

日本は一見、民主的な様相を呈しているが、時にヘイトスピーチなどが起こり、極めて少ない女性議員の選出など、まだまだ民主社会と言っても限界がある。いわゆる LGBT 問題など少数派（マイノリティ）への配慮は未だ十分とは言えないだろう。

今回の衆議院選挙の結果を見ても、日本の未来は楽観できないと私は思っている。

方正日本人公墓を取材した古谷浩一さん

最後に記事を書いた古谷さんとの出会いを記しておこう。

2007 年、法務大臣を退いた南野千恵子さんは、その年の 9 月末、中国のハルピンで開催された「日中国交 35 周年記念交流の夕べ」の日本の代表団団長として出席する折り、「ぜひ方正日本人公墓を参拝したい」ということになり、私は現役の国会議員が参拝することは初めてであり、ぜひ新聞で取り上げてほしいと、親しくお付き合いをしていた加藤千洋（元・朝日新聞中国総局長、元・同志社大学大学院教授）さんに電話を入れると、当時、瀋陽支局長だった古谷さんに知らせてくれ、私はハルピン空港で古谷さんと落ち合い、南野さんより一足早く、二人で方正に向かった仲だった。

そしてこの台湾の記事の後に古谷さんにメールを入れたら彼は、現在国際報道部の次長で、次期瀋陽支局長になる金順姫さんを同道して私の事務所に来てくれ、久しぶりに歓談した。今、古谷さんは中国総局長などを経て論説委員になっている。

ちなみに、瀋陽に支局があるのは朝日新聞と読売新聞だけである。新たに瀋陽支局長に赴任される方は、赴任前に私を訪ねてくれる。本会がそれなりに認知されてきた証左だと思い、喜んでいるが、まだまだ「方正日本人公墓」の世間での認知度は高くない。時に大メディアにいる人でも知らない人がいる。我々の力の限界もあり、また中国側の事情、方正の事情も微妙にあるだろうとは思っているが。

台湾の民主化 支えた街の日本人

1979年12月10日、台湾南部の高雄で警官隊と衝突するデモ隊＝AP。後に「美麗島事件」と呼ばれた

いまや民主主義のお手本のように言われることもある台湾だが、半世紀前には反体制と見なされた多くの市民が政治犯として捕らわれ、処刑された暗黒の時代があった。非情な独裁政権下、市井の日本人たちがひそかに人権支援をしていた。香港やミャンマーなどアジアで自由や人権が脅かされるいま、そうしたかつての日本人の行動が改めて注目されている。（古谷浩一）

半世紀前―― 日本語教師はひそかに動き続けた

1971年の1月ごろだった。登山をきっかけに60年代末から台湾で日本語教師などをして暮らしていた三宅清子さんは、知人の台湾人から新聞紙でくるまれた包みを預かった。

知人は何も言わなかったが、1週間ほど後に逮捕されてしまう。三宅さんが包みを開けると、なかから出てきたのは政治犯の名前が並んだ手書きの表だった。

「（知人から）政治犯のことは聞いていましたが、まさかリストが入っているとは思いませんでした。全部で230人ぐらい。とにかくこの現実を台湾の外に知らせなければいけないと思いました」と三宅さんは振り返る。

後に分かったことだが、リストは台北市郊外の「景美軍法処看守所」という軍の拘置所で、医師だった政治犯がカルテの形でひそかに作成したものだった。それを洗濯係の政治犯がこっそり隠して外に持ち出していた。

名前のほか、住所や家族構成、罪状などが書かれていた。当局に発覚すれば命も危うい。地中に埋められて隠されていたが、知人は自らの逮捕が近いと思い、三宅さんに託したらしい。

三宅さんは一人でリストの内容を書き写し、知り合いの外交官を通じて東京の関係先に送った。一方で、原本を元に政治犯の家族と接触をとり始めた。

「事実を出来るだけ調査して海外に知らしめ、国際的な圧力で国民党の人権弾圧がやりにくくするしかないと考えました」

なぜ日本人女性が一人で、と聞かれれば、「私は外の世界とつながっている、自分しか出来ないと考えました」。情報は海外の人権団体を通じて公表され、台湾への国際的な人権批判につながっていった。

政治犯の多くは獄中の劣悪な環境で病気になり、拷問の後遺症にも苦しんでいた。釈放後も職探しは難しく、生活は困窮した。三宅さんはそうした人や家族に日本からの医薬品やカンパのお金を運んだ。当局に分からないよう買い物かごを持ち、市場に行くふりをして政治犯の家を訪ねたという。日本の支援者との連絡には簡単な暗号も使った。

ただ、やがてその動きは密告などで当局の知るところとなる。夜中に突然、軍服の男たちが自宅にきて、黙って懐中電灯で部屋を照らして帰っていった。

「何も言わないんです。本当に怖かった」。外国人といえども身に危険が迫ってきていることが分かった。悩んだ末、三宅さんは76年に帰国を決断した。

「台湾の政治犯を救う会」の元メンバーら。前列左から2人目が三宅清子さん＝2007年10月、東京・池袋で撮影、手塚登士雄さん提供

身の危険迫り帰国――「救う会」で支援を続けた

台湾の人権問題を伝えるために日本の支援者がつくった当時のニュースレター＝9月15日、東京・虎ノ門

数万人が政治犯として捕まり、1千人以上が処刑されたとされる。2018年には「国家人権博物館」が設立され、三宅さんらの活動も紹介されるようになっている。

台湾の人権弾圧

蔣介石、蔣経国親子の国民党政権は49年から87年まで戒厳令を敷き、自由な言論を厳しく弾圧した。

77年、三宅さんの帰国を受け、市民たちによる「台湾の政治犯を救う会」（以下、救う会）が日本で発足した。

ただ、日本の政治の動きは冷ややかだった。

当時の国際情勢を見れば、東西冷戦のさなか。台湾は中国共産党政権に対峙する自由（主義）陣営にあった。国民党政権を人権問題で批判すれば、共産主義陣営を利することになる。米政府は蔣介石の過酷な政治弾圧を事実上黙認。日本の政府もこれに追随していたとみられる。

政府・与党だけでなく、野党の社会党やその系列の市民団体なども支援には慎重だった。

台湾当局への抗議文の送付、支援集会の開催、ニュースレターや機関紙の発行……。活動を担ったのは三宅さんに代表される市井の人たちばかりだった。

初代事務局長の可児裕二さん（72）は当時は日本ユネスコ協会連盟の職員。「政治的な目的ではなく、純粋に人権、人道を求める人が動くしかなかった。でも、だからこそ、いま振り返っても意味のある活動だったといえるのでしょう」

88年に就任した李登輝総統の時代に台湾の民主化が進み、救う会は94年、最後の政治犯が釈放されたのを受けて解散した。

三宅さんらは最近のミャンマーや香港などでの動きに心を痛めている。中心メンバーのひとりで当時は会社員だった桐越大道さん（71）は「人権を守らなければいけないという思いでやっていた。問題意識の根はいまも同じだ。いまの日本社会は大丈夫か。若い人にはちゃんと考えて欲しいと思う」と話す。

独裁政権時代の台湾の歴史に詳しい大妻女子大の赤松美和子准教授は「日本の一般の市民たちがこれだけ動いていたということに驚きます。いまの時代にも伝えていくべき話なのでは」と話している。

特別展で流されている元政治犯の証言を伝えるビデオ＝9月15日、東京・虎ノ門

活動展 来月まで

三宅さんや救う会の活動などを紹介する「台湾国家人権博物館特別展 私たちのくらしと人権」が、台北駐日経済文化代表処の台湾文化センター（東京・虎ノ門）で開催中だ。

暗い歴史を経て、いまの台湾は人権を重視していると強調しようとの企画。9月の開幕式典で、民主運動のリーダーとして自ら投獄された経験もある同代表処の謝長廷代表は訴えた。

「台湾の民主化の道のりは長かった。いろいろな闘争や運動を通して初めて勝ち取ったものだ。人権や自由は天から降ってくるものではない」

11月15日まで。台湾の人権問題の歴史をめぐる資料が展示されている。

人類愛善新聞（1977年9月号）より転載

知らされざる人権弾圧の歴史

―アムネスティ台湾レポート―

やぶにらみルポ

日本の世論はなぜ黙殺するか？

八月の暑い夏の季節を迎えるたびに「ヒロシマ」と「ナガサキ」が人々に思い出され、戦争犠牲者への追憶がほんの束の間、人々の頭をよぎる。尨大な無名の人々の生命と引きかえにもたらされた今日の日本の〝繁栄〟の中で、しかし一体どれほどの人々がかつての被占領国の人々に思いを寄せたであろうか。日本の敗戦が、多くのアジアの国々にとっては「解放」であったという歴史的事実が、今や単なる「歴史の一コマ」として葬りさられ、いや、葬りさられることに消極的であれ荷担しているという事態があちこちに垣間見られる。

○

台湾―日本が半世紀というもっとも長きにわたって支配したこの国は、日本の敗戦と同時に解放されたのも束の間、その年の十月には国民政府軍が進駐。台湾の民衆はこれを全面的に歓迎、大陸への復帰を「光復」と呼んでその喜びを表わしたという。しかし〝解放軍〟は新しい略奪者だった。民衆の大規模な反乱も徹底的に弾圧され、「大陸反攻」を名目に、全島は戒厳令下におかれ、今なおそれは解かれていない。

二十八年間にわたる戒厳令下でも、一時、アジアの緊張緩和によって緩和したかにみえた人権の抑圧状況が昨年から急速に悪化、民族主義者や民主回復運動家の逮捕が相次いでいるという。

アムネスティ・インターナショナル（本部・ロンドン）の「台湾レポート」によると、少なくとも八千人以上の政治犯が台湾に収容されているといわれる。ところが、この人権状況がほとんど日本のマスコミには報じられないのである。

アムネスティ日本支部副理事長・川久保公夫氏（大阪市立大学教授）のレポート「台湾『スパイ団事件』の謎」（『世界政経』七七年四月号）によると、台湾当局は昨年七月初めから、政府批判派の有力な中心人物の国会議員、黄順興氏の次女黄姓娜さん、そして黄氏に近いといわれている中堅商工人など三～四十名を秘密裡に次々と逮捕。狙いは黄順興氏にあるという。黄氏は日本政府に対する台湾人元日本兵の補償要求を立法院で政府に強く迫り、またその運動の代表者として一昨年には時の三木総理に公開要求書を提出したという人でもある。

他にも、黄氏の前の選挙責任者陳明忠氏、雑誌『台湾政論』の社長、編集長らも政府の監視下に入ったという。とくに陳明忠氏は死刑の判決をうけたという情報が入り、アメリカではニューヨーク、ワシントン、シカゴなど各地で、アムネスティ・アメリカ支部などの抗議行動が展開されたり、ハンフリーやフレーザーなどの有力議員も、行動を起したということである。

韓国の人権問題にはそれなりのスペースをさくマス・ジャーナリズムも、こと台湾になると全く黙殺に近いという状況はどうみても健康的とはいえない。「韓国のおそるべき人権状況について知る人は多い。しかしそこでさえ被告は公開の法廷で裁判を受け、もし取調べの際拷問された場合には、少くともそれを家族、友人、弁護士や報道関係者の前で陳述する機会がある。何千という政治犯がいるといわれる台湾ではそれさえないのだ」（川久保氏のレポート）という。その知られざる台湾の人権状況を多くの人々に知ってもらおうと、米人ジャーナリスト、リン・A・マイルス氏や国籍確認訴訟で闘っている台湾人、林景明氏を支援する人たちによってこの七月二十四日「台湾の政治犯を救う会」が結成された。

「台湾は一見、穏やかです。日本人の観光客も多いし、日本企業も活発に動いている。しかし、それが戒厳令で守られている異常さ。一千六百万人の台湾人の中に、大陸からきた二百万人が支配するという構造的に異常」（会の事務局長・可児裕二氏）な台湾は、日中国交回復によって容赦なく日本から切り棄てられた。マスコミも大陸の中国に気兼ねして、台湾の人権問題について報道せず、進歩的と称する知識人も、一定の〝左翼性〟（中国との関係）のために台湾問題を逃げ、保守派を自認する人々は、普通国・台湾政権とのからみで台湾人の弾圧には沈黙という台湾の人権状況は、いわば右からも左からも徹底的に無視されようとしている。

台湾にいる日本のあるキリスト教関係者は匿名のレポートで、敗戦日本が自由な国となり、光復されたはずの台湾が抑圧下に置かれているのを見て、身の置きどころがないすまない気持を持ったと述べ「沈黙していては隣人がどんどん遠い人になってしまう危惧を感じてなりません」と訴えた。（〝七十六年度〟月刊『福音と世界』より）

今、心ある人々が立ち上がった台湾の人権抑圧に対する行動は、日本人の人権闘争に、一つの試金石を課しているといっていいだろう。

台湾の政治犯を救う会
東京都新宿区須賀町四アジアマンション205号TEL三五七―一九二二
（ルポライター・大類善啓）

台湾の政治犯救援を訴える市民集会

思っています。

今、語らなければなかったことになる

上野　澤地さん自身の心境は敗戦からしばらく、極限状態に陥った人が解離現象を起こすような感じだった、と書かれています。それはどのくらい続きましたか？

澤地　帰国してからも心を閉ざして、何事にも無感動で生きていました。神風が吹くと思っていた自分が間違いだったとはわかったけれど、それに代わるものがなかなか見つからなかったのね。お勤めを始めたのが、49年。その頃、「あぁ、私はなんと長い間、闇の中にいたのか」と思いました。

上野　その後、編集者を経て、ノンフィクション作家になられた。

澤地　物書きになり、「反戦」という軸がはっきりしました。

上野　澤地さんはミッドウェー海戦や二・二六事件について、あれだけ詳細に調べて作品を書いてこられた。それなのに、なぜ満州からの引き揚げについては作品になさらなかったのかが不思議でした。

澤地　たかだか1年の経験だから。

上野　経験なさらないことでも、徹底的にお調べになって書いておられるじゃないですか。

澤地　自分の生きてきた道は、たいしたことではないと思っているので、調べる気にならないの。

上野　ちょ、ちょっと、やめてくださいよ。ものすごい極限状態を経験してこられたんですよ。はぐらかさないでください。（笑）

澤地　上野さんは自分のこと、書ける？　学生時代や親のことを。

上野　あっ、反撃された（笑）。確かに私も、学生運動のことは聞かれても答えないし、書いていません。私のなかで、まだ生々しくてかたがついていないからです。

澤地　でしょう？　誰でも触れたくないことがあるのよ。でも歳を重ね、女学校の同級生も9割は亡くなった。今言わなくては、「なかったこと」になると思い、弟の孫が14歳になったのを機に『14歳』を書いたんです。

上野　戦争体験については、自分の子どもには語れないけれど、孫には言いやすいとよく聞きます。

澤地　そうだと思います。

上野　それにしても、決して少数派とはいえないこの経験が、なぜ戦後日本で封殺されたのか。それは日本社会にとって、とくに権力にとっては、忘れたい、封印したい過去だった。そして個人にとっても、そうだった。その600万人の記憶を封印して、日本が戦後、変わったかというと――。

澤地　全然、変わらない。

上野　情けないです。あの戦争に関して、敗戦後、誰も責任を取らなかったですし。今回の東京オリンピック・パラリンピックに関しても、日本の無責任体質が出ていると感じます。

澤地　私は20代の頃、日本はもっと明るい未来を歩むと思っていました。もしそうでない道に行こうとしたら、恐怖で震えるような心を抱えつつも、言うべきことは言おうと自分を仕向けてきた。だけど、いつも私は負けるほうにいた気がします。75年という時間は長い。そしてその間、日本はじわじわと右へ寄ってきましたね。

上野　澤地さんたちに続く世代の私たちが、ふがいなかったんです。だから、責任を感じております。

澤地　上野さん、「責任を感じる」で終わらせてもらったら困るのよ。あなたは、まだ若いんだから！

上野　そ、そんな、若いって……。私、もう70代ですよ。

澤地　いえいえ、まだ若いわよ。だから、これから頑張ってください！

動して駅の外に出たら、きれいな浴衣を着た女性が歩いていたので、びっくりしました。

上野　なぜ、びっくりしたんですか？

澤地　だって自分は1年近くお風呂も入らず、ボロボロですから。ああ日常が変わりなくあるのだと。

上野　もしかして防府は、空襲にあっていない土地でしたか？

澤地　ほとんどなかったようです。

上野　京都も空襲にあっていませんが、戦争の実感が薄い土地は、引揚者に対してものすごく冷淡だったと聞いています。

澤地 政治が困ったら、平気で民を捨てる国だと私は思っています

澤地　その感じ、よくわかります。

上野　その後、生まれ故郷の東京に戻ってこられたわけですね。

澤地　47年の夏に、親戚を頼って原宿に戻ってきたら、まだ一面の焼け野原でした。原宿から富士山が、手が届くように見えて。焼けトタンの屋根をかけたバラック暮らしで、屋根の穴から星が見えました。

上野　国内では戦時中より、むしろ敗戦後のほうが食糧事情が悪くなったそうですね。当時、国内人口は約7200万人で、引揚者は600万超。人口がそれだけ増えたから、食糧難がひどくなった、と。

澤地　だから帰ってきてもらいたくなかったんですよ。実際、引揚者は差別の対象でした。

上野　長野県の満蒙開拓平和記念館に行って初めて知ったのですが、敗戦直後に「満鮮に土着する者は日本国籍を離るるも支障なきものとす」つまり、許可すると書いた告知文がありました。支障ないと言いながら要は帰ってくるな、と。つまり、「おまえたちを捨てる」という宣言でしょう。驚愕しました。

澤地　私も、物書きになってから、これは「棄民」だったとはっきり認識しました。

上野　満州に送り出す時も、いわば棄民だったわけでしょう。

澤地　ですから、日本という国を考える時、いよいよ政治が困ったら、平気で民を捨てる国だと私は

アガワ流
生きるピント
阿川佐和子

家族、恋愛、仕事、生活の不安・悩みに、アガワが軽〜く答えます！

Photo・枦木 功

アガワ流アドバイス
（本文より）

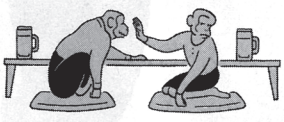
相談　仕事が忙し過ぎてヘトヘト
短い仕事から片付ける。愚痴る。そして寝る

相談　定年退職した矢先、妻が認知症に
奥さんとの「いま」を大切にしましょう

相談　高校生の娘が話してくれない
娘が無視できないくらい恐い父親に！

相談　フラれるのが怖い
「恥ずかしい」を乗り越えてこそ愛は手に入る！

相談　母が亡くなり、父が「死にたい」と嘆く
家事をさせて、放っときましょう



画・小幡彩貴

●定価1760円(税込)　電子書籍も発売中

文藝春秋
〒102-8008　東京都千代田区紀尾井町3-23
http://www.bunshun.co.jp

上でお産をした人は、ソ連兵からの性被害とは限らない。私の記憶では、ソ連軍の次に来た中国国民党軍も女狩りをしていました。一時期、中国共産党支配になると治安が安定した。私も外に出て物売りを始めました。

上野　共産党の八路軍は軍規厳格だったというのは、本当ですか？

澤地　私はそう思っている。共産党の軍隊のなかを走っていっても、口笛ひとつ吹かれなかった。敗戦前、日本の軍隊だって、女の子を見かけると口笛吹いてからかったりしていたのによ。

満州での澤地さん一家。昭和17年12月、吉林の写真館にて。左から母、弟、父、久枝（12歳）、妹（写真提供◎澤地さん）

上野——生き残るためソ連軍に女性を差し出した団もある

上野　性被害に関して一番訴えにくいのは、同国人からの被害だと思います。開拓団を例にとれば、集団自決した団もあった一方で、生き残るためソ連軍に女性を差し出した団もある。開拓団に残っていた男性は年配の人たちでしたから、団の長老たちが女性を選別することもありました。

澤地　私は知らないの。「出征兵士の妻たちは、守らなくてはいけない」という考え方。未婚の若い女性に、「どうぞここは死んだと思って行ってくれ」って、なんですか。無恥の集団の圧力は、本当におそろしい。

上野　共同体内の力関係もあるから、イヤとはいえない。それらのことを封印して帰国したけれど、地元に戻れば、誰がどんな目にあったかはみんなが知っている。開拓団は同郷の人たちが集団で移住して、敗戦後は郷里へ戻ったのですから。生きて帰った弟から「姉ちゃんは嫁にいけん身体だから」と言われた女性もいます。

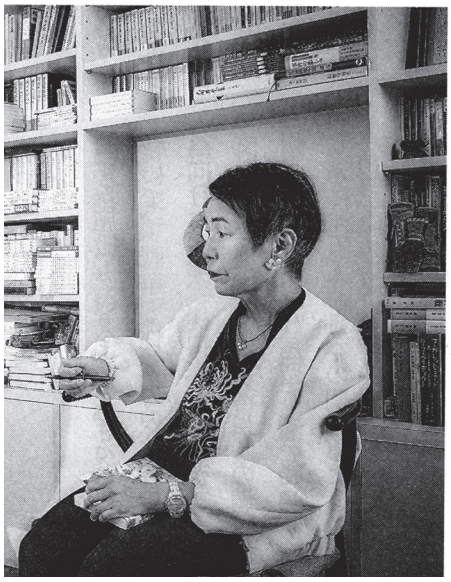
澤地　それに関して、私は今まで一切、書いてこなかった。誰が連れていかれたか、みんなわかっています。身近な人のなかにもいたと思います。口をつぐむしかなかった。引き揚げて、家族単位の暮らしになって、救われています。

上野　70年経って初めて、岐阜県から黒川開拓団として渡った佐藤ハルエさんが、「私は性被害者だ」と証言された。２０１７年にＮＨＫのＥＴＶ特集『告白　満蒙開拓団の女たち』という番組で放映され、大きな衝撃を与えました。私は佐藤さんにもお会いしましたが、帰国したら村から排除されたそうです。ずっと言わずにきたけれど、「あったことは、ちゃんと言っておかなくては」と覚悟を決めたと語っておられました。被害にあったうえに、長い戦後のなかで、自分たちは被害者だと名乗れない。むしろ排除や差別の対象になる社会を、私たちが作ってきたわけですね。日本の戦後を考えると、本当にむなしい気持ちになります。

澤地　ほんと、そうです。

上野　91年に初めて慰安婦だったことを証言した金学順（キムハクスン）さんも、どれだけ勇気が必要だったか。韓国社会でも差別されたわけですから。

澤地　慰安婦も、告白したのは主に結婚しなかった方。家族がいると、なかなか言えない。その気持ちはわかります。



15歳の夏、着の身着のまま帰った日本で

上野　澤地さん、日本に帰国した時の第一印象は？

澤地　博多から山口県の防府に移

さわち ひさえ　1930年東京生まれ。幼少期に旧満州（現・中国東北部）に渡り、終戦後に引き揚げる。49年中央公論社に入社し、働きながら早稲田大学で学ぶ。『婦人公論』編集部勤務ののちに退社。72年『妻たちの二・二六事件』以降、執筆活動へ。『滄海（うみ）よ眠れ』『記録 ミッドウェー海戦』で菊池寛賞を受賞。『密約』『14歳〈フォーティーン〉満州開拓村からの帰還』など著書多数

「根こそぎ動員」で、男たちはみんな召集されたから。そこで男手の代わりに、私たちが農場で働いたのです。

上野　都市部とは、かなり暮らしぶりが違ったんじゃないですか？

澤地　想像したこともない世界でした。泥の家で、水道も電気もないし、冬は零下30度近くになる土地なのに畳もない。私はあっという間に、身体も頭もシラミだらけ。ただ、畑は広大なのよ。

上野　開拓団で満州に渡った人たちは、行ったらすでに開墾された土地があるし、家もあった。それはそれまで暮らしていた中国人を強制退去させ、タダ同然のお金で買い上げたから。そして元からいた中国人を、農業労働者として使ったりしました。

澤地　日本から行ったのは、農家の次男坊、三男坊が多かったでしょう。土地もあるし嬉しかったんだと思う。だから、日本から顔も見たことのない花嫁を迎えたのね。

上野　当時、満州花嫁の募集があって、写真を見て応募する女性はかなりいたようです。彼女たちの頭の中にあったのは、新天地の「姑のいない暮らし」という夢でした。

澤地　舅姑がおらず、独立して生きている男の元に嫁に行けるのだから、憧れた女性もいたでしょう。でも私たちが吉林に戻って間もなく、そこにソ連軍が攻め込んできた。私が手伝った家族も、生きられなかったと思います。

占領下の女たちが直面した運命

上野　澤地さんは、引き揚げまで1年くらいかかってますよね。最初は社宅を転々とし、屋根のない無蓋貨車で南下して、港近くの収容所に入れられた。その間、飢えも経験しておられる。

澤地　畳1畳に1家族、みたいな生活ね。父は発疹チフスのあと黄疸で寝込むし、まわりではどんどん人が亡くなっていきました。

上野　ようやく引揚船に乗ったものの、お腹が大きかったり、赤ん坊を抱いた女性が入水自殺するケースも多かったようですね。また、日本に着くと女性は性病検査と妊娠検査をされ、妊娠していると堕胎する施設もありました。それについて、『戦争と性暴力の比較史へ向けて』で、樋口恵子さんが論文を書いておられます。当時の満州、中国、朝鮮に居留していた日本人は240万人。日本の関東軍による保護はなく、開拓民をはじめ多くの日本人が国家に見捨てられました。その中でソ連占領軍などによる性暴力があった。日本人の集団が身を守るためにソ連兵へ日本人女性を差し出したことによる性被害も相次いだ。そのため帰国後の女性たちは検査を受けた、と。

澤地　母たちも、博多港に着いた日、別室に連れて行かれました。私は15歳なので、免れましたが。ただね、これは言っておきたい。満州に最初に入ってきたソ連軍は、囚人兵だと言われています。でも2ヵ月ほどで正規軍に代わり、軍規も厳しくなった。そして46年1月頃には撤退している。つまりソ連軍による性被害は、最初に進駐してきた2ヵ月程度じゃないでしょうか。ずっとあったわけじゃないと思います。だから計算すると、46年4月以降に動き出した引揚船に乗っていて妊娠していた人や船

澤地 ― 1人がサーベルを抜いて切っ先を私の胸に向けたの

うえの ちづこ　1948年富山県生まれ。東京大学名誉教授、認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク（WAN）理事長。日本の女性学、ジェンダー研究のパイオニアとして活躍。高齢者の介護とケアもテーマとしている。『おひとりさまの老後』『在宅ひとり死のススメ』ほか著書多数。近著に『人生のやめどき』（樋口恵子氏との共著）、『戦争と性暴力の比較史へ向けて』（蘭信三、平井和子両氏との共編）

澤地　当時、暴徒に襲われた一家や夫が召集された奥さんなど、3家族9人で一緒に暮らしていました。扉を板で打ちつけて用心していたけれど、誰かがゴミを出しに行こうと裏の扉を開けたとたん、2人の若いソ連軍の将校が靴のまま入ってきて、1人がサーベルを抜いて切っ先を私の胸に向けたの。すごい力で引き寄せられたので、必死にのけぞって抵抗したら、同居していた男性が片言のロシア語で何か言って、2人をいったん外に連れていった。私は急いで玄関の横の物置に隠れたけれど、1人が戻ってきて物置の扉を開けようとして——。でも母が、物置の扉を手でおさえて開けさせまいと抵抗したの。扉の隙間から、母の日焼けした手と相手の白い手がもみ合っているのを見ていた。

上野　わぁ、リアル！

澤地　物置はモノがいっぱい詰まっていて、大人は入れない。そのうち諦めて出ていきました。

上野　お母様がターゲットになる可能性はなかったんですか。まだお若かったでしょう？

澤地　37です。家には母以外にも女の人がいたし、後になって私もおかしいと思ったの。うちの情報が伝わっていたのかな、と——。

上野　少女がいるということで、狙い撃ちされた。

澤地　その可能性はありますね。その日以来、私の思考は止まってしまい、数ヵ月間一歩も外に出ず、息をひそめて生きていました。

上野 30年近く経って、フラッシュバックが起きたとか

上野　それから30年近く経って、フラッシュバックが起きたとか。

澤地　向田邦子さんと海外旅行に行った際、モスクワの空港で警備の兵を見たとたん体が凍りついたみたいになった。ずっと蓋をしてきたけれど、私の中には記憶が刻み込まれていたのだと、知りました。もし、あの時被害にあっていたら、私はどういう人生を生きたのだろうと思います。

吉林での日々と開拓団の村の現実

上野　敗戦前の吉林での生活について少し伺ってもいいですか？

澤地　どうぞ。

上野　澤地さんが通っておられた吉林高等女学校には、中国人の生徒もいたそうですね。当時、民族的な差別があると感じてました？

澤地　同じクラスに、満州国高官の一族の、大金持ちのお嬢さんがいました。配給が厳しくなってもみんなは白いご飯に大豆がちょっと入ったものを食べていたのに、彼女のお弁当は、粉を練って焼いたようなものだった。

上野　中国の女性学研究者、李小江さんから聞いたのですが、中国人はお米を食べると「経済犯」として摘発されたそうです。つまり、食べ物で差別を「見える化」していた。当時を知っている方に聞き取りをすると、皆さん、食べ物の恨みを話すとおっしゃいました。

澤地　満州国は「五族協和」というスローガンで建国されたのに、配給では明らかに差別されていた。それはもう、すごい屈辱だったと思うわ。

上野　学徒動員で、開拓団にも行っておられますね。

澤地　45年の6月、水曲柳（すいきょくりゅう）開拓団に行きました。長野県から入植した村です。約1ヵ月の間、5軒の家で手伝ったけれど、村には働き盛りの男の人が1人もいない。

たる若い研究者までを束ねて一冊の本にまとめたものですが、その過程で、この歳になるまで自分がいかに戦時下の性暴力、とくに満州からの引き揚げ時のことに無知蒙昧であったかを恥じ、中国東北部の旅にも行ってきました。澤地さんは旧満州の吉林で、敗戦の日をむかえられた。その日、大泣きしたと書いておられますが、どんなお気持ちだったんですか？

澤地　当時私は女学校の3年生で、1年近く授業はなく、学徒動員の日々。開拓団（満州事変後、満州・内蒙古地区に移住した日本人の農業移民）の村に住み込みで動員され、帰ってからは吉林陸軍病院の看護婦見習いとして訓練を受けていました。8月15日の朝、「この隊は解散するから正午に吉林神社に集まれ」と言われて。私や友人たちは教官だった若い衛生兵に熱を上げていたから、この人ともう会えないと思って泣いたんです。

上野　あら、まっ。乙女！　じゃあ、日本が負けたと知って大泣きしたわけじゃないんですね。

澤地　だってその時はまだ、負けたなんて知らされていないもの。クラスメイトと2人で憧れの君を陸軍病院まで送っていく途中、繁華街を歩いていたら、中国人の子供がパッと旗を突きつけてきた。たぶん青天白日満地紅旗（中華民国の国旗）だったんでしょうね。そして「ニホン、マケタ」と言われたの。

上野　じゃあ、家に着く前に敗戦を知ったわけですね。

澤地　その時はわからなかったのよ。家に着いたら、父が静かに「戦争は終わったよ」と。さんざん泣いた後だったので涙は出ず、「あぁ、神風は吹かなかった」と心の底から思いました。その後、各地で中国による暴動が起き、日本人宅から金品を奪っていった。吉林には8月19日にソ連軍が来ました。私は14歳だったけれど、占領下の女の身に何が起こるか、本能的に知っていたのね。お下げ髪を解き、母の裁ちばさみで髪を切りました。

上野　ここからは思い出すのがおつらいかもしれないけれど――澤地さん一家はお父様が働いてらした満鉄の社宅に住んでおられた。敗戦後間もなく、家にソ連兵がやってきたんですよね。

澤地久枝　ノンフィクション作家

『婦人公論』（2021年8月24日号）より転載。
（本頁から96頁へ遡ってお読みください）

対談

昭和20年夏、満州で起きたことを今こそ語ろう

元軍国少女が封印した「終戦」

構成◎篠藤ゆり　撮影◎宮﨑貢司

まもなく8月15日。ノンフィクション作家の澤地久枝さんは、76年前の終戦を満州（現・中国東北部）でむかえた。その後の収容所生活など、引き揚げまでの1年あまりのすさまじい体験は、澤地さんの作家としての原点になっている。社会学者の上野千鶴子さんが、初めて語られる14歳の「終戦」に迫る――

上野千鶴子　社会学者

すべてが変わったあの日、大泣きした理由

上野　澤地さんがご自身の経験を綴られた『14歳〈フォーティーン〉満州開拓村からの帰還』を読み、ぜひお会いしたいと思いました。というのも、あの本に書かれていないことがまだあるのではないか、と思ったからです。

澤地　私はもう、90歳ですから。これだけ長く生きると、記憶の角も取れてきます。

上野　いやいや、澤地さんの記憶力は並外れていますよ。私は先年『戦争と性暴力の比較史へ向けて』という本を編纂しました。年長の世代から戦争体験者の孫世代にあ

方正日本人公墓が私たちに問いかけるものとは・・・

―「方正友好交流の会」へのお誘い―

1945 年の夏、ソ連参戦に続く日本の敗戦は、旧満洲の「開拓団」の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒のなか、飢えと疫病によって多くの人たちがハルピン市郊外の方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人の松田ちゑさんは方正県政府に、「自分たちで埋葬したいので許可してください」とお願いしました。その願いは方正県政府から黒竜江省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、「方正地区日本人公墓」が建立されました。

1963 年、まだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない時期、中国政府は、中国人民同様わが同胞も日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ 5000 人近い人たちが祀られているこの公墓の存在は、未だ多くの人たちに知られておりません。

私たちは、民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって維持管理されている公墓の存在を、多くの人たちに知ってほしい、そして旧満洲における日本国家と日本人の中国への加害と被害を多くの人たち伝えていこう、国家や民族を超えた民衆レベルでの友愛精神を広めていこうと「方正友好交流の会」を設立しました。ぜひ皆さま方のご支援ご協力をいただきたいとお願いする次第です。どうぞよろしくお願いいたします。

個人会費　一口　1,000 円　団体・法人会費　一口　10,000 円

（口数は最低一口、上限はありません）

方正友好交流の会

101-0052　東京都千代田区神田小川町 3-6　日中科学技術文化センター内

電話　03-3295-0411　FAX　03-3295-0400　Email:ohrui@jcst.or.jp

郵送振込口座番号　00130―5－426643　加入者名　方正友好交流の会

HP アドレス　http:/www.houmasa.com/

＜報告＞　　ありがとうございました！

前号の 32 号入稿後、2021 年 4 月 23 日以降にご送付いただいた会費及びカンパされた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。（敬称略、2021 年 11 月 19 日付までの分です）

名取敬和　崎山ひろみ　柳生じゅん子　岡崎雄兒　田村正篤　奥村信子　小倉光雄　原田清治　井出亜夫　小柴玲子　牧野八郎　塚原常次　山口真　大山茂　高橋守男　佐藤守男　貞平浩　野田尚道　伊藤昭　山口榮一　田澤仁　山本武　竹井成範　高田京子　田中正昭　新田百合子　渡辺一枝　阿部則司　江藤昌美　伊藤眞理子　中島紀子　松島赫子　根田春子　清嶋一順　松田信義　松浦周之助　佐藤すみ江　大澤大介　藤後博巳　寺本康俊　藤嶋昭　中島幼八　芹澤昇雄　藤川琢馬　松村静子　赤羽茂乃　皆川純麿　新宅久夫　大野正夫　平沢千恵子　酒井武史　小林淨子　藤井盛　加藤稔　栁澤永一　板橋道史　西嶋拓郎　遠藤滋　服部健治　中井詔太郎　十時哲哉　末広一郎　石井敏夫　長谷川清司　小早川のぞみ　奥本由利子　石橋辰巳　岩間孝夫　東海林次男　師岡武男　亀山英雄　高木昂　岡百合子　初岡昌一郎　水野恵子　篠田欽次　大久保明男　望月信隆　加藤毅　光川澄子　湯川誼　鈴木宏毅　荒川幸二　戸田和歌　篠原淳子　掛谷敏男　大島満吉　小出公司　小林勝人　高橋健男　広田彰夫　及川淳子　山田敬三　千島寛　齋藤忠雄　高橋礼二郎　依田高明　栗原彬　吾孫子隆　春日井治　小坂井和夫　大西広　森博勇　長谷川順一　齋藤實　山内るり　小関光二　久保和男　有馬雅喜　柳瀬文恵　宮城恭子　黒岩満喜　黒木皆夫　高橋正宏　南村豊實　丹野雅子　早川浩市　秋吉任子　大西房子　新谷陽子　渡辺芙美子　澤田武彦　竹中一雄　川村範行　小野晃　由井格　野村芙美子　乃村晃　関明　伊藤洋平　野澤淑子　中嶋定和　寺沢秀文　鈴木幸子　山下美子　武村恵里　大津英雄　小栗勝則　加藤まり子　矢島敬二　佐藤ナヲ　キクチカズヤ　田島正夫　栗林稔　渡辺保雄　小玉正憲　錦織葆　橘村武司　千田優子　石尾喜代子　木村護郎クリストフ　酒井誠　上野千鶴子　宮武正明　藤村光子　林秀行　長澤保　野中酉夫　岩下壽之　大久保勲　近藤燿子　勝尾修　川合継美　片岡祐子　松成亮太　樗沢仁　神田秀一　大浜敏夫　塚田恵子　巻口清美　金倉美佐恵　土川克広　村田和代　堀泰雄　椎名鉄雄　藤勝徳　横山和夫　今井和江　伊原忠・泰子　柳生好春　長澤保　小池イヨ子　北村和憲　及川康年　吉岡孝行　飯島春光　行川清　清水醇　中島茂　植原映子　久保孝雄　湯本信幸　原紀道　宮下春男　柳田正子　加藤稔　石井敏夫　永沼眞由美　高木雅之

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

≪編集後記≫

会報 33 号の内容はいかがでしたでしょうか。当初は原稿がいつもより少ないかと心配もしていましたが、締め切りが迫ってくるとどんどん寄稿も増えて頁数も増えました。もちろん、かなりの新聞からの転載もあります。編集している立場から言えば、後から会報を振り返って見れば、「こんな記事があったんだ」と思うこともしばしばあり、新聞の転載は本誌の資料的価値を高めることもあるのだと思ってもいます。

しかし、すべての新聞に目を通すことは不可能です。会員の方々、支援者の方々から「こんな記事があるよ」と送っていただき、たいへんありがたいと思っております。

私が畏敬する 90 を越えた T さんの一人住まいの自宅にはテレビもなし、新聞もなし、ニュースはインターネットで少し確認するだけだとか。私によく、「テレビも新聞もないと、読書がはかどるよ」と言われます。そのことはよくわかるのですが、まだまだテレビも新聞も探せば、なかなかいい番組や記事もあります。

今回、婦人公論から澤地久枝さんと上野千鶴子さんの対談を転載しました。ご両人は、現在の日本では屈指の論客であり、読者諸氏もそのお名前はよくご存じだと思います。かつて本誌にお二人とも寄稿していただいており、上野さんはまた数年前には、本会の会員にもなっていただきました。

HP（ホームページ）を一新！

さて、会員及び支持者の方々、また読者の方々にお伝えしたいのは本会の HP（ホームページ）を一新したことです。長年、ご協力していただいた方が多忙で HP の作業もできず、さりとて私・大類はこの種の作業ができず、役員構成なども旧いままの状態でした。しかし昨年、理事になってくれた中島俊輔は、本会の事務局がある日中科学技術文化センターに来て２年ほどになり、現在事務局長として勤務し私のデスク横にいて大いに助かっております。昨年来、方正総会の折りの講演会もズームでできるようになったのは彼のお陰です。中島がいなかったら、私はハナからズームなどできないと思ってやらなかったでしょう。

中島は顔も広く、本会の HP（ホーム頁）を刷新するには打ってつけの人がいると澤津直也さんをご紹介いただき、澤津さんに HP を一新していただきました。

新しい HP を検索していただければ、会報に掲載された過去の原稿もすべて閲覧できますし、原稿を書いている名前を検索すれば、その人が書いた原稿も全部見ることができるようになっています。本当にありがたいことだと思っています。今後もＨＰの刷新作業については澤津さんに継続してお願いする予定でおります。

今後も会員、読書諸氏の原稿を歓迎します。基本的には横書きのワードで左右 30ｍｍ、主文は 10・5 ポイント、長くても 10 頁以内、次号 34 号の締め切りは来年の 2022 年３月末です。よろしくお願いします。（大類）

表紙写真撮影・大類善啓

『星火方正～燎原の火は方正から～』（第 33 号）2021 年 12 月 12 日発行

発行：方正友好交流の会　編集人：大類善啓　Email：ohrui@jcst.or.jp
〒101－0052　東京都千代田区神田小川町３－６　日本分譲住宅会館 ４ Ｆ
(社)日中科学技術文化センター内　電話：03－3295－0411　FAX：03－3295－0400
郵便振替口座番号　00130－5－426643　加入者名　方正友好交流の会